高知大学考古学調査研究報告第10冊

古墳時代終末期の大型横穴式石室にみる瀬戸内とその周辺の政治的関係

2012年３月

高知大学人文学部考古学研究室

朝倉古墳石室

高知大学考古学調査研究報告第10冊

古墳時代終末期の大型横穴式石室にみる瀬戸内とその周辺の政治的関係

2012年３月

高知大学人文学部考古学研究室

例　言

1　本書は、財団法人福武学術文化振興財団（瀬戸内海研究・活動支援助成）を受けて実施した研究の報告書である。研究の課題・組織は以下の通りである。

課　題　名：古墳時代終末期の大型横穴式石室にみる瀬戸内とその周辺の政治的関係
研究代表者：清家　章（高知大学人文社会科学系教授（人文学部専任担当））
研究協力者：佐伯　麗（高知大学卒業生）
研 究 成 果：本書

2　本書は、「第Ⅰ部　研究の目的と成果」・「第Ⅱ部　論考」・「第Ⅲ部　調査報告」の３部から構成される。

3　「第Ⅱ部　論考」では四国の大型終末期古墳に用いられる角塚型石室に関する論考を掲載した。「第Ⅲ部　調査報告」では角塚型石室である高知市朝倉古墳の調査報告を行った。

4　編集は清家が担当した。

目　次

第Ⅰ部　研究の目的と成果…… 1
第Ⅱ部　論考…… 5
　1　高知市朝倉古墳の立地と選地……清家　章…… 7
　2　角塚型石室の形態と変遷……佐伯　麗…… 21
第Ⅲ部　調査報告－朝倉古墳発掘調査報告総括編－…… 37

Ⅰ　研究の目的と成果

研究の目的と成果

1　研究の目的

本研究は、大型横穴式石室から瀬戸内を中心とした政治的関係に迫ろうとするものである。古墳時代後期後半から終末期には瀬戸内中部にあたる香川県観音寺市から愛媛県四国中央市に巨大な横穴式石室を持つ古墳が展開する。その中に角塚型石室と呼ばれる巨石を用いた横穴式石室が存在する。角塚型石室の標識となった角塚古墳は香川県観音寺市に所在する。大型石材を用いた九州系横穴式石室である。古墳時代終末期の古墳は、一般には墳丘も石室も小型化していく傾向にあるが、角塚古墳はそれに反し、直径40m以上という大規模な墳丘を持ち、石室も全長10mを測る。この角塚古墳の石室と類似する古墳が愛媛県・広島県・山口県・高知県、そして和歌山県に点在する。いずれも、古墳時代終末期における地域最大規模の大型墳丘を持っており、使用石材も大型である。当時の瀬戸内世界の大首長が採用した石室形態であることを示すとともに、共通した石室を用いているので首長間に強力なネットワークが存在したことが予想される。その一方で、角塚型石室を持つ古墳がその地域で最後の大型古墳となっていることも共通するのである。角塚型石室は、古墳時代終末期の首長間関係を鋭く示している一方、古墳の終焉と次の時代への変化を鋭敏に体現する資料とも言えるのである。

しかしながら、角塚型石室の調査と研究は山崎信二（山崎1985）が型式設定をして以来、活発とは言い難かった。しかし、近年は筆者（清家2007）や中里伸明（中里2009）・大久保徹也（大久保2009）などの論考が相次いで提出され、四国中央市宇摩向山古墳や観音寺市角塚古墳などで史跡指定に向けての調査が行われるようになってきたのであった。高知大学でも角塚型石室を内包する高知市朝倉古墳の調査を2004年から開始し、2009年に完了している。角塚型石室の研究を行う条件が急速に整ってきたのであった。そこで、財団法人福武学術文化振興財団に研究助成を申請したところ採択されたので、研究を進めここにその成果を発行することになったのである。

2　研究の成果

研究成果は第Ⅱ部の論文と第Ⅲ部の発掘調査報告からなる。第Ⅱ部の論文は研究代表者だけでなく、高知大学でともに朝倉古墳を調査した佐伯麗の論考も掲載した。その内容は本文を読

んでいただきたいが、角塚型石室を２系統に分け、それぞれの変化と相互関係を明らかにしようとした意欲的論文である。また、清家は朝倉古墳の立地が風水的選地であることを明らかにし、風水の伝播を手がかりに地域間交流を解明しようとしている。

第Ⅲ部には、高知市朝倉古墳の発掘調査報告を掲載した。上記の通り、角塚型石室の発掘調査は少なく、調査が行われても土器資料に恵まれた古墳は少なく、時期が明確でない古墳が多い。土器以外の副葬品も多くは知られていない。このことが角塚型石室研究の妨げとなってきた。高知大学が調査した朝倉古墳は、何度も盗掘にあっているものの、土器・金属器が出土し、古墳の時期を考える材料と副葬品の一端を明らかにすることができた。この成果を整理して報告することで、角塚型石室研究に有効な情報を提供できると考えた。そこで本研究課題の一つの柱として、朝倉古墳調査の整理と報告を掲げ、第Ⅲ部に報告を行ったのであった。

なお、本書は高知大学考古学調査研究報告第10冊となる。第10冊という節目に、高知大学で初めて調査を手がけた朝倉古墳とそれをめぐる角塚型石室墳の研究報告を発行できたことに、大きな喜びを感じている。研究助成を賜りました財団法人福武学術文化振興財団に心よりお礼申し上げたい。　（清家）

参考文献

大久保徹也　2009「大野原古墳群の基礎的検討」『一山典還暦記念論集　考古学と地域文化』一山典還暦記念論集刊行会、徳島：pp. 501-510

清家　章　2007「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』真陽社：pp. 447-464

中里伸明　2009「四国北東部における横穴式石室構築に関する情報共有－地域差にもとづく型式組列への試み－」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店、福岡：pp. 73-99

山崎信二　1985『横穴式石室構造の比較研究－中・四国編－』文部省科学研究費報告書（2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社、東京に再録）

Ⅱ　論　考

1　高知市朝倉古墳の立地と選地

清家　　章

はじめに

土佐の横穴式石室墳の調査を始めて10年近く経つ。高知大学が古墳調査を始めるまで、高知県では約10年、横穴式石室に限るとそれ以上の長期間にわたって、古墳調査は実施されていなかった。そのため土佐の古墳は解明されていない課題が多い。

高知大学で調査を実施するうち、古墳の立地に関して疑問をもつことが何度もあった。集落から視認しにくい場所に立地する古墳や、いくつも丘陵がある中で特定の山塊に古墳が集中する例などである。南国市明見彦山１号墳・南国市小蓮古墳など土佐を代表する古墳も目立たない谷部か丘陵にあり、それほど視界が開けているわけではない。そうした疑問は筆者だけが持ったのではないと見えて、古墳の立地については岡本健児が1968年から注目をしている。岡本は、石室の開口方向に被葬者の出身集落があるのではないかと推測した（岡本1968）。立地に着目

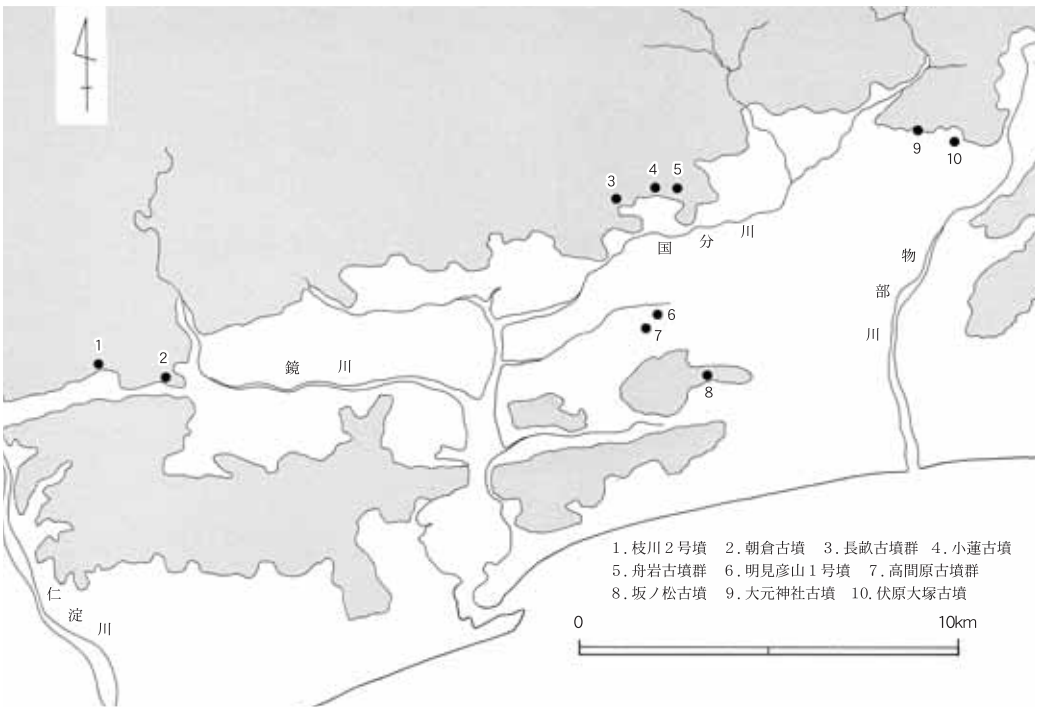


図１　本稿で言及する古墳の位置

した岡本の視点は高く評価できるものの､後述するように石室開口方向に視界を遮る丘陵があったり、谷部に石室がある場合があって、集落方向を意図した古墳立地はすべての古墳に通用するわけではない。

本書の課題となる角塚型石室を内包する朝倉古墳も谷地形にある古墳の一つである。本稿では土佐の古墳立地について、その思想的背景を探り、その思想の伝播をめぐる諸問題について考察する（図１）。この作業を以て朝倉古墳の位置づけを理解する一助としたい。

論を進める前提として土佐の横穴式石室に関する筆者の分類についておさらいをしておきたい。筆者は土佐の横穴式石室をその玄室面積から４つに分類する。小型・標準型・大型・特大型である。小型石室は玄室面積４㎡未満、標準型は４㎡以上10㎡未満、大型は10㎡以上14㎡未満の石室で、特大型は玄室面積14㎡以上の石室である。大型は高知平野に分散して存在し、丘陵や河川で区切られる領域毎にある。このことから大型石室墳はこうした領域を治める地域首長墳であると考えられる。特大型の確実な例は南国市小蓮古墳であり、香美市伏原大塚古墳もその可能性を持つ。特大型石室は大型石室を凌駕し、各時期にそれぞれ１基だけ君臨することから少なくとも高知平野全体を治める盟主的首長墳と考えられる（清家2006・清家2007）。また、こうした規模による分類以外に石室の系統差を示す分類として、角塚型・舟岩型・明見３号型の３分類がある。土佐の横穴式石室の大部分が舟岩型であり、角塚型は朝倉古墳だけである。明見３号型は小型の石室に限られ、土佐の中では古相に属するものが多い（清家2011）。

１　朝倉古墳の立地と風水

（１）朝倉古墳の立地

朝倉古墳は７世紀前半・TK217型式期の横穴式石室墳である。土佐で唯一の角塚型石室を持ち、高知市ならびに高知平野の西端に位置する。墳丘規模は不明だが、石室は巨石を用い、筆者のいう大型石室に分類される。TK217型式期の土佐では、大型石室墳の築造が朝倉以外で停止しており、朝倉古墳はこの時期の高知平野では突出した存在である。

古墳は、赤鬼山から南へのびる尾根の東斜面上にある。また、尾根の付け根や先端ではなく中程にあり、尾根の鞍部に近いところに位置している（図２）。石室はN124°Ｅ方向に開口する。土佐では南方向に石室が開口することが基本となっているが、本古墳は南というより東に開口している。そういった意味できわめて特徴的な開口方向である。古墳からは高知平野の町並みが見えるものの、赤鬼山と赤鬼山の南にある城山によって視界が遮られ、眺望が開けているとは言い難い。ただし、赤鬼山と城山に挟まれた啀内坂を眼下に見下ろすことができる。啀内坂は高知市内から仁淀川方面へ抜ける交通路となっているので、交通の要所にあるといえる。

朝倉古墳が７世紀前半で唯一の大型古墳であるとすると、特大型石室ではないとはいえ少なくとも高知平野を代表する盟主的首長墳であると評価できる（清家2007）。そうした古墳が出身集落に対する眺望を意識したと考えるには、狭い範囲しか見えない。このことから集落への眺望、あるいは集落からの眺望よりも別の要素を重視したことが推測される。

（２）風水の立地・選地

咥内坂に対する立地も朝倉古墳築造の際に重視された要素と考えるが、さらに重要な視点がある。風水的選地である。終末期古墳に対する風水的選地の研究は、河上邦彦（河上1997）の研究が知られており、来村多加史が体系化している（来村2004）。しかし、河上や来村の研究は畿内とくに飛鳥地域での研究である。地方における風水研究は個別的な古墳にとどまっており、土佐ひいては四国の古墳研究に関して風水的選地の指摘は管見の限り認められない。

来村によると、風水的立地にある古墳には、Ｅ字型・谷奥部突出型・谷側部密着型・谷奥部密着型の４類型があるという（来村2004）（図３）。

朝倉古墳は赤鬼山本体と赤鬼山から南へ延びる尾根に挟まれた谷地形に位置する。南へ延びるこの尾根は現在JR土讃線で断ち切られているが、ほんらいはJR線を越えて国道付近まで伸びていた可能性が高い。またこの尾根はまっすぐ南に延びていたというよりは、古墳のある地点

図２　朝倉古墳の立地

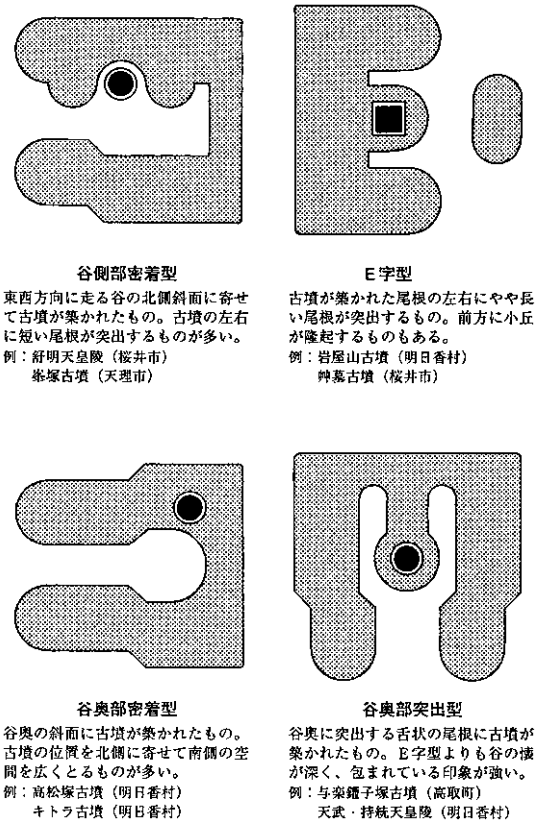


図３　古墳の選地模式図（来村2004）

からやや南のところで南東方向へカーブしていたことが地図からは読み取れる。すなわち朝倉古墳が立地する谷地は現在見えるよりも懐が深く、かつ狭い谷であったと考えられる。古墳は谷部の最奥からやや谷側へ出た尾根筋にある。この立地は、まさに来村の言う谷奥部密着型に合致する立地と言えよう。

ここでやや奇妙に思う点は、谷地形は南北方向にあるだけに、谷奥に古墳を築けば南に開口するように石室を築造できることである。風水的条件を満足させつつ、石室の南開口という原則も守れるのである。そうせずに谷奥からやや南側に古墳を築造したことには、何らかの要因があるはずである。考えられる理由としては、谷の最奥部には古墳を造る平坦面が確保できなかったということ。もう一つは咥内坂という交通の要所を意識した可能性である。古墳周辺部が住宅によって破壊されているので、要因を限定することは困難だが、古墳は現在より北側であっても平坦面は確保できたと思われる。

古墳の存する尾根は、ほんらいは南東方向にカーブしている可能性を先に指摘した。谷奥に古墳を築造すれば尾根によって南側の視界が遮られる可能性があった。そうすると咥内坂を見ることはできず、咥内坂からも古墳を視認することが困難になったであろう。南に古墳の位置をずらすことによって咥内坂を見下ろすことができるのである。

朝倉古墳の石室は角塚型であり、瀬戸内勢力との関係が想定される（清家2010・2011）。咥内坂を西に抜けて仁淀川へ出る。仁淀川からさらに西へ行けば幡多地域へ、川を遡れば伊予に出ることができる。そうした交通の要所を視界に収めることも求められ、現在の立地となった可能性が考えられる。

朝倉古墳は風水という思想と交通の要所を抑える、あるいは交通の要所から見えるという機能を両方満たすように工夫して選地が行われて築造された可能性が高いのである[(1)]。

2　土佐における風水的立地の古墳

（1）風水的立地の古墳

風水的立地にある古墳は朝倉古墳だけではない。これまで筆者が調査あるいは踏査を行った古墳の中には風水の影響と考えられる古墳がいくつか存在する。

明見彦山１号墳　この古墳は筆者が風水的立地を考えるきっかけとなった古墳である。本古墳は、直径約14mの円墳であり、大型の舟岩型石室を持つ。高知大学の発掘調査でTK209型式の須恵器が出土している。

高天ヶ原山から北東方向へV字形に伸びる２つの尾根に挟まれた狭い谷奥に古墳はある（図４）。言い換えれば南西から北東方向へ開く谷部の北西側尾根の裾近いところに古墳は立地する。尾根は急傾斜であるが、古墳が築造された場所は緩斜面となっている。S35°E方向に石室は開口する。石室からは谷の開口部や開口部の向こうにある平野部を見ることはできない。きわめて限られた眺望といえよう。この立地は朝倉古墳と類似する。来村の言う谷奥部密着型の立地としてよい。

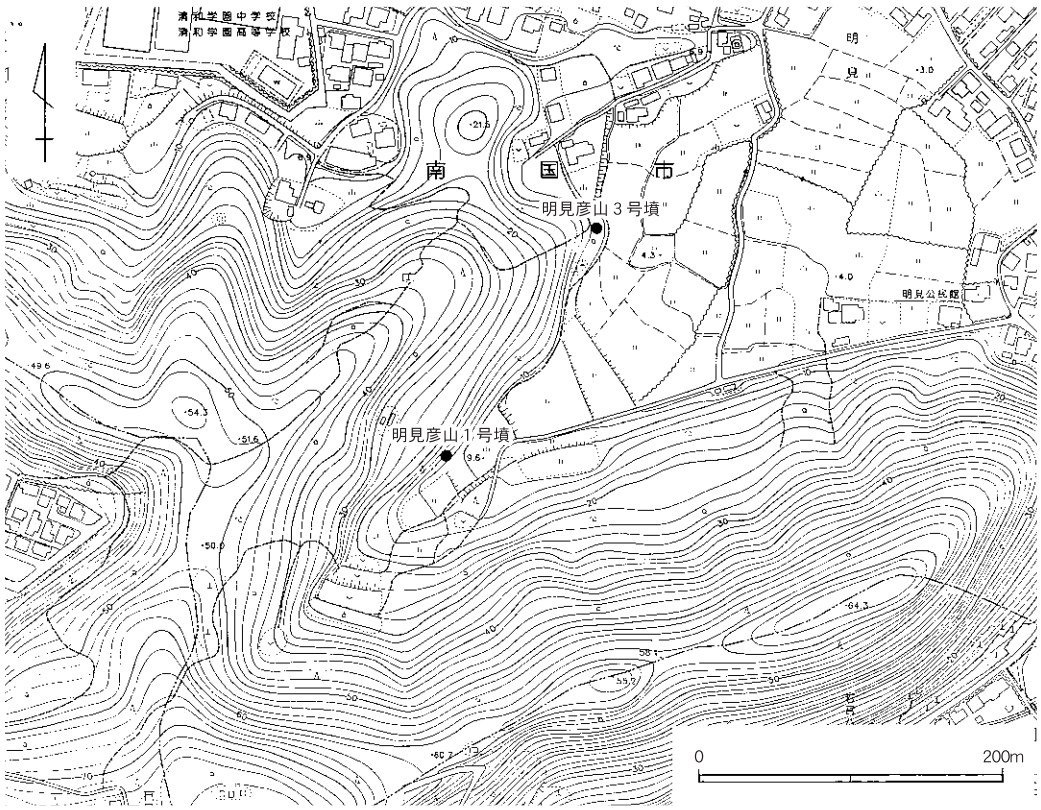


図４　明見彦山１号墳・３号墳の立地

明見彦山１号墳の存する尾根の先端には３号墳がある。３号墳は明見３号型石室の標識となった古墳である。３号墳は山寄せではあるが、風水的立地を見せていない。近接する古墳ではあるが、風水的立地に関しては違いを見せている。なお、１号墳の北側に２号墳が存在したという記録があるが、古墳の内容は不明である。

小蓮古墳　小蓮古墳は南国市岡豊町に所在する。特大型石室を持つ数少ない古墳であり、長軸28m・短軸22mの楕円形の墳丘が残っている。墳丘裾部は崖面をなしており、本来の墳丘はさらに一回り大きかった可能性が高い。墳丘規模は後述する伏原大塚古墳とならんで土佐で最大規模級の古墳である。須恵器からTK209型式期の築造と考えられる。石室はＳ33°Ｗ 方向に開口する。

高知市から国道32号線を西へ走り、一宮を過ぎて逢坂峠を過ぎると北側に四国山地の南端に位置する小丘陵が連なる（図５）。南側にも同様の丘陵が連なり、両側の丘陵に挟まれてあたかも狭い谷地形が東西に延びているように感じる。国道32号線はその谷底を走る感覚である。さらに東に進むと南側の丘陵はひとたびとぎれ、南側のみ視界が広がり、高知大学医学部キャンパス（旧・高知医科大学）が見える。大学キャンパスはもともと平坦地であったので、谷はいったん途切れていた。さらに東に進むと南側に長宗我部氏の居城である岡豊城のある岡豊山とその西側に続く通称墓地山が南に見え、再び谷地形が形成される。岡豊山の東端にいたって国道32号線すなわち谷はやや標高を上げて北側にややカーブする。体感としては、谷地形はここで終わりである。小蓮古墳は岡豊城の北西に位置し、四国山地から連なる小丘陵の南側へやや突出する尾根上に位置する。岡豊山・墓地山と小蓮古墳のある丘陵で作られる谷地形の開口部に近いところに古墳はある。

古墳周辺は住宅や畑によって旧地形が失われているが、おおよその旧地形は復元できる（図６）[(2)]。古墳のある場所は丘陵から少しだけ南へ突出した尾根上にあり、その東側は小さな谷を挟んで、これまた小さな尾根が突出している様子が認められる。そのような視点で古墳西側をみると小さな谷が入ってきており、そのさらに西側には建物で旧地形が破壊されているものの、建物がある平坦面下部の等高線をみると南へ張り出すような形をしている様子がみてとれよう。あくまでも可能性の一つであるが、小蓮古墳のある尾根の両側から小尾根が突出し全体でＥ字形を呈していた可能性がある。

以上のような小蓮古墳の立地とよく類似する古墳が来村によって紹介されている。その文章を借りて比較してみよう。「東を奥にして西へ口を開く谷の、開口部に近い北側斜面が小尾根に包まれた場所」（来村2004：p. 93・p. 104）と述べるのは、風水的立地をとる古墳の代表として来村が取り上げた桜井市安倍文殊院東古墳・西古墳と天理市峯塚古墳である。小蓮古墳は両サイドの尾根の突出がやや弱いが、それ以外は来村の記載にほぼ当てはまる立地なのである。高知平野を代表する特大型石室墳が周囲から見えにくく、古墳からの眺望も悪い狭い谷中にある

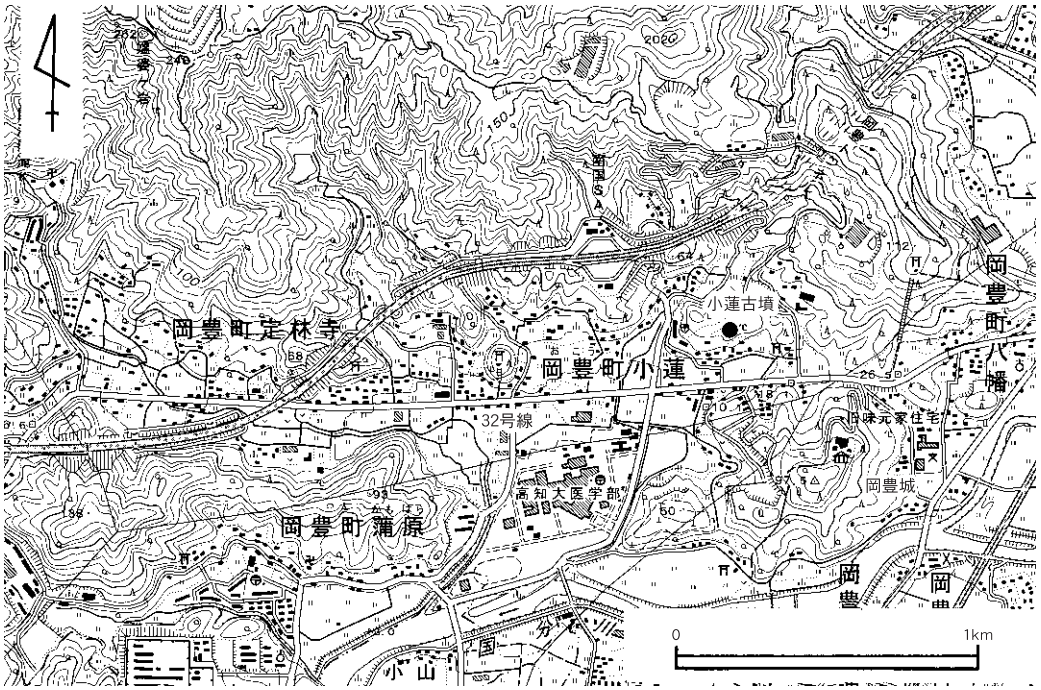


図５　小蓮古墳の位置

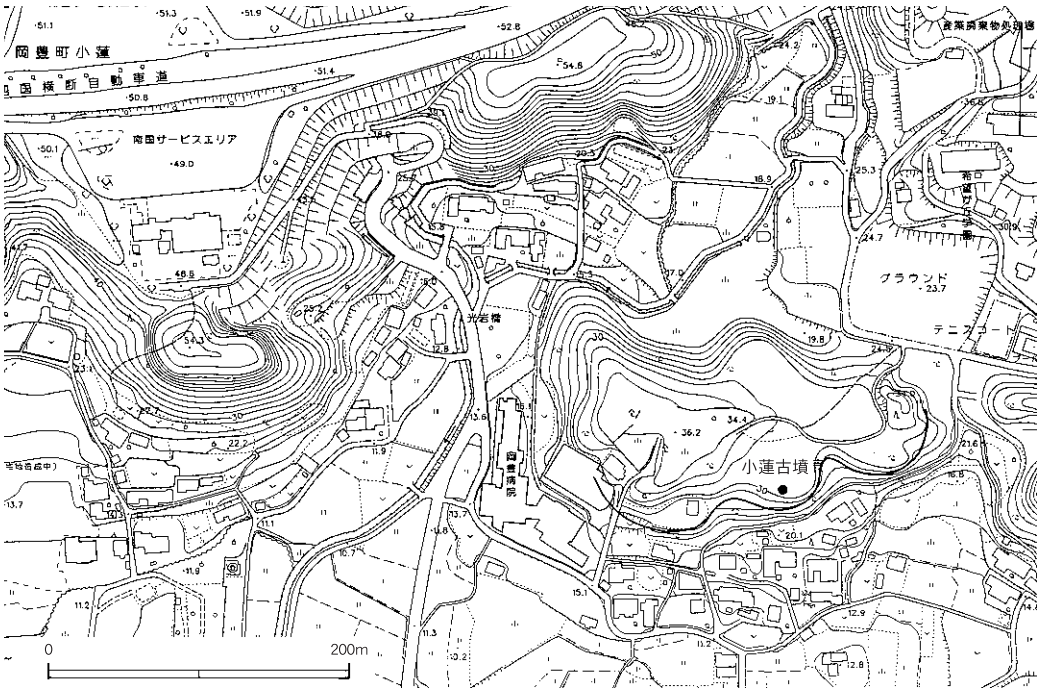


図６　小蓮古墳の立地

理由はやはり風水しか考えられない。小蓮古墳の立地は谷側部密着型として理解できるのではないか。

大元神社古墳　香美市土佐山田町楠目に所在する直径18mの円墳である。石室は戦時中に破壊されたようだが、調査の結果、標準型の舟岩型石室であったことが判明している。石室の痕跡から判明する石室開口方位はおおよそＳ22°Ｗである。報告ではTK209型式としているが、杯Ｈの口径や子持器台の形態とその蓋のツマミの形状からTK217型式の前半段階と考えた方がよい。

丘陵頂上からやや下がったところに古墳はある（図７）。この丘陵は独立丘陵に見えるが、都市計画図を見ると古墳から北西方向にある丘陵から段々畑が本丘陵につながっていることがわかる。このことから、古墳のある丘陵はもともとは北西にある丘陵から伸びる尾根であった可能性がある。さらに本古墳が存する丘陵は同じ丘陵から伸びる尾根によって東西から囲われているように見える。これは河上の岩屋山型、あるいは来村のいうＥ字型の地形に相当しよう。大元神社古墳のある丘陵は眼前が開け眺望がよい。来村の指摘する案山に相当する地形を欠く点は風水としてはやや難がある。

枝川２号墳　いの町枝川に所在する。標準型の舟岩型石室を持つ古墳である。墳丘規模は未調

図７　大元神社古墳の立地

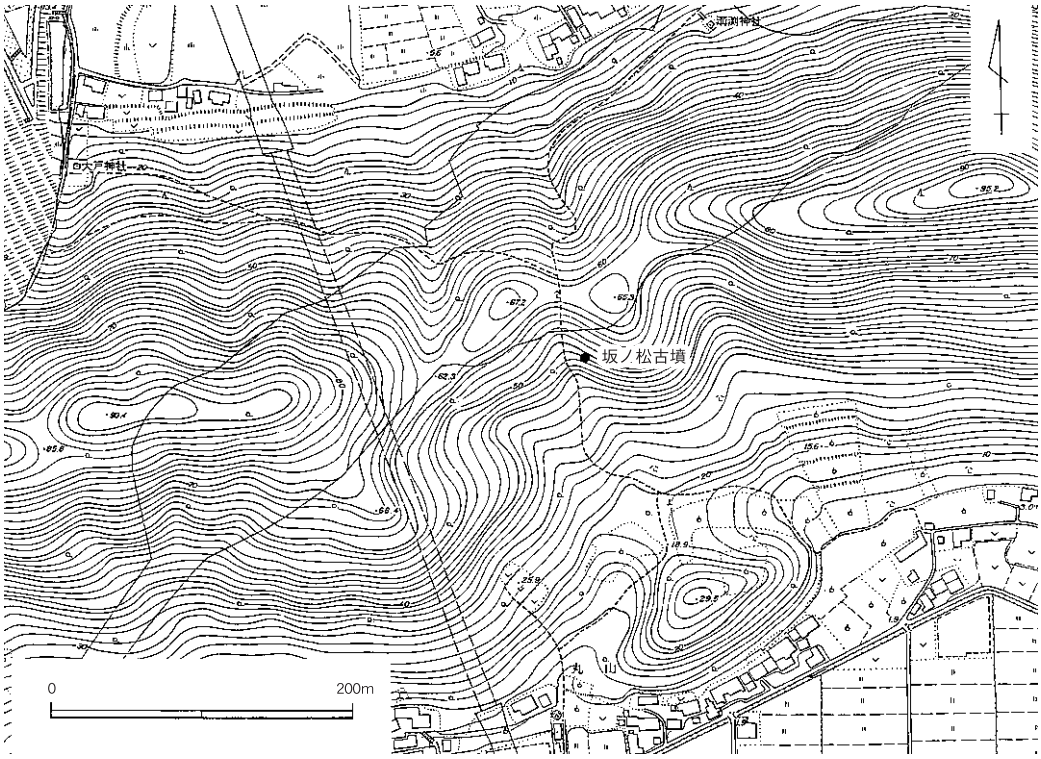


図８　坂ノ松古墳の立地

査のため不明である。出土した須恵器はTK217型式である。やはりＶ字形の谷間に位置し、南方向へ石室は開口する。谷奥部密着型と理解してよいだろう。

坂ノ松古墳　南国市稲生丸山坂ノ松越しに所在する。直径約11m程度の円墳とされ、標準型の舟岩型石室を持つ。出土した須恵器は１点しか知られておらず、７世紀代のものと考えられる。通称向山という東西に長い丘陵の南斜面にある（図８）。南山麓に向山と接続する小高い丘があり、その丘と向山本体に挟まれた谷地形が東西方向に走る。その谷は大きな視点で見れば南麓の丘の背後で収束するが、地形図をよく見ると谷は北向きに方向をかえて向山尾根頂部方向へ伸びていくことがわかるだろう。古墳は尾根頂部ならびに谷最奥部よりやや下がった地点にある。谷の方向と傾斜角度、ならびに谷の規模は異なるが、明見彦山１号墳や朝倉古墳と似た立地であることが理解できる。谷奥部密着型と理解してよいだろう。

（２）風水的立地の導入時期とその傾向

以上のように土佐の後期・終末期古墳には風水的立地にあるものが存在する。では、土佐の古墳に風水の影響が認められるのはいつからであろうか。土佐の古墳をすべて踏査したわけではないが、おおよその傾向は把握できる。

中期古墳　土佐では前中期古墳が十指足らずしか存在しない。中期に属する南国市長畝２号墳あるいは３号墳は、四国山地から連なる小丘陵の頂にあって、そこは風水的な立地とは言い難

い。同じく中期に属するとされる南国市狭間古墳は、報告書が刊行されていないので詳細な立地は不明であるが、南国市史掲載の写真を見る限り開けた尾根頂部にあって風水的立地とは言い難い（廣田ほか1979）。

明見３号型石室の古墳　TK10型式期からTK43型式期になって土佐には横穴式石室が導入されるが、まずは小型の明見３号型石室を持つ小古墳が築かれる。その標識となった明見彦山３号墳は、先述の通り尾根の先端部にあって風水的立地とは言い難い（図４）。明見３号型かその祖型と考える長畝４号墳は２号墳・３号墳と同じ場所にあって、風水を感じさせない。南国市蒲原山東１号墳と同２号墳は、旧高知医科大学のキャンパス造成時に破壊され、現在は残っておらず旧地形も詳細は不明であるが、報告書を見る限りは風水的立地かどうかは不明である。

伏原大塚古墳　伏原大塚古墳は香美市土佐山田町に所在する。出土須恵器から築造はTK43型式期と考えられる。墳丘は一辺35mを測る方墳とされ、墳丘規模は県内最大級の古墳である。県内唯一の埴輪を持つ点も特筆される。発掘当初は竪穴式石室とされていたが、近年は長方形の玄室を持つ横穴式石室であったと考えられている。伏原大塚古墳石室は、玄室面積14m^{2}の特大型石室になる可能性が高い。平面形は畿内型に類似する舟岩型石室であろうと推測される。舟岩型石室はTK209型式期以降に高知平野で主体となる石室であり、伏原大塚古墳はその導入期の古墳であると評価できよう。金銅装馬具・複数の装飾須恵器・多量の須恵器などの副葬品も、他の同時期の古墳を圧倒し、上位の古墳が持つべき副葬品をすべて取りそろえている。すなわち伏原大塚古墳は墳丘規模・石室規模ともに高知の古墳としては卓越した大きさを持つ上、舟岩型石室の初現の可能性があり、県内唯一の埴輪を持ち、優秀な副葬品を持つ記念碑的な古墳であるわけである。

伏原大塚古墳は墳丘自体が削平され、古墳周辺は住宅・病院等によって旧地形は失われてしまっている。しかしながら、おおよその立地は周辺の調査から理解できる。古墳は四国山地から続く丘陵部から台地に移り変わったところにある。物部川右岸の河岸段丘（長岡台地）の北東部にあって、南にある平野を一望にできる場所にある。墳丘の北側は伏原遺跡・ひびのきサウジ遺跡があり、弥生時代後期と古墳時代後期の集落が検出されている。すなわち古墳は、丘陵から切り離された台地に位置していることがわかる。このことから風水的選地が行われたとは考えがたいのである。伏原大塚古墳は土佐においてあらゆる意味で画期となる古墳であるが、風水的選地はこの画期に伴わなかったようである。

風水的選地の導入期　以上のことから、TK43型式期の古墳で風水的立地にあるものはなく、土佐で風水的立地にある最初の古墳はTK209型式期の須恵器を出す小蓮古墳・明見彦山１号墳と言うことになろう。

大和で風水的立地にある古墳は終末期、特にその後半期に多いが、平田梅山古墳（欽明天皇陵）や真弓鑵子塚古墳が風水的立地にあるという（来村2004）。平田梅山古墳からTK43型式の

須恵器が出土し、真弓鑵子塚古墳も相前後する時期とするならば、大和より１段階遅れて土佐に風水の思想が入ってきていることになろう(3)。

風水的立地古墳の傾向　TK209型式期以降の古墳がすべて風水的立地にあるわけではない。小蓮古墳の東側にある舟岩古墳群や明見彦山古墳群の南西側にある高間原古墳群では風水的立地と考えられる確実な地形は認められなかった。すなわち風水的選地は一様に受容されたわけではないようである。

TK209型式期以降の大型・特大型古墳である小蓮・明見彦山１号・朝倉の各古墳が風水的立地にあるので、地域首長墳以上にまず受容されつつあったようである。TK209型式期段階の標準型石室墳で風水的立地にあるものは現時点で確認できていないので、標準型石室墳に風水的選地が広がるのはTK217型式期段階からだと予想される。ただ、土佐の古墳は年代が明らかでないものが多く、その立地もつぶさには検討できていないので、この点は予察にとどめることとし、さらなる調査と検討を行ってこの課題に答えることにしたい。

3　朝倉古墳における風水的選地の背景－予察－

朝倉古墳は角塚型石室を有し、TK209型式期の盟主的首長墳である小蓮古墳に代わって、TK217型式期における高知平野の盟主的地位にある古墳である。角塚型石室は瀬戸内系の石室である。小蓮古墳と系統の異なる石室を有しつつ、築造地域も変更することから小蓮古墳と異なる勢力が高知平野における盟主権を奪取したと考えられる（清家2007・2011）。そうした政治的変動は土佐単独の動きではなく、四国あるいは瀬戸内を通じた広域の変化と連動する可能性が考えられる（大久保2009、清家2011）。さすれば、土佐ではTK209型式期から風水的選地が行われていたとしても、風水的選地は角塚型石室とともに瀬戸内から改めて導入された可能性も考えられよう。

しかし、角塚型の標識となった観音寺市角塚古墳や、大型の方墳で角塚型石室を内包する四国中央市宇摩向山古墳は風水的立地にない。明らかに角塚型石室の中心地はこの三豊地域から宇摩地域の瀬戸内中央部である。このことから朝倉古墳の石室形態は瀬戸内からの影響であるものの、その風水的立地はすでに土佐に伝わっていた選地法が影響したものと考えられるであろう。ただすべての角塚型石室の立地を調査できていないので、この点はさらなる分析が必要である。

なお、TK209型式期段階の讃岐では、高松市横岡山古墳や三豊市吉田１号墳などで風水的選地が行われたと考えられる。四国地域には点的に風水的選地が伝わっている可能性が高く、土佐の風水的選地もその点的分布の一つと考えられる。風水的選地は堪輿家と呼ばれる専門家によって行われるものであり、少なくとも大和の王陵に関しては堪輿家による選地である可能性

が指摘される（来村2004）。四国に伝わる風水的立地が堪輿家によって選地されたかどうかは不明であるが、堪輿家かその立地の意味と内容を知るものでなければ、上記のような立地を選択することはかなわないであろう。とするならば風水は人的交流を含めた密接な交流を背景として伝わってきたものと考えられる。

風水的立地にある四国の古墳に渡来系要素がとくに強く認められるわけではないので、風水的選地は朝鮮半島から直接伝わったものではないであろう。とするならば、一足先に風水的選地が伝わった大和を通じての伝播と考えられよう。しからば、風水的立地にある古墳は大和と四国各地域との、そして四国地域内における交流を示す重要な材料とも言える。今後の重要な検討課題として注目したい。

おわりに

朝倉古墳の立地は風水的立地と交通路の掌握という２つの要素を満足させることが重視されて選地が行われたと考えられた。もちろん朝倉古墳被葬者の出自集団が近くにあることは条件の一つであったであろう。自らの領域内で上記２つの要素を満足させる場所が現在の古墳の場所であったと考えられる。角塚型石室が瀬戸内勢力からの影響で土佐に導入された事は間違いないところであるが、風水的選地は朝倉古墳より一段階前に伝わった風習が作用したものと考える。

そういった意味では、瀬戸内との関係を強く見せる朝倉古墳であるが、土佐の影響も持っているのであり、７世紀前半における高知平野の盟主的首長として土佐に基盤を持ちつつ、瀬戸内世界と交流する首長の姿が古墳から見て取ることができる。

上述したとおり、いくつかの課題が残っているが、風水的立地はその内容と意味を知る者によって選地される必要がある。風水による選地が自生的でない以上、その選地法は交流によってもたらされたものである。すなわち風水的立地は古墳時代の交流を研究する際に重要な視点となるものである。今後継続して踏査をすすめ四国内の首長間交流・地域間交流の考察を進めたいと考えている。

本稿を執筆するにあたり以下の方々からご教示を得た。南国市教育委員会・坂本祐一・福永伸哉・由利崇。とくに福永伸哉氏には朝倉古墳の調査現場にも足を運んでいただき、風水的立地についてご指導を賜った。心より感謝申し上げます。

注

（1）筆者はこれまで、朝倉古墳が南というよりは東に石室が開口することについて、土佐の横穴式石室として

は例外的であり、それは朝倉古墳以外の古墳が舟岩型石室であることに対し、朝倉古墳石室が角塚型であることと関わりがあるとしていた（清家2007）。すなわち、石室の系統が異なる事と石室の開口方位が関係すると述べていた。本稿の内容はこれまでの主張と一見矛盾するように見えるが、そうではない。朝倉古墳石室が風水的選地と咥内坂の位置が考慮されて築造されたのであるが、その時に南開口という原則を重視しなかったことは、これまでの土佐の横穴式石室とは異なる築造原理である。南開口に固執しなかったという点で、他の横穴式石室と異なるのである。すなわち、石室の系統差が開口方位と関係する可能性が残されているわけである。

（2）筆者が編集した測量報告書（高知大学考古学研究室2006）と本稿に掲載した図面では、古墳の位置が若干異なっている。測量報告書では周辺地形から判断して位置を示したが、その後G.P.S.を用いて位置を把握し直したところ、本稿で示した位置が正しいと判明した。また、南国市教育委員会が作成した周辺の３次元計測図でも今回の位置が正しいことを確認している。

（3）明見彦山１号墳と３号墳は同じ丘陵尾根にありながら、３号墳が風水的立地にない理由は、３号墳がTK43型式期に属していて、風水思想が土佐に導入される前の古墳であることと、３号墳が小型石室であるので次節に述べるように階層差が反映された可能性が考えられよう。

参考文献

岡本健児　1968『高知県史　考古編』高知県、高知：とくにpp. 498-621

大久保徹也　2004「讃岐の古墳時代政治秩序への試論」『古墳時代の政治構造』青木書店、東京：pp. 80-104

河上邦彦　1997「終末期古墳の立地と風水思想」『堅田直先生古希記念論文集』（2005『大和の終末期古墳』学生社、東京：pp. 16-43に改変の上、再録）

来村多加史　2004『風水と天皇陵』講談社現代新書、東京

清家　章　2006「まとめと若干の考察」『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学考古学調査研究報告第３冊　高知大学人文学部考古学研究室、高知：pp. 23-27

清家　章　2007「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究-小笠原好彦先生退任記念論集-』真陽社、京都：pp. 447-464

清家　章　2010「横穴式石室にみる南四国太平洋沿岸地域の諸関係」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系、高知：pp. 131-143

清家　章　2011「首長系譜変動の諸画期と南四国の古墳」『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』大阪大学大学院文学研究科、大阪：pp. 29-42

廣田典夫ほか　1979『南国市史』上巻、南国市　高知：とくにpp. 186-189

遺跡文献

朝倉古墳：本書

枝川２号墳：伊野町教育委員会1985『枝川古墳群』、高知

大元神社古墳：高知大学考古学研究室編2008『大元神社古墳発掘調査報告書－総括編－』高知大学考古学調査研究報告第５冊　高知大学考古学研究室、高知

小蓮古墳：廣田典夫1972「高知県南国市小蓮古墳」『古代学研究』第65号　古代学研究会、大阪pp. 24-28・高知大学考古学研究室編2006『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学考古学調査研究報告第３冊　高知大学考古学研究室、高知

伏原大塚古墳：土佐山田町教育委員会1993『伏原大塚古墳』、高知

坂ノ松古墳：高知大学考古学研究室編2011『坂ノ松古墳測量調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第９冊　高知大学考古学研究室、高知

長畝古墳群：廣田佳久編1996『長畝古墳群』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第25集、高知

狭間古墳：廣田ほか1979（前掲））

明見彦山１号墳：高知大学考古学研究室編2006（前掲）

2　角塚型石室の形態と変遷

佐伯　麗

1　研究史と本稿の目的

研究史　横穴式石室の研究は数多く存在するが、地域によってその多寡と精粗が異なる。四国における横穴式石室研究は一部を除けば行き届いているとは言い難い状況であった。本稿で取り上げる角塚型石室の標識となる角塚古墳は香川県観音寺市(旧大野原町)にある。その周辺にある椀貸塚古墳・平塚古墳とあわせ、大野原三古墳と呼ばれる。これらは古墳時代後期後半から終末期における四国最大規模墳にも関わらず、研究はほとんど行われれず、調査もようやく緒に就いたばかりである。

そのような状況の中でも、山崎信二は早くから西日本の横穴式石室資料を収集し、各地域特有の横穴式石室を抽出しつつ、地域間関係について言及している（山崎1985)。その中で角塚型の変遷について述べている。角塚古墳の石室は、大型石材を用いた両袖式の石室で、玄室の奥壁及び右側壁に一枚石を使用し、左側壁においても二枚の石で構成され、平天井を持つ石室である。玄門の構造は玄門立柱が内側に張り出す山崎分類Ａｂ型をなす。山崎はこの石室に類似した石室を中・四国地域から６基もとめ、これらを角塚型と呼んだ。角塚型石室は30から40年程度の年代差をもち、瀬戸内海沿岸に広く分布していることを指摘した上で、それらの時期的変化の方向性を示している。そこでは側壁の段数と羨道幅指数を基準とし３時期に区別している。この変化の方向性は基本的に正しく、本稿でも追随するところは多い。ただ、当時は調査が行われた古墳がきわめて少なく、伴出する土器資料には恵まれていなかったので時期の比定は修正の必要がある。また角塚型に属する石室は山崎が挙げた他にも複数基存在し、数の増加につれ角塚型の細分の可能性が浮上した。

清家章は山崎のいう角塚型の石室に明確な定義がないことを指摘し、「袖石が羨道部に突出する両袖の石室であり、袖部の天井と同じ高さである山崎分類のＡｂ型を基本とし、角塚古墳の石室に類する石室である。」とまとめた(清家2007：pp. 454)。また、角塚型の時期的変化については、玄室幅に対する玄室高の百分率「玄室高指数」から角塚型石室を３段階に分けた。山崎と同じ３段階案であるが、玄室高指数はよりシャープに時期差を反映するという。また大久保は角塚型を含む大型石室を前壁の構造から編年を行っている（大久保2009)。

橋本達也は、中・四国地域にあって角塚型石室はそれぞれの地域において横穴式石室の最後

を飾っていることを指摘する（橋本2001）。清家も角塚型石室の分布が、それまでの瀬戸内交流を担っていた勢力の分布と異なることを指摘し、瀬戸内交流を担う新興勢力の存在を主張する（清家2011）。

本稿の目的　このように角塚型石室は後期後半から終末期前半の中・四国の政治的関係や交流関係を反映する可能性が示されており、注目される。上記の通り、中・四国地域において角塚型石室の要素を持つ古墳はこれまで研究されてきたもの以外にも存在する。それらを含めて編年を行う必要があるし、可能であればさらなる細分を進めるべきである。政治的関係や交流関係を問うには細かな変遷が不可欠だからである。そのため、本稿ではこれまで触れられてこなかった石室を新たに加えた上で、時期的変化の方向性を示す指標を抽出し、編年を行う。さらに角塚型石室の中にも系統差があることを示し、これまでの編年をより詳細にする作業を行う。また、系統差の意味するところを考察する。

本稿において対象とする角塚型石室は角塚古墳・愛媛県四国中央市宇摩向山古墳・宝洞山１号墳・原峯１号墳・愛媛県宇和島市樫木駄場古墳・松ノ本古墳・愛媛県今治市七間塚古墳・徳島県徳島市穴不動古墳・高知県高知市朝倉古墳・広島県豊田郡梅木平古墳・深安郡大坊古墳・山口県防府市岩畠１号墳の12基である。

２　時間的変化の指標

（１）分析の方法

本章では、まず角塚型石室を２系統に分類する。その上で、先行研究で行われた非計測的属性による分析、さらに各種指数を用いた計測的属性による分析を行う。山崎（1985）や清家（2007）によって分析された属性に加え、畿内型石室の諸特徴を明示する際に用いられる計測的属性（白石1966・太田1997）を角塚型でも分析することによって、どの指標が時間的変化を明確に示すのかを見てみることにしよう。

なお、各種指数は発掘で判明した数値はそれを用い、未発掘のものは現状の数値を使用している。未発掘の石室は発掘の結果、今後数値が変わる可能性が大きいが、とりあえずその数値を利用して分析を試みる。発掘の結果、数値が多少変化しても石室の変遷に支障を来さないほどの明瞭な差異を示す属性を得られるとの見通しを持っているからである。

（２）角塚型石室の２系統－横横系と横縦系

まず、角塚型石室を２系統に分けることを提案したい。従来一括して扱ってきた石室を２つの系統に細分することで、より明確な変遷を明らかにすることができると考える。玄室側石の配置、とくに側石第１段目の石材配列に着目する。角塚型に限らず横穴式石室は、時期が下るにしたがって、段数が減り巨石化が図られる。とくに第１段目の石材は大型化し、石室構造を

規定する大きな要素となる。また平面形を規定する石材であるので石室を分類する際には重要な要素である。

角塚型石室の側石をみると、その並びにバラエティが認められる。玄室側壁１段目において横長の巨石を２石置く石室と、奥壁側から横長に１石と縦長に１石置くタイプの２グループに細分できる。前者を「横横系」、後者を「横縦系」と呼称する。横横系に属する石室を持つ古墳には、樫木駄場古墳・朝倉古墳・穴不動古墳・大坊古墳がある。梅木平古墳・松ノ本古墳・七間塚古墳らは第１段目に３石以上が置かれるが、石材は基本的に横長であるので横横系に分類する。横縦系に属する石室を持つ古墳は原峯１号墳・宝洞山１号墳・岩畠１号墳・宇摩向山古墳・角塚古墳である。

以上のように２系統に細分し、非計測的属性と計測的属性による分析を以下で行う。

（３）非計測的属性による時期差

山崎の分類（山崎1985：p. 363）にしたがって、側壁の段数を軸に12基の石室を３時期の区分に当てはめていく。側石の段数に関して上記２系統で大きな違いはなく、横横系と横縦系をまとめて３時期に分けることができる。

第１段階は玄室側壁を３段から４段で構成しており、玄室側壁に用いる石材のうちもっとも大きな石材は一辺３メートル級の石材を用いる。石材と石材の間を埋めるため小型の石材や小石を多く使用しており、石室内で石材の大きさの差が激しい。玄門立柱は基本的に羨道部と同じ高さに作られている。この条件に当てはまる石室を持つ古墳は、梅木平古墳・松ノ本古墳・原峯１号墳・宝洞山１号墳・七間塚古墳・岩畠１号墳である。

第２段階では玄室側壁は２段を原則とし一部が３段で構成されている。玄室側面は奥壁側１段目の石材に巨石を用いる。第１段階に比べ全体の石材が大型化し、配置も安定感を持つようになる。この条件に当てはまる石室を持つ古墳は、宇摩向山古墳・樫木駄場古墳・朝倉古墳で

表１　角塚型石室の計測データ

石室名	玄室長(m)	玄室幅(m)	玄室高(m)	羨道長(m)	羨道幅(m)	羨道高(m)	玄室面積(㎡)
梅木平古墳	6.5	2.9	4.2	7.0	2.4	2.6	18.8
松ノ本古墳	3.9	1.4	1.2				5.3
原峯１号墳	4.7	2.0	2.3	2.5	1.5	1.3	9.4
宝洞山１号墳	4.9	2.2	2.5	7.3	1.6	1.6	5.3
七間塚古墳	5.8	2.2	2.3	4.3	1.7	1.2	14.5
岩畠１号墳	4.6	2.6	2.8	5.4	2.0	1.6	12
樫木駄場古墳	3.6	1.8	1.6	3.2	1.5	1.5	6.4
朝倉古墳	5.2	2.5	2.5	3.1	1.9	1.7	13.0
宇摩向山古墳	4.0	2.4	2.6	7.0	2.2	1.7	9.6
角塚古墳	4.3	2.5	2.3	5.7	2.2	1.8	10.7
穴不動古墳	4.3	2.2	2.0	4.0	2.0	1.8	9.5
大坊古墳	5.3	2.5	1.9	5.7	2.3	2.0	13.2

ある。

第３段階は玄室側壁を１段から２段で構成し、大型石材のみで造られるようになる。小型の石材はほとんど用いられなくなり、２石の巨石を軸にしている。この条件に当てはまる石室を持つ古墳は、角塚古墳・穴不動古墳・大坊古墳である。

（４）計測的属性による分析

以下では、角塚型石室の各指数を系統ごとに求め、その指数の変化が山崎の分類とどのように適合するかを見ていくことにしよう（図１・２）。

①玄室幅指数

横横系：全体では34から51の値を示す。第１段階から第３段階にかけて上昇傾向にあり、第３段階で穴不動古墳が最高値を示すと、大坊古墳では下降していく。梅木平古墳は、第１段階でも古相と考えられるにも関わらず、44という高い数値を示している。これは梅木平古墳が角塚型というよりもその前身である平塚型に近い形態であるため、異なる特徴を示していると考えられる。第３段階の大坊古墳で下降していくのは、横横系角塚型における変化の画期がそれ以前にあったということを示している。

横縦系：全体で42から60の値を示す。第１段階から第２段階までは指数が徐々に上昇し、第３段階になると急激に下降する。横縦系の場合も第２段階の宇摩向山古墳で60という高い値を示し、第３段階の角塚古墳で下降していく様子がみてとれる。

横横系と横縦系の玄室幅指数を比較すると、第１段階は上昇の過程であり、第２段階で一定の高い数値を示す。そして第３段階で下降していくといった共通性を持っている。玄室幅指数は２系統に区分した場合も時期的変化の方向性は同じであるということができる。

②羨道幅指数

横横系：全体では77から92の値を示す。第１段階から第２段階にかけては数値に傾向は見られないが、第３段階の２基は90以上の高い値を示すという共通性を持っている。

横縦系：全体では72から91の値を示す。第１段階から第２段階にかけて上昇していき、第３段階になると下降する。これは玄室幅指数と同様の流れを持っているといえよう。

羨道幅指数は山崎が角塚型の変遷を見ていく際に重視した指数である。しかし２系統を比べると、横横系はあまり傾向がみられないが、横縦系は変化が顕著にみられるという違いが明らかになった。

③玄室・羨道長指数

横横系：92から167の値を示す。羨道部の計測データが正確ではない松ノ本古墳を含んでいるためか、グラフからは顕著な傾向は見られない。しかし松ノ本古墳と朝倉古墳を除く数値では92から134までの間を緩やかに下降しているため、傾向が全くないとは言いきれない部分もあるが、本稿では前章で紹介した12基の石室を対象とするため、玄室・羨

道長指数は参考として扱う。

横縦系：全体で57から188の値を示す。第１段階の原峯１号墳は非常に高い数値を出しているが、その他は50から90の間にある。原峯１号墳の場合、横横系の梅木平古墳と同じように前身の要素が残っていることに原因が求められるかもしれない。

羨道幅指数同様、正確な計測データでないため参考として扱わざるを得ないが、横横系に比べ横縦系の方が明瞭な変化の傾向を見せているということを参考として挙げておこう。

④玄室高指数①

羨道の高さを玄室の高さで割り、百分比で表した指数である。

横横系：全体では52から105の値を示す。第１段階から第２段階にかけては数値に傾向は見られないが、第３段階になると90以上の高い値を示す。

横縦系：全体では56から78の値を示す。第１段階から第３段階にかけて緩やかな上昇傾向にあり、横縦系の時期的変化の方向性を如実に表している。

玄室高指数①では、２系統の違いがよくわかるグラフを得ることとなった。

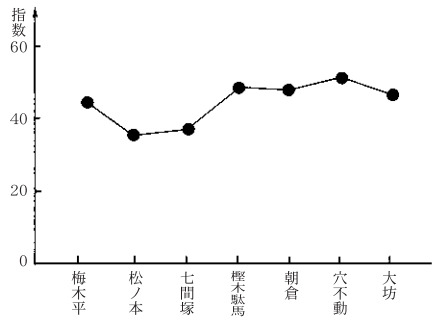
⑤玄室高指数②

玄室高を玄室幅で割り、百分比で表した指数である。

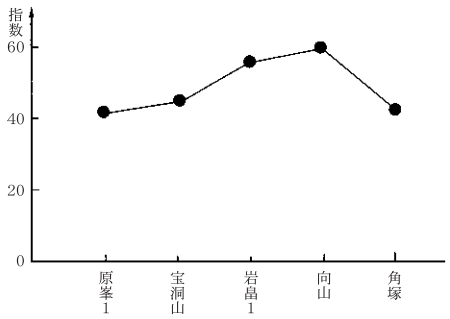
横横系：全体では76から144の値を示す。梅木平古墳の数値が突出している。これも前述の通り、角塚型の前身にあたるものであるため他の横横系とは異なった傾向を示しているものである。梅木平古墳を除いては緩やかな下降傾向にある。

横縦系：全体では92から115の値を示す。横横系と同じく第１段階から第３段階にかけて緩やかな下降傾向にあるが、数値はおおよそ100を越えており、２系統の違いを表している。

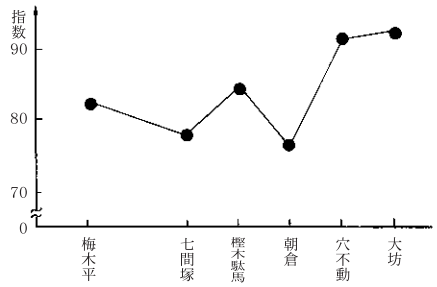
ここまで２系統に細分し、各種指数をもって時期的変化の方向性をシャープに表しているものが何であるのかをみてきた。その結果横横系で最も変化を示している指数は玄室高指数②であることがわかった。また、注目したいのは羨道幅指数と玄室高指数①の関係である。数値自体では関連があるようには見えないのだが、グラフがほぼ同じ動きを見せることから相関関係がうかがえる。このことは横横系の石室を築造するにあたって羨道幅と羨道高、玄室幅と玄室高の比を同じくしているということができるだろう。一方横縦系の時期的変化を示している指数は、玄室幅指数、羨道幅指数、玄室高指数①、玄室高指数②と多岐にわたる。その中で横横系同様注目したいものが２つある。１つ目は玄室幅指数と羨道幅指数の関係、２つ目は玄室高指数①と玄室高指数②の関係である。まず玄室幅指数と羨道幅指数の関係を見ると、グラフの動きが酷似している。つまり羨道幅が狭い時は玄室幅も狭くなり、羨道幅が広くなると玄室幅も広くなるという相関関係を持っていることが分かる。このことから玄室幅と羨道幅は築造において比率を計算されていたと考えることができる。次に、玄室高指数①のグラフと玄室高指



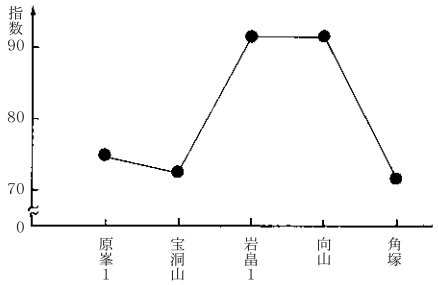
1．玄室幅指数（横横系）



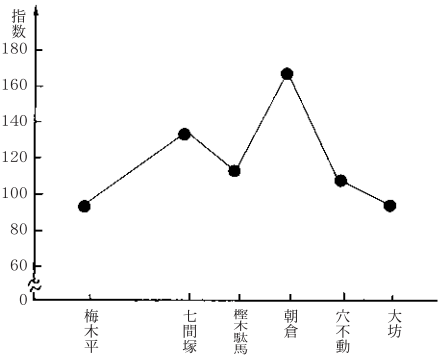
2．玄室幅指数（横縦系）



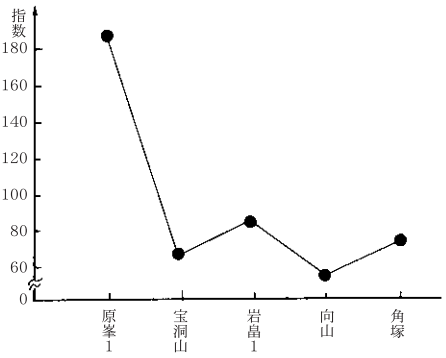
3．羨道幅指数（横横系）



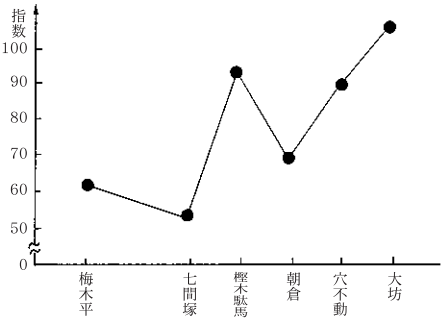
4．羨道幅指数（横縦系）



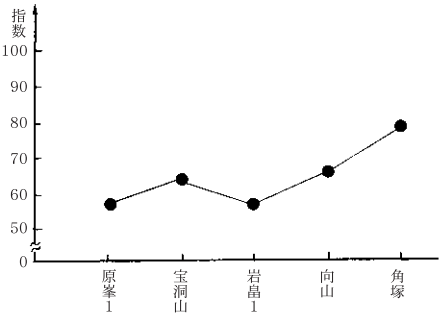
5．玄室・羨道長指数（横横系）



6．玄室・羨道長指数（横縦系）



7．玄室高指数①（横横系）



8．玄室高指数①（横縦系）

図１　角塚型石室の計測的属性分析１

数②の関係である。このグラフにおいては反比例した動きを見せる。つまり羨道高と玄室高、玄室高と玄室幅との相関関係を持っているということができる。ゆえに横縦系は築造にあたり羨道幅、羨道高、玄室幅、玄室高すべてにおいて関連を持ちつつ変遷を遂げたということができるだろう。

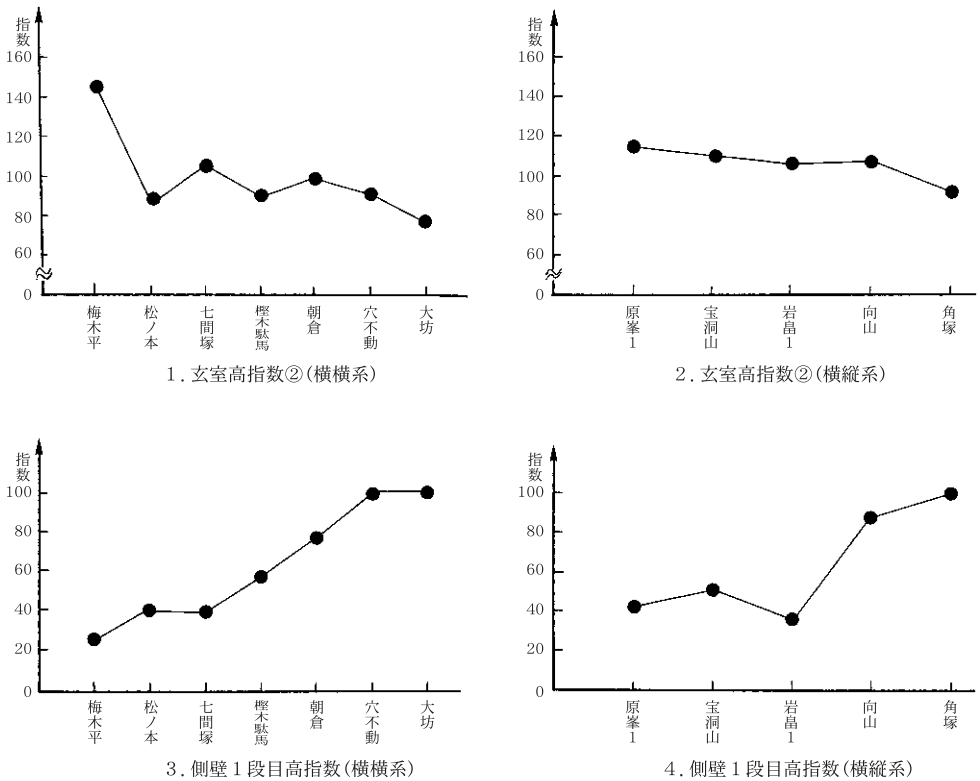
⑥側壁１段目高指数

玄室高に対する側壁１段目の石材の高さを指数化した。側壁１段目でもっとも大きな石を計測の対象とした。これにより玄室高に対する基底石の高さが理解できる。

横横系：第１段階では側壁１段目の石材が占める割合が40パーセントほどであるが、第２段階になると73パーセント、第３段階になると100パーセントを占めるようになる。

横縦系：第１段階では50パーセントの割合を占めていたのが、第２段階になると88パーセントになり、第３段階には100パーセントを示すようになる。

玄室高指数①からわかるとおり、時期が下るにつれ羨道高と玄室高の差が小さくなるのは、時期が新しくなるにつれ羨道の高さが高くなっていくのに対し、玄室の高さは低くなっているといった反比例の関係があることを示している。そしてその原理の背景には各系統において「段



1．玄室高指数②（横横系）　2．玄室高指数②（横縦系）

3．側壁１段目高指数（横横系）　4．側壁１段目高指数（横縦系）

図２　角塚型石室の計測的属性分析２

数が減少するとともに玄室側壁１段目に大きな石材を用いる」という思想が第２段階を境に次第に強くなっていった背景が浮かび上がってくるのではないだろうか。なお、側壁１段目高指数は各段階で大きな差が認められる。この差は今後発掘調査が行われて数値に変動があったとしても前後関係までは影響を及ぼすものではないと考えられる。

３　編年試案

この章ではこれまでの非計測的属性、計測的属性による分析をもとに、各系統の編年試案を組んでいく。

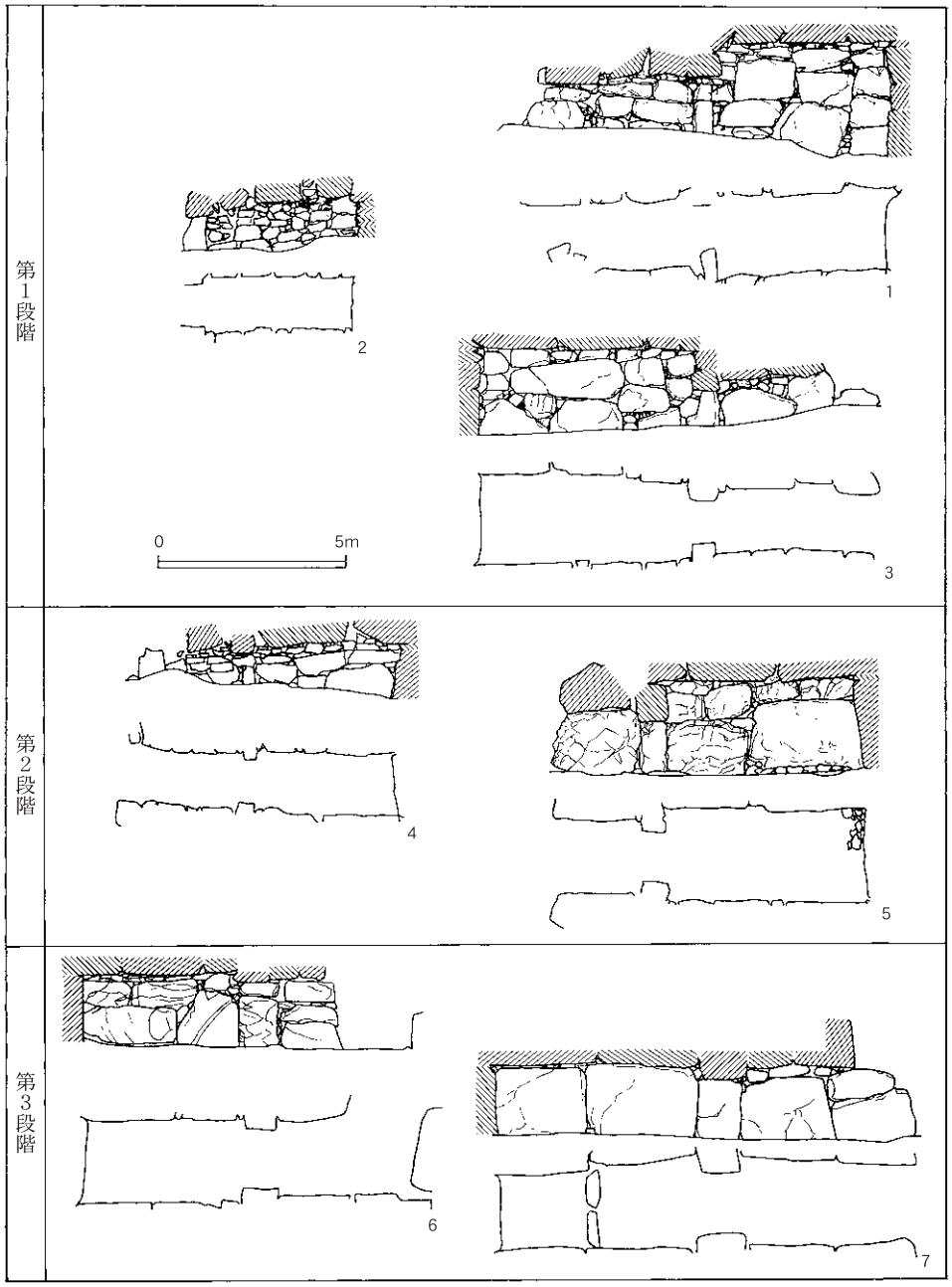
（１）横横系石室の編年

まずは第１段階から第３段階までに区別した属性が何であるのかを示していこう。横横系で時期差を明瞭に示す属性は石材の大きさ・段数、それに関わって側壁１段目高指数・玄室高指数①・玄室高指数②が変化する。これらの指数を元に変化の様子を見ていこう（図３）。

第１段階：側壁は４段あるいは３段である。側壁１段目高指数は40以下である。玄室高指数①は50から62。玄室高指数②は86～150と大きな数字を示す。

第１段階に分類される古墳は３基である。横横系の出現については後述するが、巨大な石室を持ち、かつ玄室側壁を四段で構成している梅木平古墳をこの段階のはじめに置く。梅木平古墳について、玄室幅指数や玄室高指数②で明らかとなったように角塚型石室の前身にあたると考えられる。そのため第１段階内で最も古く置くことができる。次に、小型の石材（時に小石を）用い四段で構成している松ノ本古墳を置く。この古墳は計測値データに不明な点が多々あり、指数による分析は難しい。しかし石材の大きさ・段数・側壁１段目高指数から梅木平古墳の次に新しい石室を持つと判断した。そして第１段階の最後に七間塚古墳を置く。玄室側壁の段数が３段になり、玄室幅指数も徐々に上昇する傾向が見られることに加え、奥壁に接している玄室側壁１段目の石材が存在感を示すようになったことからもこの位置に置くことが妥当であろう。

第２段階：側壁は原則２段で構成される。それによって側壁１段目高指数は58と84と第１段階より大幅に高くなる。同様に玄室高指数①も69から94と高くなり、玄室高指数②は80後半から100前後と低くなる。第２段階に分類した古墳は２基である。朝倉古墳と樫木駄場古墳は酷似しており、近い時期に築造された可能性がある。石材が大型化してきたこの時期ではあるが、そのような中でも樫木駄馬古墳が小型の石材や小石を用いて築造されていることから樫木駄場古墳を第２段階の初めに置いた。玄室高に対する側壁１段目の石材の高さの割合から判断するとこの位置で間違いないだろう。次に朝倉古墳を置くこととなる。



1．梅木平古墳　2．松ノ本古墳　3．七間塚古墳　4．樫木駄馬古墳　5．朝倉古墳　6．穴不動古墳　7．大坊古墳

図３　横横系角塚型石室の編年

第３段階：側石は１段あるいは２段で構成される。側壁１段目高指数は100である。玄室高指数①は第２段階よりもさらに増し90以上である。玄室高指数②は90以下となる。

この段階に分類した古墳は２基である。石材の大きさ、玄室高指数①・②から、穴不動古墳→大坊古墳と変遷していくと考えられる。

以上の変遷の様子をまとめ、次のような編年案を想定した。

第１段階：梅木平古墳→松ノ本古墳→七間塚古墳

第２段階：樫木駄場古墳→朝倉古墳

第３段階：穴不動古墳→大坊古墳

（２）横縦系石室の編年

横縦系の変化を示す属性は石材の大きさと側壁の段数である。その要素に加え、側壁１段目高指数・玄室幅指数・玄室高指数①・玄室高指数②も石室の変化を表すため、それらの指数をもって画期を見出すことができる。以上のことより横縦系を各段階に区別した画期を見出してきた。次に段階ごとの変遷を見ていく（図４）。

第１段階：側石は３段から４段で構成される。側壁１段目高指数は50以下である。玄室幅指数40から60未満。玄室高指数①は65未満、玄室高指数②は108から115の範囲である。

第１段階に分類した古墳は３基である。横横系同様、横縦系の出現については後述するが、小型の石材を用い、４段で構成している原峯１号墳を置く。また玄室幅指数・玄室高指数①、②からも原峯１号墳が横縦系で最も古いものということができる。次に使用する石材は大きくなるのであるが、まだ小型の石材や小石を用いて積んでいく方法をとっている宝洞山１号墳を置く。この古墳に関しても、玄室幅指数と玄室高指数②から原峯１号墳よりも新しいといえる。そして第１段階の最後に岩畠１号墳を置く。ひとつひとつの石材の大型化が見られ、玄室幅指数・羨道幅指数・玄室高指数②からも第２段階への移り変わりの時期に位置するということが如実に表れている。

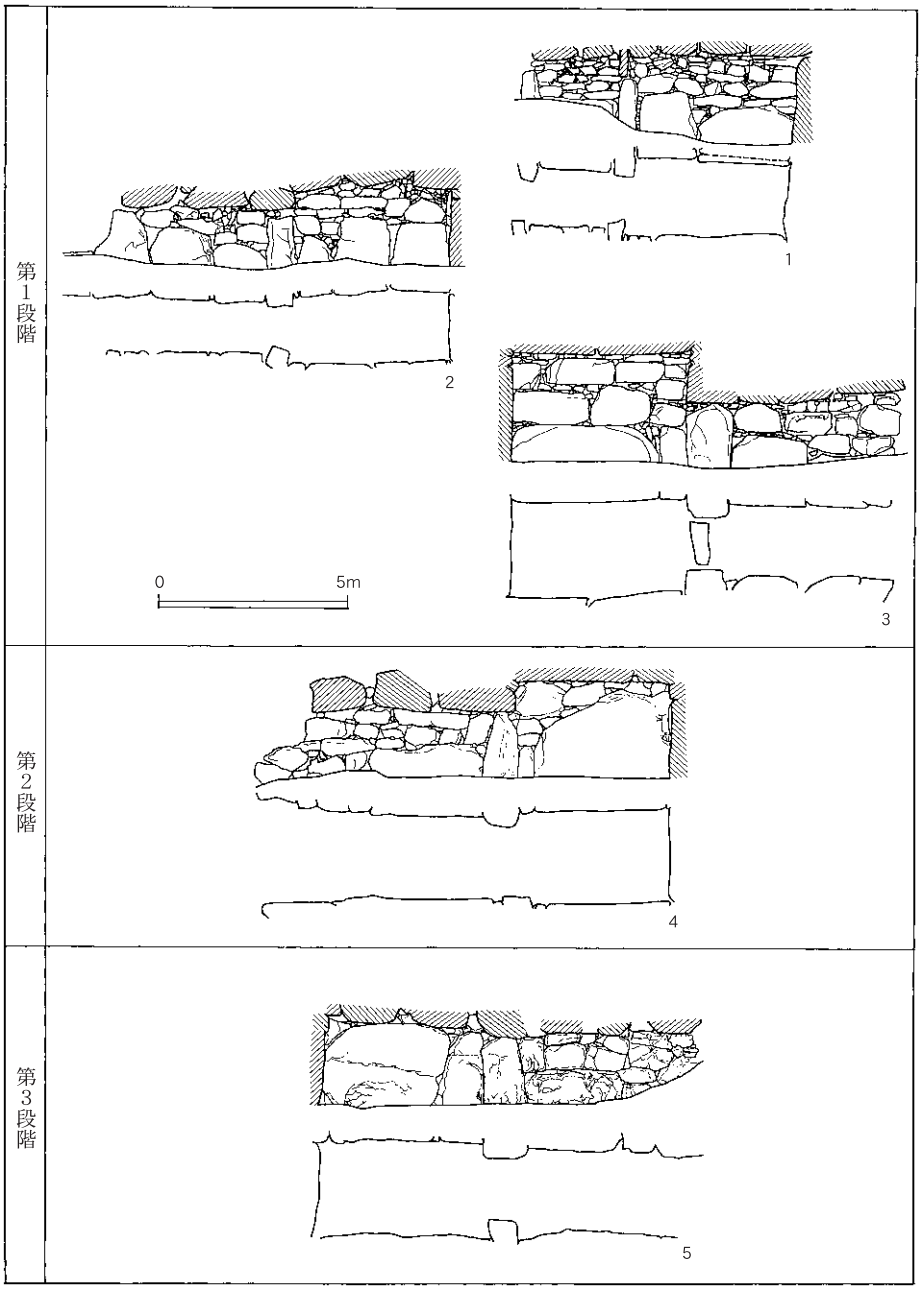
第２段階と第３段階に分類した古墳はそれぞれ１基ずつである。第２段階は宇摩向山古墳で、各段階の画期で示したように、使用する石材が大きくなり、２段で構成するようになる。またこの段階から玄室高に対する側壁１段目高指数が急激に高くなる。また玄室幅指数と羨道幅指数は第２段階である宇摩向山古墳で最も高い数値を示しているほか、玄室高指数①、②でも変化の様子を表している。第３段階は角塚古墳で、第２段階より上記の傾向が進んだことにより第３段階に位置づけられる。

以上の変遷の様子をまとめ、次のような編年案を想定した。

第１段階：原峯１号墳→宝洞山１号墳→岩畠１号墳

第２段階：宇摩向山古墳

第３段階：角塚古墳



1．原峯1号墳　2．宝洞山1号墳　3．岩畠1号墳　4．宇摩向山古墳　5．角塚古墳

図4　横縦系角塚型石室の編年

4　２系統の相互関係

これまで横横系と横縦系の２系統に細分し、それらを３時期に区別して編年試案を組んできた。しかしそれらが後に角塚型と呼ばれるように類似した形態をとるようになったきっかけや、２系統に分かれているものにどのような関係性があるのかということに関しては疑問が残っている。このことに関して、各系統の分布状況を見ながら、また編年試案を駆使しながら考察していきたい。

（１）各系統の系譜

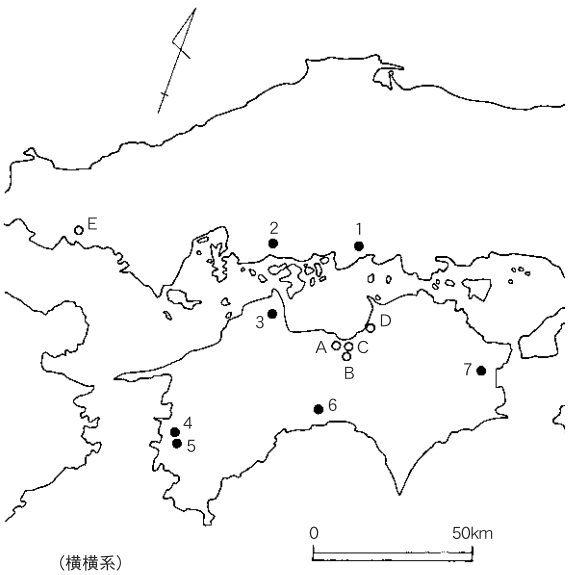
はじめに横横系の石室の出現を考えてみよう。前述の通り、横横系の最も古い段階に置いたのは広島県の梅木平古墳であるが、その後、愛媛県・高知県・徳島県と点在することとなる。中・四国地域の古墳はその地域ごとに特徴ある石室が展開しているが、角塚型石室はそうした石室の地域性にかかわらず各地で点在するように分布する。しかもその形態が周辺から影響を強く受けることもなく、まさに孤立した状態で点在しているのだ。そこから、角塚型石室を持つ古墳を築造する者の勢力や独自性を看取することができる。最も古い段階の梅木平古墳は、他の角塚型石室よりもかなり大きな石室を持つ古墳である。それはまた権力の象徴とも言えるであろう。そしてそこから派生していった横横系角塚型石室も、梅木平古墳を築造した者よりは劣ると思われるが、各地域で権力を持った者の権力の象徴であったのではないだろうか。それは山崎が考察しているような「地方豪族と中央有力豪族との同族関係が強化」された要領で、「四国地域の有力豪族と梅木平古墳を築造した者との同族関係が強化」してきた結果とも言えよう。また山崎は角塚型石室は畿内の影響を強く受けたものであるが、それは各地のＡａ型石室の基盤の上に、畿内型石室の影響を別々に受けて、Ａｂ型石室を成立せしめたが、畿内型切石積石室の直接の波及ではない（山崎1985：p. 365）としている。その論はＡｂ型をとっている梅木平古墳の出現以前の動きを考察しているものであるが、そのように考えると横横系角塚型石室は自然な流れで築造されたものであると言うことができるだろう。

一方横縦系は、横横系とは違う出自を持っている。横縦系第３段階に位置する角塚古墳は、もともと香川県観音寺市（旧大野原町）においての古墳変遷の最終段階にあたる古墳である。その大元は椀貸塚古墳であり、その後平塚古墳→角塚古墳と変遷していく。北から椀貸塚→平塚→角塚の順で、約三百メートルの間隔をおいて３基の巨石墳が一直線に並んでいる。この３基は、石室形態から見て築造された順が明らかである。椀貸塚から平塚への変遷は複室構造から単室構造への簡略化であり、平塚から角塚への変遷は単室の石室における玄門立柱部の簡略化であったと考えられているが、椀貸塚型から平塚型の変遷は、単に石室の簡略化だけでなく、畿内型石室Ｂｂ型・Ｂｃ型との融合の中で行われたとみることができる（山崎1985：p. 360）。

山崎分類のＢｂ型とは、玄門立柱が羨道側にせり出さず、玄門立柱を覆う天井石が羨道部と同じレベルで水平に並ぶもののことをいい、Ｂｃ型も玄門が羨道側にせり出さず、玄門立柱を覆う天井石が羨道部と同じレベルで水平に並んでいるうえで羨道部に縦に石を立てることをせず、羨道部と同様に数石の石をもって積み上げるもののことをいう（山崎1985：p. 309）。山崎は平塚古墳と同じタイプであるＡａ型石室に、本稿で「横縦系角塚型」石室の対象としている原峯１号墳と七間塚古墳を挙げている。その理由としては計測的属性による分析で、平塚古墳と原峯１号墳、七間塚古墳の新旧は決め難く、ほぼ同一年代を示すと考えているからである。山崎の考える平塚型と筆者の考える角塚型とは重複するものがあるが、平塚型から角塚型にかけての変遷の様子を表すには横縦系第１段階にあたる石室は必須であり、角塚型に含めた。ゆえに横縦系は平塚型から角塚型の変遷の過程から出現したものであるということができる。

（２）２系統の分布状況

横横系の分布は前述の通りだが、横縦系の分布にはある傾向がみられる。それはそのほとんどが角塚古墳周辺に存在しているということである（図５）。角塚古墳と向山古墳の密接な関係については知られているが、２系統に分けたことにより横縦系全体の密接な関係が表れることとなった。このような分布状況を踏まえ、もう一度変遷の様子を見て欲しい（図３・４）。第１段階において、横横系に比べ横縦系の方がより整った形態を持つことが分かる。言い換えれば横縦系が角塚型石室としての完成度が高いということがいえるだろう。これは横縦系の淵源である椀貸塚型・平塚型からの変遷の過程で出現したため、一定の形態を持ちつつ変化していった結果であろうと思われる。原峯１号墳の段階で急に何らかの影響を受け出現したものではなく、変遷の結果であると考えれば完成度が高いことに納得がいく。一方横横系の第１段階は、徐々に形態が定まりつつあるのだが形態の特徴をはっきりと説明できるほど整っておらず、側壁を１石積みするといった畿内の影響よりもＡｂ型を採用する九州の影響を強く残したままであるということができる。しかし第２段階になると横横系は急激に整った形態を持つようになる。このことから第１段階



(横横系)
1. 梅木平古墳　2. 大坊古墳　3. 七間塚古墳　4. 松ノ本古墳
5. 樫木駄馬古墳　6. 朝倉古墳　7. 穴不動古墳
(横縦系)
A. 原峯１号墳　B. 宝洞山１号墳　C. 宇摩向山古墳
D. 角塚古墳　E. 岩畠１号墳

図５　角塚型石室の２系統の分布

と第２段階の間に横横系と横縦系による接触があったのではないかと考える。各系統とも第２段階から畿内の影響が強くなっている面からも接触の可能性があるといえる。２系統の接触では横横系の持っていた畿内の要素を横縦系がもともと培ってきた基盤の上に受けたと理解できるであろう。そして相互に関係を持ちながら横横系は香川県を除く四国と広島で、横縦系は香川県と愛媛県の極めて狭い範囲で発展を遂げたのではないだろうか。さらに、各系統の最後の古墳（横横系では大坊古墳、横縦系では角塚古墳）の築造を境に四国地方で大型古墳の築造がみられなくなる。この事実はそれまでの古墳形態が直接の波及ではなかったのに対し、角塚古墳や大坊古墳築造後に畿内の力を直接受け、支配され始めることになった表れなのではないだろうか。

角塚型石室を持つ２系統の古墳は別々の道筋で成立したが、第１段階と第２段階の境で接触を持ち、さらに畿内の影響を強めながら各地域に造られていた。しかしそれまで間接的に影響を受けてきた畿内の力がより強力に下されることにより、四国地域の古墳築造の終焉を迎えることとなったのである。

5　まとめ

角塚型石室における様々な非計測的属性・計測的属性を分析して、２系統３段階に分類した。また２系統は異なる系譜を持ちつつも、２段階では互いに交流があったと説いた。

角塚型石室はこれまで調査が少なく不明な点が多い。近年、角塚古墳や宇摩向山古墳、そして高知大学による朝倉古墳の調査が進んでようやくその内容が明らかになってきた。それでも不明な部分は多く、本稿はそうしたことから不十分な点もいくつか残したが、本稿が中・四国における古墳研究に少しでも寄与できれば幸いである。

参考文献

太田宏明　1997「畿内型石室の属性分析」『千里山文学論集』第58号　関西大学大学院文学研究科、大阪：pp. 101-130

大久保徹也　2009「大野原古墳群の基礎的検討」『一山典還暦記念論集　考古学と地域文化』一山典還暦記念論集刊行会、徳島：pp. 501-510

國木健司　1995「香川の横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部第９回徳島大会資料　古代学協会四国支部徳島：pp. 15-38

高知大学考古学研究室編　2005『朝倉古墳測量調査報告書』高知大学考古学研究室、高知

白石太一郎　1966「畿内の後期大型群集墳に関する一試行ー河内高安千塚及び平尾山千塚を中心としてー」『古代学研究』42・43合併号　古代学研究会、大阪：pp. 33-64

清家　章　2007「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究』真陽社、京都：pp. 447-464

清家　章　2011「首長系譜の諸画期と南四国の古墳」『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』大阪大学大学院文学研究科、大阪：pp. 29-42

橋本達也　2001「四国における後期古墳の展開」『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム：pp. 93-103

富田尚夫　1998「南予の横穴式石室」『遺跡36号』遺跡発行会、愛媛：pp. 147-158

松岡文一　1959「野々瀬群集古墳の調査」『愛媛考古学3』愛媛県考古学会　第２巻第１号

松岡文一　1960『川之江市史』第一輯古墳時代篇　川之江市教育委員会、愛媛

森下英治　1995『角塚－大野原中央公園造成工事に伴う確認調査概要報告－』大野原町教育委員会、香川

山崎信二　1985『横穴式石室構造の地域別比較研究』科学研究費報告書（2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社、東京に再録。拙論はすべて再録文献からの引用であり、引用頁も再録文献のページ数を示す。）

遺跡文献・挿図出典

朝倉古墳：本書

岩畠１号墳：山崎1985

宇摩向山古墳：松岡1960。四国中央市教育委員会2009『宇摩向山古墳発掘調査報告書１』四国中央市埋蔵文化財調査報告２、愛媛

穴不動古墳：天羽利夫1973「徳島県下における横穴式石室の一様相」『徳島県博物館紀要』第６集　徳島県博物館、徳島

角塚古墳：観音寺市教育委員会2009『香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会報告書』、愛媛

樫木駄場古墳：富田1998。なお、計測値は佐伯が実地に観察した結果を記している。

七間塚古墳：山崎1985

大坊古墳：山崎1985

梅木平古墳：山崎1985

原峯１号墳：山崎1985

宝洞山１号墳：松岡1960

松ノ本古墳：富田1998

Ⅲ　調査報告－朝倉古墳発掘調査報告総括編－

例　言

1　本書は高知市朝倉字宮の奥小字三月田に所在する朝倉古墳の調査報告である。

2　朝倉古墳は測量調査も含め３回にわたって調査している。調査はすべて高知大学人文学部人間文化学科考古学研究室が主体となって実施し、清家章（人文学部教授）が担当した。調査は以下の日程で行われた。

第１次調査：2004年８月５日～８月15日　墳丘測量調査・石室実測調査

第２次調査：2008年８月２日～９月１日　墳丘・石室発掘調査

第３次調査：2009年８月17日～９月25日　墳丘・石室発掘調査

3　各調査についてはそれぞれ報告ならびに概要報告をすでに行っているが、本報告は未報告分を整理し、これまでの成果を統合して現時点での総括を目指したものである。これまでに発行した朝倉古墳関連の調査報告書は以下の通りである。本報告は以下の内容を基礎に編集されている。

第１次調査：高知大学人文学部考古学研究室編・発行　2005年『朝倉古墳測量調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第１冊

第２次調査：同編・発行　2009年『朝倉古墳発掘調査概要報告書』高知大学考古学調査研究報告第６冊

第３次調査：同編・発行　2010年『朝倉古墳発掘調査概要報告書Ⅱ』高知大学考古学調査研究報告第８冊

4　また、各年次の調査と整理作業には以下の研究助成を用いて行った。その負うところを記し、感謝の意を示したい。

第１次調査：財団法人福武学術文化振興財団研究助成。

第２次調査：日本学術振興会科学研究費基盤研究（Ｂ）。

第３次調査：財団法人三菱財団学術研究助成。

本報告にかかる整理作業は財団法人福武学術文化振興財団（瀬戸内海文化研究・活動支援助成）を得て実施した。

5　写真の撮影は渡邊可奈子・岡本治代と清家が主として担当した。

6　挿図のうち図１～３・34・36の方位は真北を、その他は磁北を示す。標高は海抜を示す。

7　図３は国土地理院発行の５万分の１地形図を利用した。

8　石室の左右は、奥壁から入り口を見た時の左右を示す。

9　本書の執筆は、清家章・枡家豊・渡邊可奈子・馬場省吾・岡本治代・矢部俊一・嶋圭太・藤井雅大が担当した。分担は文末に示した。

10　本書の編集は、上記調査概要報告書を参考にして清家が担当した。

目　次

第Ⅰ章　調査経過…… 45
1　周辺の遺跡…… 45
2　調査の経緯と経過…… 48
（1）過去の調査…… 48
（2）調査の契機…… 48
（3）調査経過…… 49
（4）調査参加者…… 50
3　謝　辞…… 52
第Ⅱ章　調査成果…… 53
1　墳丘の調査成果…… 53
（1）墳丘の現状…… 53
（2）墳丘調査の成果…… 54
（3）墳丘の復元…… 57
2　石室調査区の成果…… 58
（1）調査区の設定…… 58
（2）発掘の成果…… 58
（3）石室の構造…… 68
第Ⅲ章　出土遺物…… 71
1　出土遺物の種類…… 71
2　土　器…… 71
（1）古墳時代の土器…… 71
（2）古代・中近世の土器…… 75
3　金属器…… 78
（1）古墳時代の金属器…… 78
（2）近世～現代の金属器…… 79
第Ⅳ章　総　括…… 81
1　調査成果のまとめ…… 81
2　朝倉古墳の意義…… 82
（1）朝倉古墳の編年的位置…… 82
（2）石室の系譜…… 83
（3）土佐の終末期古墳と朝倉古墳…… 85
（4）瀬戸内と朝倉古墳…… 86

図版目次

図版			図版		
1	1	古墳の立地	13	1	９Ａ区・10Ａ区敷石（北から）
	2	古墳遠景		2	８Ａ区床面と盗掘坑断ち割り
2	1	1971年当時の朝倉古墳		3	敷石検出状況（玄室８Ｂ区）
	2	開発前の朝倉古墳		4	敷石検出状況（玄門部）
3	1	横穴式石室掘削前写真	14	1	玄室右側壁（羨道から）
	2	横穴式石室掘削前写真２		2	玄室左側壁（羨道から）
4	1	天井石露出状況１（北から）		3	玄室右側壁（奥壁から）
	2	天井石露出状況２（西から）		4	玄室左側壁（奥壁から）
5	1	墳丘第１トレンチ（西から）		5	羨道右側壁
	2	墳丘第１トレンチ（南から）		6	羨道左側壁
6	1	墳丘第２トレンチ（北から）		7	Ｅ１Ａ区南拡張区南壁
	2	墳丘第２トレンチ（南から）		8	羨道右側壁先端部
7	1	羨道入り口	15	1	古墳時代の土器１
	2	前庭		2	古墳時代の土器１裏面
8	1	石室正面	16	1	古墳時代の土器２
	2	玄門		2	古墳時代の土器２裏面
9	1	羨道・玄室	17	1	古墳時代の土器３
	2	玄門・羨道床面		2	古墳時代の鉄器
10	1	玄門と床面（奥壁から）	18	1	古代・中世の土器
	2	断ち割り後の玄門と床面（奥壁から）		2	古代・中世の土器裏面
			19	1	瓦器
11	1	玄室全景		2	瓦器裏面
	2	玄室全景（断ち割り後）	20	1	近世陶磁器
12	1	玄室奥壁		2	青銅器
	2	玄室床面			

挿図目次

図１　朝倉古墳の位置（赤畠製図）…… 45
図２　朝倉古墳の立地（枡家製図）…… 46
図３　周辺の主な古墳（辰見製図）…… 47
図４　石室実測調査風景（2004年）…… 51
図５　旧考古学実習室での図面整理（2004年）…… 51
図６　発掘調査風景（2008年）…… 51
図７　発掘調査風景（2009年）…… 51
図８　写真撮影風景（2009年）…… 51
図９　測量調査を終えて（2004年）…… 51
図10　埋め戻しを終えて（2008年）…… 51
図11　調査を終えて（2009年）…… 51
図12　墳丘周辺図（河鰭製図）…… 53
図13　墳丘測量図（河鰭製図）…… 55
図14　調査区配置図（瀧宮製図）…… 55
図15　墳丘第１トレンチ平面図・土層断面図（嶋製図）…… 56
図16　墳丘第２トレンチ平面図・土層断面図（村上製図）…… 57
図17　石室調査区・区割り設定図（野口製図）…… 58
図18　上部の敷石に挟まれた土師器（９Ａ区）…… 59
図19　短頸壷出土状況…… 59
図20　石室床面とサブトレンチ設定状況（岡本・清家製図）…… 60
図21　石室調査区実測図（岡本製図）…… 61～62
図22　石室調査区縦断土層図（瀧宮製図）…… 63
図23　石室調査区横断土層図（石井・瀧宮・村上製図）…… 64
図24　８Ａ区断ち割り南側土層図（辰見製図）…… 65
図25　前庭部平面図・土層図（岡本製図）…… 67
図26　１Ａ区・Ｅ１Ａ南拡張区土層図（森田製図）…… 67
図27　崩落した石材（清家製図）…… 69
図28　礫裏からの遺物出土状況…… 69
図29　古墳時代の土器（山口製図）…… 72
図30　古代・中世の土器（岡本製図）…… 75
図31　近世陶磁器（岡本製図）…… 77
図32　金属器（藤井製図）…… 78

図33　角塚型石室の系統…… 84
図34　盟主的首長墳の移動（清家製図）…… 85
図35　天満１号墳石室（清家製図）…… 87
図36　角塚型石室と関連する石室の分布（清家製図）…… 88

（製図は調査・整理作業参加者により、その姓名は50頁参照のこと。）

第Ⅰ章　調 査 経 過

1　周辺の遺跡

朝倉古墳は、高知市朝倉字宮の奥に所在する。高知市は高知県の中部に位置し、なかでも朝倉は高知市の西部にあたり、いわゆる高知平野全体においても西端に位置する（図１・図３）。

朝倉古墳は、高知市西部の北に広がる山々の一つ、赤鬼山の中腹から南向きに派生する尾根の東側斜面上方にある。赤鬼山の南側山腹と古墳のある尾根とでＶ字状の谷が形作られ、その谷奥からやや南に古墳は位置する。小高い場所に立地しているにも関わらず、さして眺望は開けているわけではない。それでも東は鏡川流域の平野部を見ることができる。南には中世に朝倉城が築かれた城山が間近に迫っており、城山と赤鬼山の間にある啀内坂を西に抜ければ伊野・枝川方面へと抜け仁淀川に至る。つまり、当古墳は、高知平野の中心部から吾川方面及び高知県西部に向かう上での交通上の要所を見下ろす場所にある（図２・図３）。

土佐には、いわゆる古墳時代前半期に属する古墳はきわめて少ない。また、確実な前方後円墳が確認されていないなど、西日本ではきわめて特異な地域である。前半期に遡る可能性のある古墳としては、幡多地域にある宿毛市高岡山古墳群と宿毛市曽我山古墳、高知平野では南国市長畝２号墳・南国市狭間古墳などが挙げられるにすぎない。したがって、土佐では横穴式石室を内包する後期・終末期古墳が主として展開している。

東西に広い高知平野において、後期古墳が数多く展開するのは南国市を中心とする東部地域である。高知平野において最も古い横穴式石室を有する古墳も南国市にあり、長畝４号墳と呼ばれる。竪穴系横口式石室とされてきたが、明見彦山３号墳の横穴式石室に類似するとの指摘もある（清家2011）。出土した須恵器もTK10型式併行期に相当することから長畝４号墳は当地域における横穴系埋葬施設の初現であると考えられる。これに続くと目されるのが南国市明見彦山３号墳・南国市蒲原山東１号墳・高知市高間原１号墳などである。明見彦山３号墳・蒲原

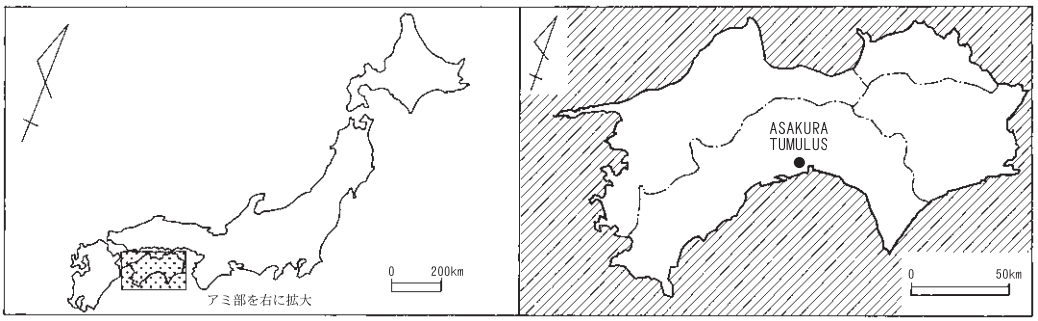


図１　朝倉古墳の位置

山東１号墳は長畝古墳群にも位置的に近く、両者の関係が問われるところである。また、同時期に香美市土佐山田町に伏原大塚古墳が築造される。調査当初は竪穴式石室墳であるとされてきたが、近年は横穴式石室であると評価されるに至っている。一辺35ｍの方墳とされ、県下最大規模の墳丘を持つ。

TK209型式以降、高知平野の北東に面した丘陵上に盛んに横穴式石室墳が築造される。南国市小奈路古墳や、高知三大石室の一つである南国市小蓮古墳、高知県最大規模の古墳群である南国市舟岩古墳群などである。同時に高知市秦泉寺古墳群やいの町枝川古墳群などのようにこれまで古墳が築造されていなかった高知平野西半まで横穴式石室が見られるようになる。

７世紀代にも舟岩古墳群や高間原古墳群の築造は続いている。朝倉古墳は７世紀に築造された大型石室を有する古墳である。これまで見てきたように、高知平野の古墳は多くがその北東部の丘陵上に集中し、現在の区分でいうならば南国市から香美市に古墳築造の中心があったということができる。そのような中で朝倉古墳は中心から西に離れた地区にある点で特徴的である。石室も他の古墳に比べ、玄門立柱石が顕著に内側にせり出すなど大きな違いをみせる。このような違いを持つ古墳が、どのような背景を持ってこの地に築かれるのか、また南国市から香美市にある古墳との関係も問われるところである。　（枡家・清家）

図２　朝倉古墳の立地

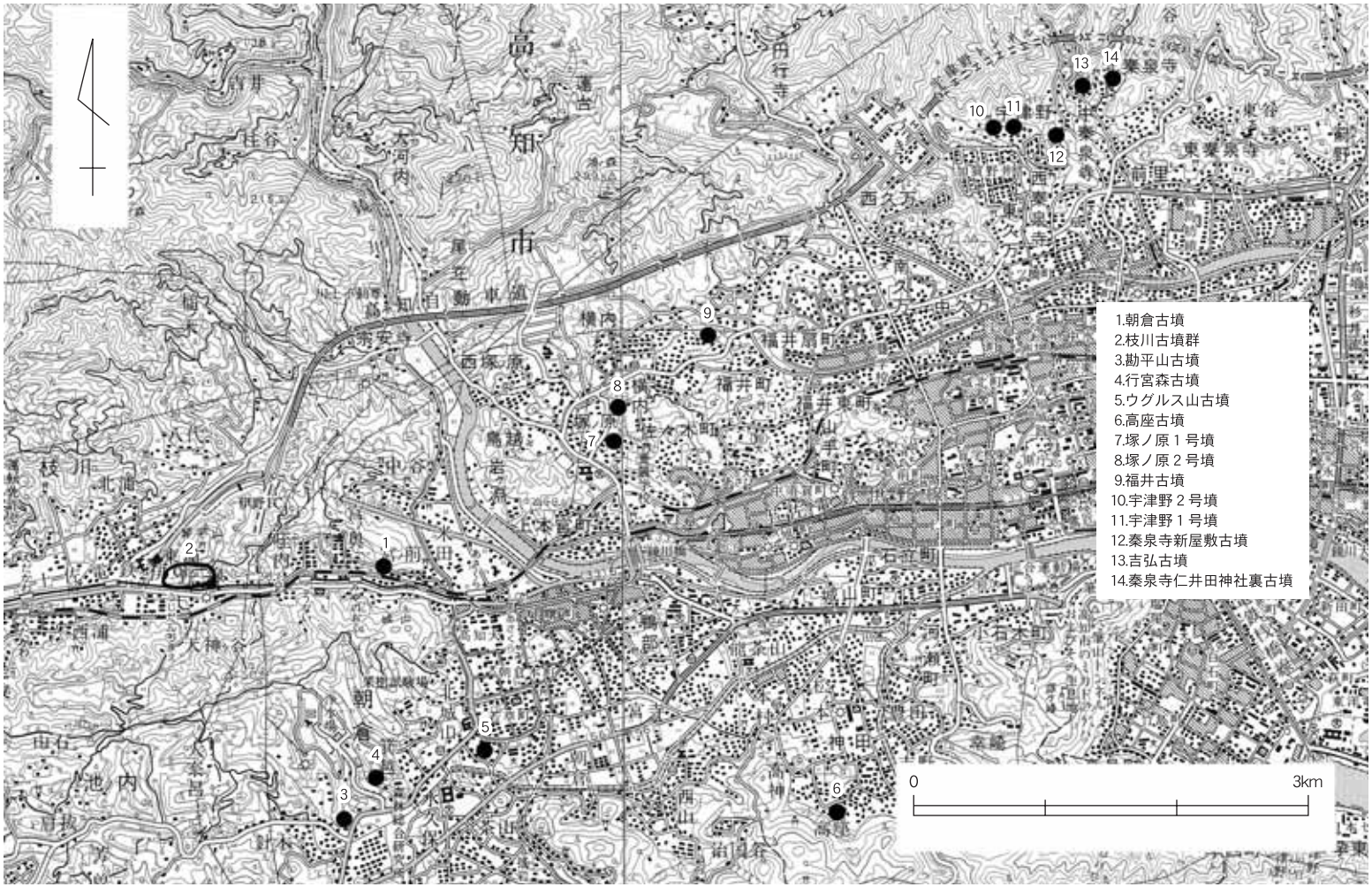

1.朝倉古墳
2.枝川古墳群
3.勘平山古墳
4.行宮森古墳
5.ウグルス山古墳
6.高座古墳
7.塚ノ原１号墳
8.塚ノ原２号墳
9.福井古墳
10.宇津野２号墳
11.宇津野１号墳
12.秦泉寺新屋敷古墳
13.吉弘古墳
14.秦泉寺仁井田神社裏古墳
0
3km

図３　周辺の主な古墳

2　調査の経緯と経過

（1）過去の調査

朝倉古墳はわれわれが調査に入る前から数度にわたる調査が行われている。朝倉古墳に関わる文献からそれらの調査を順に並べてみると以下のようになる。

明治初年　石室の調査。甲冑・馬具・鉄鏃・須恵器が出土（安岡1953）。

1930年　朝倉村青年団による調査。標柱・説明板の設置。墳丘測量（高知新聞1930年）。

1935年　安岡源一による石室調査。鉄鏃１本と須恵器破片多数出土（安岡1953）。

墳丘の調査は、1930年11月４日付けの高知新聞によれば、青年団によって測量が行われたようであるが、その図面は現在に伝わっていない。1930年代までは墳丘盛土も遺存していたようであるが、後の開墾で盛土は流出し、天井石が露出するようになったようである。その後、1970年以降、石室周辺に住宅開発の波が及んだ。この結果、石室に通じる通路と石室だけを残して、石室を取り巻くように擁壁が建設された（図13）。この時に調査が行われていないことはきわめて残念なことであった。そのため、墳丘の旧状を知る術はこの時にほとんど失われてしまったからである。

石室は、明治と1935年の少なくとも２回の調査が行われたようである。しかし、出土遺物は現存しておらず、図面も残されていない。我々が調査に入るまで石室の実測図も廣田典夫による略測図（廣田1991：p. 285）が、公開されている唯一のものであった。　（清家）

（2）調査の契機

以上のように、朝倉古墳は土佐三大古墳の一つに数えられ、高知県指定文化財でありながら古墳の基礎的資料は作成されずに来た。さらに墳丘周囲まで住宅開発が及んでいるので、今後の保存処置ならびに活用の計画を考えるためにも、調査を実施して古墳の内容を明らかにすることは高知県の考古学ならびに文化財保護にとって重要であると考えられた。

高知県では大学に所属する考古学専任教員が長らく不在であった。清家が2003年に赴任して、高知大学で本格的に考古学教育が始まることとなったのである。考古学教育を開始するに及んで、遺跡調査実習とその整理報告実習が学生教育に不可欠と考えた清家は、調査遺跡の候補を模索していた。大学による調査は、学生教育とともに研究活動であり、地域に貢献するものでありたいと清家は考えていた。それには、長期にわたって一環したテーマで調査を行うことが望ましい。そこで高知大学考古学研究室の調査・研究テーマを高知の後期・終末期古墳に設定したのであった 。横穴式石室墳は高知県内にも数多く存在し、継続的に調査が可能である。また、高知県では2004年段階でおおよそ10年近く古墳の調査が実施されておらず、古墳資料が充実しているとは言い難い状況であった。われわれの調査により資料をわずかながらでも増やし

ていくことは、地域の文化財行政や教育に貢献するものと考えられた。

朝倉古墳が高知の歴史を語る上で重要な古墳であることは先述の通りである。基礎的資料を作成するだけでも十分に教育的効果・学問的意義・社会的意義はあると考えられた。大学の至近にあることを含めて上記の条件に合致するので、初めての調査対象としては最適と考えられた。そこで、2004年に本古墳の墳丘測量・石室実測調査を開始したのであった（第１次調査・高知大学2005）。

その後、県内でさまざまな古墳の調査と研究を続けていく中で朝倉古墳が瀬戸内と強い関連を持つだけでなく、古墳時代後期から終末期における土佐の首長勢力の動態を考える上で欠くことのできないものであることが明らかとなってきた。そこで高知大学考古学研究室は、2008年度（第２次調査）と2009年度（第３次調査）に朝倉古墳の発掘調査を実施したのであった。

（清家）

（３）調査経過

2004年度調査（第１次）の調査経過　調査は８月５日から15日までの間で行った。併合トラバースを墳丘に設定し、平板で100分の１スケールの測量図を作成するとともに、10分の1スケールの石室実測図を作成した。高知大学初めての考古学調査であったので、参加学生で遺跡調査を経験している者はいなかった。そこで大阪大学から当時大学院生であった三好玄氏を招き、学生を指導してもらうとともに、考古学学生の見本となってもらった。作業は遅々として進まず、にわか雨にも苦しめられたものの、三好氏らの活躍で無事調査は終了した。　（清家）

2008年度調査（第２次）の調査経過　２年で発掘調査を行う計画を立て、１年目は玄室と墳丘の調査を行い、２年目は墳丘の補助的調査と羨道部・前庭部の調査を行うこととした。古墳は住宅開発のため、石室周囲を擁壁で囲まれた状態にある。そのため墳丘調査を行う場所は限られていた。墳丘の情報を得られる唯一の場所は石室北部と北東部だけであった。そこで、2008年度は墳丘第１トレンチを石室北東部に設置した。

また石室部分は玄室を中心に調査を行い、玄室奥壁沿い、あるいは右側壁沿いに石室床面の敷石を検出することができた。ただ、床面の８割以上は盗掘あるいは乱掘の手が及び、玄室床面中央部は敷石が残っていなかった。盗掘坑の一部を掘削した結果、敷石は地山の上にではなく、地山の上に何層か盛土を積んで敷石を置く面を形成していることが明らかとなっている。2008年度は調査期間が限られていたため、羨道と前庭部分は2009年度以降に行うこととし、その時の参考にするため玄室部分の土層観察用畦は基本的に残したままで土嚢をもって埋め戻したのであった（高知大学2009）。調査は８月２日から開始し、９月１日に撤収した。酷暑の中であったが、参加した学生の献身的な努力により調査は終了した。　（清家）

2009年度（第３次）の調査経過　発掘調査２年目は、前年度に調査を行うことができなかった石室羨道部・前庭部を中心に調査を実施した。玄室部分も再掘削し、盗掘坑の深さ等を確認す

るため土層観察用の畦沿いに十字形のサブトレンチを設け、調査した。また墳丘の情報を少しでも得るために石室天井石北側に墳丘第２トレンチを設定している。

2009年８月17日から調査を開始した。玄室とおなじく羨道部も撹乱が甚だしかったが、床面を検出することができた。このことにより玄門部分の様相を明らかにすることができた。前庭部も撹乱が激しかったものの、羨道長を確定するという目的は達せられた。

この年も酷暑のため調査員の消耗は激しかったが、学生は弛むことなく作業を続けた。墳丘第２トレンチは前年度の経験が生きて順調に調査が進行し８月20日には掘削が終り、９月７日にはほとんどの作業が終了している。

羨道床面と前庭部盛土は玄室内の床面と土壌の色が異なり､床面を判定することに苦慮した。しかし、調査員のねばり強い作業によって床面を検出することができた。羨道部左側の側石がやや内側に傾いているので、土層観察用畦を除去するのはためらわれたが、最終的には玄室・羨道をふくめて畦はすべて撤去した。９月16日には掘削が終了し、９月18日には石室の写真撮影を行った。９月20日には関係者説明会を開催したところ十数名の参加者を得た。同24日には実測作業もすべて終わり、同日から埋め戻しを開始した。墳丘第２トレンチ・石室ともに土嚢を使って埋め戻し、表面だけ土を被せている(1)。９月25日にすべての作業を終了し、大学へ機材等を撤収している。（清家）

（４）調査参加者

調査には高知大学人文学部考古学ゼミ生ならびに人文学部１～２年生が主として参加した(学年は当時)。各年次の調査参加者は以下の通りである。

2004年度（第１次）：三好玄（大阪大学大学院生）・上田祥子・徳丸将・枡家豊・赤畠資佳・河鰭愛・公文寿美世・斉賀智子・新屋順子・竹内暁子・仲野健一・林君平・藤本堯・松木めぐみ・屋敷憲之・中井紀子・緒方成美・岡本治代・佐伯麗（以上、高知大学学生)。

2008年度（第２次）：馬場省吾・渡邊可奈子（以上、高知大学大学院生)、矢部俊一・岡本治代・髙山沙織・玉井沙良・永元智宣・新名悠由・渡邊峻・岡山克也・嶋圭太・妹尾佳奈・辰見知香・山﨑香菜恵・渡邊早苗・有岡真知・高橋利奈・瀧宮智春・村上裕紀・森田沙織・川添あゆみ・猪木謙介・永島順太・藤井雅大（以上、高知大学学生）

2009年度（第３次）：馬場省吾・渡邊可奈子・岡本治代（以上、高知大学大学院生)、岡山克也・嶋圭太・妹尾佳奈・山﨑香菜恵・渡邊早苗・石井聡之・瀧宮智春・村上裕紀・森田沙織・岩橋恵・川田怜奈・上月ちあき・永島順太・藤井雅大・野口真未（以上、高知大学学生)。

なお、整理作業には上記学生の多くがこれに参加した。総括編作成のための整理作業には山口みそら・又吉幸嗣・平尾英希がさらに従事し、とくに岡本・藤井・野口・平尾・山口がその主力をなした。（清家）

図４　石室実測調査風景（2004年）

図５　旧考古学実習室での図面整理（2004年）

図６　発掘調査風景（2008年）

図７　発掘調査風景（2009年）

図８　写真撮影風景（2009年）

図９　測量調査を終えて（2004年）

図10　埋め戻しを終えて（2008年）

図11　調査を終えて（2009年）

3 謝辞

調査を遂行するにあたり、遺跡周辺の皆様・関係諸機関には多大なご協力をいただきました。高知県教育委員会・高知市教育委員会には調査の許可をいただいたのみならず、さまざまな助言を与えられた。また、周辺の住民の皆様と地元自治会には調査の円滑な進行のため様々なご配慮をいただきました。朝倉神社には駐輪場・駐車場・トイレ利用を許可されたるなど、多くの便宜を図っていただいた。そのほか多くの方々から多くのご助言とご協力を得た。ご芳名を記して感謝の意を表したい。

飯國芳明・池澤俊幸・中原計・長尾由和・中久保辰夫・名本二六雄・浜田恵子・廣田佳久・福永伸哉・出原恵三・松田直則・森田尚宏・三好玄・安岡保・横田慎吾・吉田広・吉成承三・朝倉神社・青木ハウス・泉清博調査士事務所・大阪大学考古学研究室・株式会社トヨタ部品四国共販高知支店・高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター・高知市教育委員会・土地家屋調査士協会（個人・団体の順。五十音順。）（清家）

注

（1）なお、埋め戻しに関しては、石室埋土中の石を埋め戻しに用いていない。これは将来、当古墳の整備と活用のため床面を再検出する時に再掘削が行いやすいよう配慮したためである。また、その石材は石室南西の擁壁際に置いている。

参考文献

高知新聞　1930. 11. 4「朝倉塚穴（古墳）へ標柱建設」（岡本健児編1973『高知県史』考古資料編　高知県、高知：pp. 482-483に再録）

高知大学考古学研究室編　2005『朝倉古墳測量調査報告書』高知大学人文学部考古学研究室、高知

高知大学考古学研究室編　2009『朝倉古墳発掘調査概要報告書』高知大学考古学研究報告第６冊　高知大学人文学部考古学研究室、高知

清家　章　2011「首長系譜変動の諸画期と南四国の古墳」『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』　大阪大学大学院文学研究科、大阪：pp. 29-42

廣田典夫　1991『土佐の須恵器』四国考古学叢書２、高知

安岡源一　1953「史跡朝倉古墳」『文化財調査報告書』第５集　高知県教育委員会、高知：pp. 13－16

第Ⅱ章　調 査 成 果

1　墳丘の調査成果

（1）墳丘の現状

朝倉古墳は、高知市朝倉丙に所在する赤鬼山から、南へのびる尾根の東斜面上にあり、横穴式石室が東向きに開口している。また、尾根の付け根や先端ではなく中程にあり、尾根の鞍部に近いところに位置している（図２）。

石室の北・南・西側は、石室に通じるわずかな通路を除いて宅地造成のための擁壁に囲まれている（図12・図13）。墳丘の大部分は擁壁下にあると考えて差し支えない。さらに、すべての天井石が露出していることから、相当量の墳丘盛土の流出があったと考えられる。

石室の東側は崖になっており、下には空き地が広がっている。古墳は尾根の東斜面に存在するので、古墳東側はもともと傾斜面になっていたことは確かであろうが、現在見られる崖が墳丘築造当時の様相を伝えるものなのか、造成によるものなのかは判断できない。石室の西側は、住宅開発により一切が消失し原形を留めていない。1971年当時の写真を見れば（図版２）、天井石の露出が現在と比較すると少なかったこと、墳頂付近が比較的平坦であったこと、尾根の鞍部に近いところに古墳が築造されていたことの３点が判明するが、墳形や墳丘規模を知る手がかりは少ない。

石室東側の通路に残るわずかな傾斜に着目すると、石室の北側は傾斜が石室から道路方向へ、すなわち南から北に緩やかに降下し、標高24.750m付近を境に再び上昇している点が確認できる（図12）。自然の尾根の地形としてはやや不自然であるが、この地形が住宅開発により形成さ

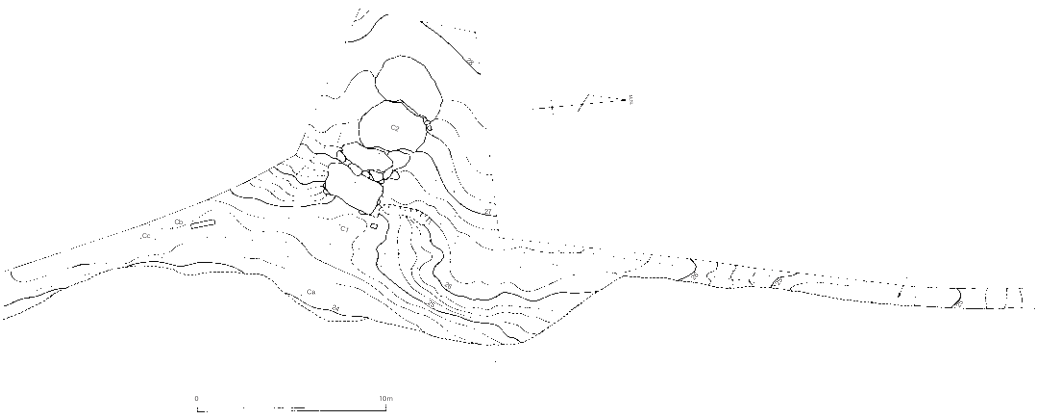


図12　墳丘周辺図（アミ部は崖面。）

れたものなのか、墳丘築造当時の尾根の地形であるのか、その判断をすることは現状では難しい。石室の南側は、その形態を推察するには住宅開発が進んでいるため困難である。　（清家）

（２）墳丘調査の成果

基準杭の設定　本古墳を国土座標に位置づけようとしたがはたせず、ローカルな座標を設定して、墳丘測量・石室実測・発掘調査における計測の基準とした。古墳周辺には許可を得てコンクリート製の恒久杭を３本設置して、今後の再調査用の基準とした（図12・表１）。Ｃａ（-0.551，-9.221）、Ｃｂ（3.182，-15.831）、Ｃｃ（2.590，-17.776）である。このうちＣａは石室主軸上のＣ１・Ｃ２を結ぶライン延長上にあり、Ｃ１から4.0m東に位置する（図13）。またＣａ・Ｃｂは石室主軸と直交するように配置している。そのほか各調査区・各トレンチの基準点座標は表１の通りである。再調査時に参考にされたい。　（清家）

墳丘トレンチの配置　前述の通り現在は住宅開発のため墳丘のほとんどが失われている。そのため墳丘を調査する場所がきわめて限定される状態であった。墳丘の情報を少しでも入手すべく、玄室の北東約８ｍに墳丘第１トレンチを設定した（第２次調査（2008年度））。この場所の等高線は直線的でありかつ、やや西側へ入り込んでいる状況が認められた（図13）。この等高線の状況が墳形を反映している可能性が考えられたので、この地点にトレンチを設定したのである（図14）。また、石室天井石の北側にわずかな空閑地があったので、ここに長さ5.4m・幅１ｍの墳丘第２トレンチを設定した（第３次調査（2009年度）、図14）。　（清家）

墳丘第１トレンチ　玄室の北東約８ｍの位置に設定した約3.5×２ｍの南北に長いトレンチである。掘削の結果、造成土が厚く堆積していることが確認された。造成土はトレンチ南西端で約1.3m、北西端で約0.9mの堆積が認められる。この堆積状況はトレンチ東側では異なり、南東・北東両端ではおよそ0.6mの堆積が認められた。造成土直下からはしまりの良い黄褐色の層が検出され、トレンチ西端に設けたサブトレンチでこの層を10㎝ほど掘り下げた結果、この層を地山と判断した（図15）。

地山面は北西から南東方向に向かって緩やかに下っている。古墳を築造する場合、石室のある場所が墳丘の中で最も高所であり、墳裾へ下っていくという旧地形が一般的である。そうした原則に沿えば、石室のある南側の地山が高くなるはずであるが、先ほども述べたように地山は逆の様相を示している。このことは、本調査区の地山が削平を受けている可能性を示すものである。ただ、石室内の８Ａ区断ち割りで検出した地山面の標高は24.1mと本調査区で得られた地山面の標高より24.9㎝低いことは注意すべき点である。このことから、もともと石室部分の地山の標高は当調査区の地山

表１　基準点の座標

点名	座　標　値	備　　考
Ca	(-0.551, - 9.221)	恒久杭
Cb	(3.182, -15.831)	恒久杭
Cc	(2.590, -17.776)	恒久杭
C1	(2.933, -7.255)	石室調査基準杭
C2	(8.154, -4.306)	石室調査基準杭
1a	(0.341, 2.463)	墳丘第１トレンチ基準杭
1b	(-2.830, 2.213)	墳丘第１トレンチ基準杭
2c	(5.578, -2.760)	墳丘第２トレンチ基準杭
2d	(4.062, -0.171)	墳丘第２トレンチ基準杭

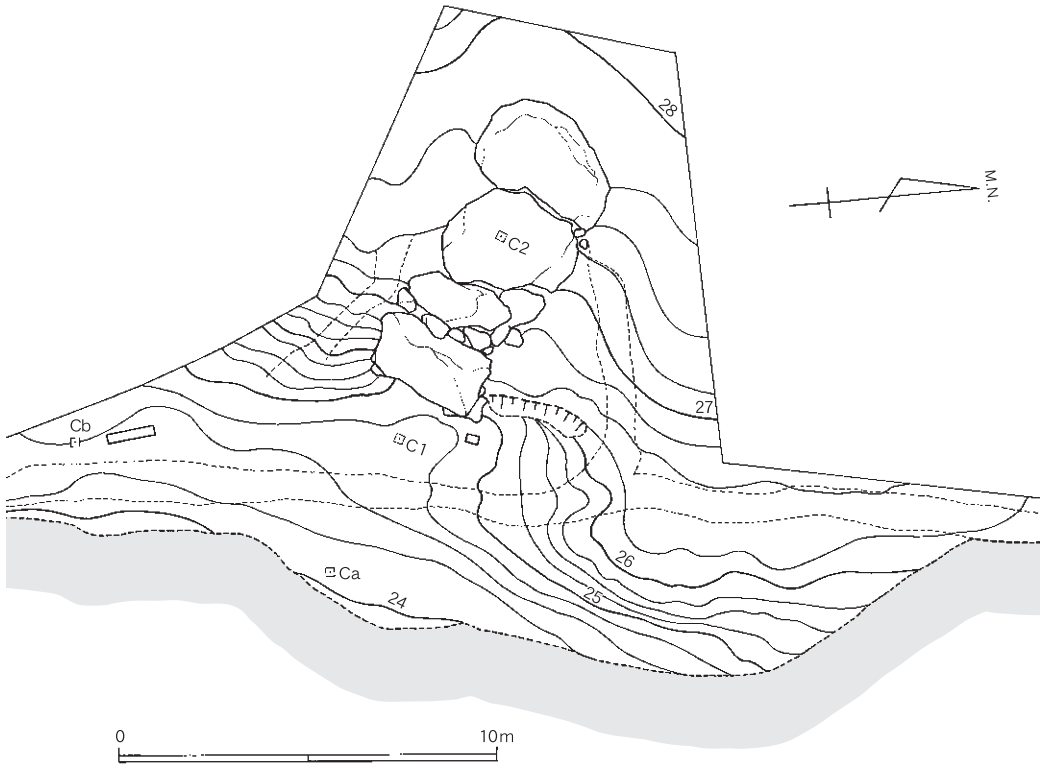


図13　墳丘測量図（アミは崖面）

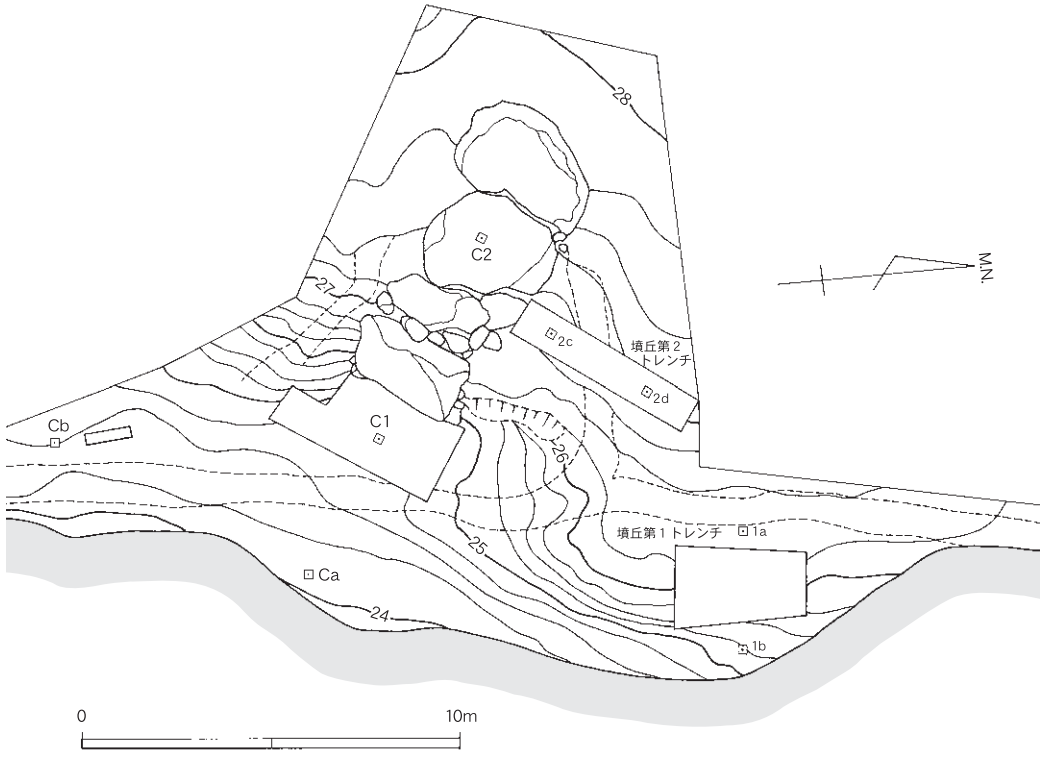
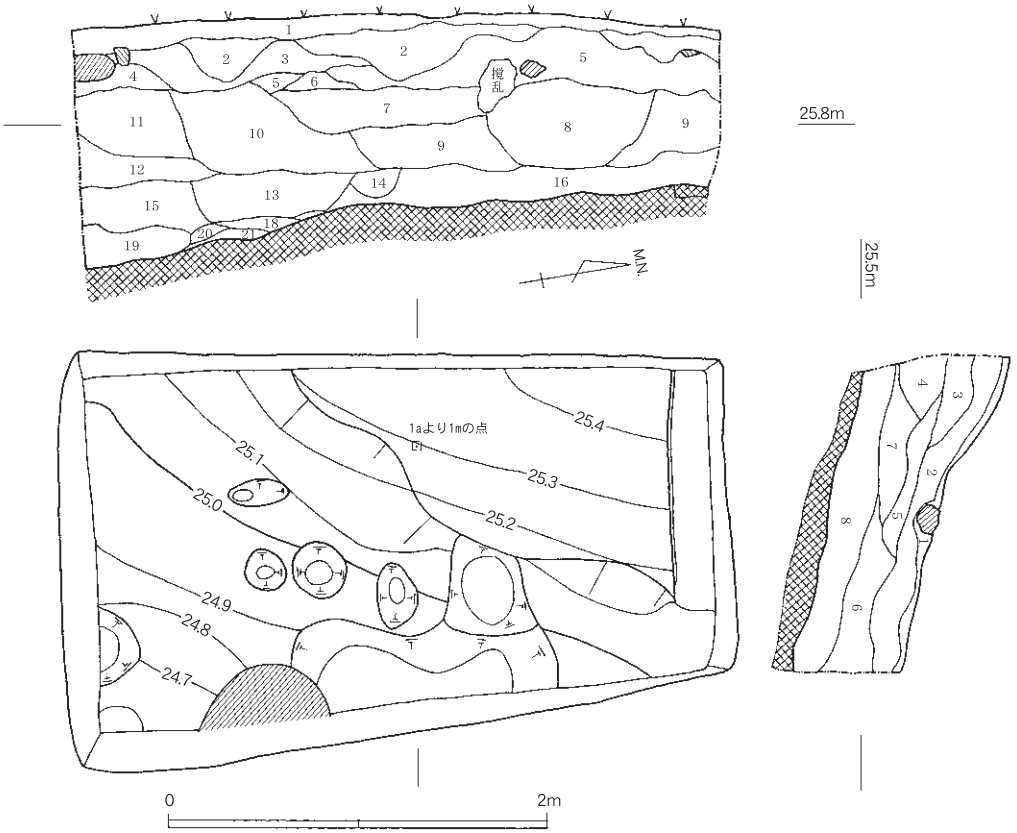


図14　調査区配置図（アミは崖面）

より低かった可能性が高い。窪地に石室を設けた後、盛土を行って石室のある部分を高く形成した可能性が考えられる。

いずれにせよ、盛土が確認されなかったことや、造成土直下から地山が検出されたことなどから、地山面は改変を受けているものと考えられる。検出された地山の形状あるいは現在の地形から古墳築造当時の様相を推定することは困難だと考えられる。

造成土中からは、近世以降の陶磁器片が多数出土しているほか、須恵器の甕の破片が出土している[(1)]。　（矢部）



西壁土色
1．7.5YR3/4暗褐色細粒砂(中礫20％含む)　2．7.5YR3/4暗褐色細粒砂(シルト塊5%含む)　3．7.5YR3/3暗褐色細粒砂(中礫15%含む)　4．5YR4/8赤褐色細粒砂(シルト塊7%含む)　5．7.5YR3/2黒褐色細粒砂(細礫20%含む)　6．2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂(中礫7%含む)　7．7.5YR4/4褐色極細粒砂(炭化物粒3%、細礫10%含む)　8．7.5YR4/6褐色細粒砂(中礫20%含む)　9．7.5YR4/4褐色細粒砂(細礫10%含む)　10．7.5YR4/4褐色極細粒砂(中礫5%含む)　11．7.5YR褐色極細粒砂(シルト塊7％含む)　12．7.5YR4/6褐色極細粒砂(シルト塊20％含む)　13．7.5YR5/6明褐色極細粒砂(炭化物粒3%含む)　14．7.5YR5/6明褐色極細粒砂(細粒砂15%含む)　15．5YR4/4にぶい赤褐色細粒砂(シルト塊15%含む)　16．7.5YR4/6明褐色極細粒砂(細礫10%含む)　17．7.5YR4/6明褐色極細粒砂(細礫3%含む)　18．7.5YR5/6明褐色極細粒砂(細礫3%含む)　19．7.5YR3/2黒褐色シルト　20．7.5YR3/3暗褐色極細粒砂(シルト塊7%含む)　21．2.5YR6/6明黄褐色極細粒砂(5GY7/1明オリーブ灰色極細粒砂15%含む)　1～21：造成土

北壁土色
1．7.5YR3/4暗褐色細粒砂(中礫20%含む)　2．7.5YR4/4褐色細粒砂(中礫7%含む)　3．7.5YR3/1黒褐色極細粒砂～細粒砂　4．7.5YR4/4褐色細粒砂(中礫15%含む)　5．7.5YR4/3褐色細粒砂(中礫3%含む)　6．7.5YR5/4にぶい褐色細粒砂(中礫3%含む)　7．7.5YR5/4にぶい褐色細粒砂(中礫3%含む)
8．7.5YR4/6赤褐色シルト～極細粒砂(中礫5%、炭2%含む)　1～8：造成土

図15　墳丘第１トレンチ平面図・土層断面図

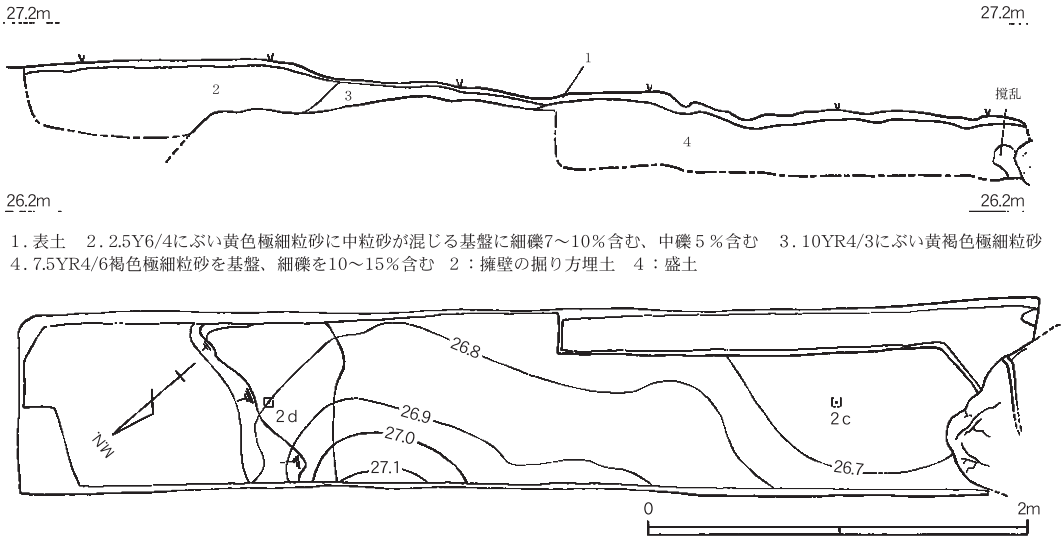


図16　墳丘第２トレンチ平面図・土層断面図

墳丘第２トレンチ　天井石の北側に設定した長さ5.4m・幅１mのトレンチである。掘削の結果、表土直下で古墳盛土をトレンチのほぼ全面で検出した（図16）。トレンチの北端から１m余り南までは擁壁によって大きく古墳盛土が削平されており、大きな落ち込みとなっている。擁壁に伴う掘削はかなり深いので、この部分は掘削を途中で止めている。このトレンチでも墳形や規模に関わる情報を得ることはできなかった。

検出された古墳盛土は褐色の極細粒砂を基本とし砂礫を少量含む極めてしまった土である。トレンチの南端から2.5m北までトレンチの東側にサブトレンチを設定したところ、この盛土が40cm以上の厚さで堆積していた。精査したが細かな盛土単位は見えなかったので、少なくとも厚さ40cm以上の単位で盛土が施されていることになる。この盛土は石室側石に及んでいる。石室側石を置くための掘り方等は検出されなかった。石室石材を積みつつ盛土を施したものと考えられる。（清家）

（３）墳丘の復元

残念ながら墳丘規模と墳形を直接示す情報をほとんど得ることはできなかった。第１トレンチでは削平と新しい造成盛土が行われているので、墳形を復元する手がかりは失われている。墳丘規模については若干の手がかりがある。第２トレンチにおいては古墳盛土が検出されトレンチ北端までそれは続いていたようである。このことから擁壁下まで墳丘は存在した可能性が極めて高い。玄室中軸から第２トレンチ北端まで７mあるので、それを折り返して直径（一辺）14m以上の墳丘規模であったということはできる。また、墳丘第１トレンチで検出した地山面は石室床面よりやや高い。擁壁工事の時にこの部分が削平されているとすれば、本来の地山はさらに高かった可能性が高い。北側の墳丘裾部が石室床面にあわせて作られていたとするなら

ば、墳丘は墳丘第１トレンチのさらに北側に及んでいた可能性もある。石室中軸から第１トレンチ北側まで12.5mあるので石室主軸で折り返して25m以上の墳丘規模となることも考えられる。そうした視点で、道路から古墳へ続く通路を見ると、玄室床面と同じ高さである24.750mの等高線が傾斜変換点となっているのに気づく（図12）。ここを墳丘裾とする45m規模の墳丘を持っていたことも考えられなくはない。ただ、周辺が大きく破壊されている以上、憶測の域はでない。一つの可能性として示しておくにとどめたい。確実にいえることは第２トレンチの盛土の状況から、14m以上の墳丘規模であったということまでである。　（清家）

２　石室調査区の成果

（１）調査区の設定

石室を発掘するに当たり調査区の区割りを以下のように行った（図17）。石室中軸上にあるＣ１とＣ２を設定し、この２点を石室調査区の基準点として調査区の設定をした。Ｃ１とＣ２間の距離は６ｍである。Ｃ１より西側は、１ｍごとに１区から10区に分けた。Ｃ１より東側をＥ１区と呼ぶ。主軸ラインより南側をＡ区・北側をＢ区とし、東西の地区名と組み合わせて地区名を呼称する。またＥ１Ａ区は、後述する礫集中部の性格を確認するため、南に１ｍ拡張した。この調査区をＥ１Ａ南拡張区とする。　（岡本）

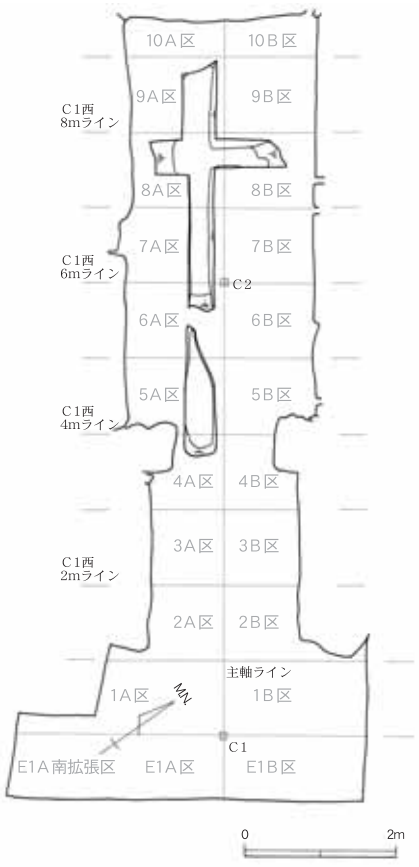


図17　石室調査区・区割り設定図

（２）発掘の成果

①玄室の調査

石室は上記の区割りでいえば５区から10区までに相当する。2004年の測量調査では、側壁・奥壁下部の石材の観察から、床面は現地表からごく浅いところにある可能性が高いと想定された（高知大学編2005）。しかし、想定以上に土壌が堆積していた。

玄室は何度も人の手が入っていたようで、床面まで現代の遺物が混じる土が堆積していた。それと対応するように、土層断面には何度も掘削を受けた跡が認められる（図22・23）。現代の遺物が混じる土を除去すると、奥壁の付近から石列が検出された。これを掘り広げていくと主に壁面の際で同様の石が検

図18　上部の敷石に挟まれた土師器（９Ａ区）

図19　短頸壷出土状況

出され、石のないところでは明黄褐色の盛土が確認された。盛土上に石列が認められない部分もあるが、床面上および盗掘坑内の堆積土壌に人頭大の石が含まれており、本来は石室床面全体に石が敷かれていたと考えられる。

この敷石あるいは明黄褐色の盛土を目指して玄室全体を掘り下げていった。床面の敷石は、奥壁付近の９Ａ・10Ａ区で多く確認された（図20・21）。９Ｂ・10Ｂ区は敷石の残りが良くなく、明黄褐色の盛土面が確認されたところが多い。８区から玄門付近の５区にかけては、玄室中央部に大規模な盗掘坑が穿たれているため、敷石あるいは明黄褐色の盛土が検出された部分は少ない。わずかに８区と７Ａ区で側壁の際を中心に敷石と盛土が、７Ｂ区と５区・６区では、一部で盛土が確認されたのみである。（渡邊）

敷石の観察　敷石がよく残っている９Ａ・10Ａ区の床面を観察すると、まず右側石に沿って一辺30～40㎝程度の平石が列状に並んでいる（図20・図版13－（１））。これらの石の下および石室の隅には10～20㎝程度の比較的小型の石が敷かれ、平石と小礫のレベルには10㎝程度の高低差が見られる。このことから、床面は２面あった可能性が高い。また、上層の床面と思われる平石と下層と思われる石に挟まれた状態で、土師器片１点が出土している（図18）。この土師器片が、上層の平石が敷かれる前の副葬品であるとすれば、やはり床面は２面ある可能性が高い。少なくとも床面を補修あるいは作り直した可能性はあるといえる。

９Ａ・10Ａ区における上層の平石のレベルは約24.760m、下層の小型の石群のレベルは約24.635ｍである。また、敷石が認められず盛土面が検出された部分のレベルは約24.638ｍである。したがって奥壁付近の９Ａ・10Ａ区における玄室高は、上層の床面平石から測ると2.40m、下層の床面から測ると2.51ｍとなる。石室中央付近では明確に敷石が２段になっている様子は現状では確認できていないが、７Ａ・８Ａ区で検出された敷石上から玄室高を測ると2.36ｍとなる。玄門付近では原位置を保っていると思われる敷石はほとんどないが、検出された盛土面から測ると５Ａ・６Ａ区で2.50ｍとなる。（渡邊）

盗掘坑の規模　石室床面の７割以上を盗掘坑が占める。とく玄室中央の盗掘坑は大きく、3.3×

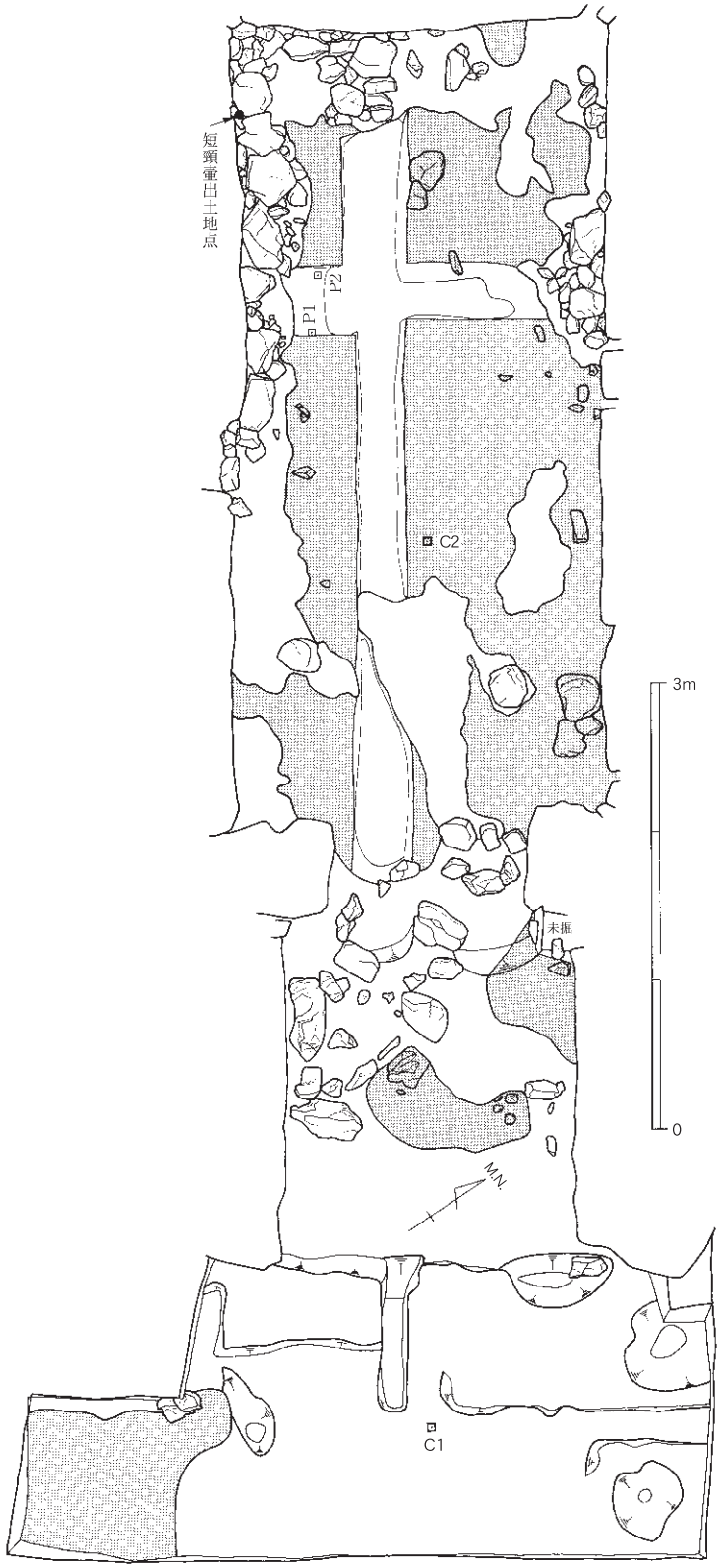
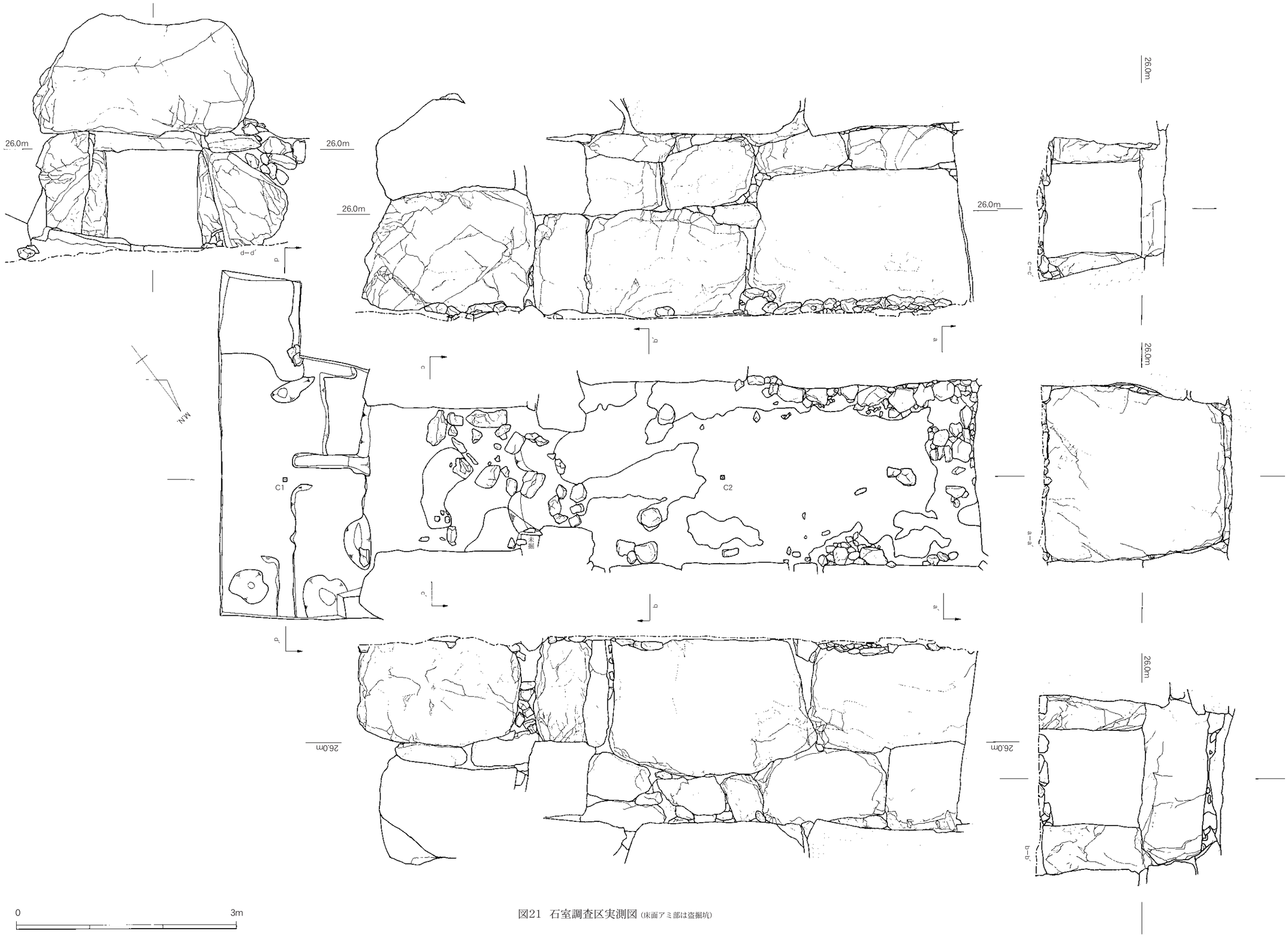
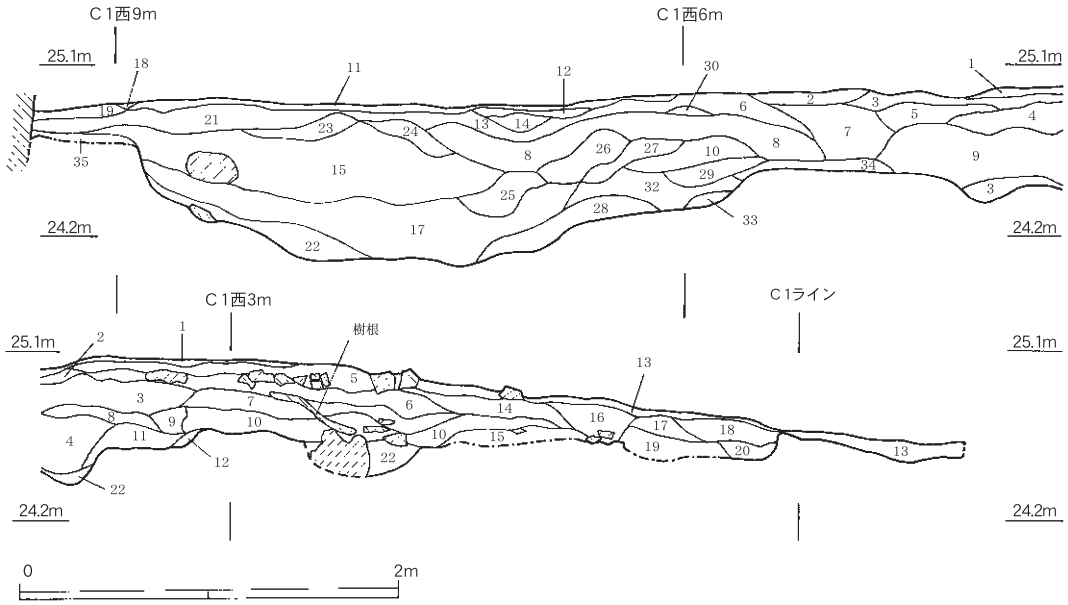


図20　石室床面とサブトレンチ設定状況（アミ部は盗掘坑）



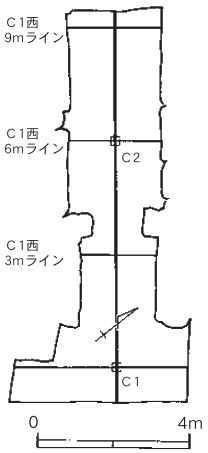
0 3m

図21　石室調査区実測図 (床面アミ部は盗掘坑)



玄室奥壁～C1西4mライン

1．7.5R3/4暗褐色シルト～極細粒砂をベースに2.5YR7/2灰黄色シルト塊10％含む　2．2.5Y5/2暗灰色極細粒砂をベースに2.5Y6/8明黄褐色シルト塊５％含む　3．7.5Y5/1灰色シルト～極細粒砂をベースに10YR7/1灰白色シルト塊1％含む　4．7.5YR4/3褐色シルト～極細粒砂を2.5Y7/3浅黄色シルト塊５％含む　5．10YR4/4褐色シルト～極細粒砂をベースに5Y7/2灰白色シルト塊３％含む　6．7.5YR4/6褐色シルト～極細粒砂をベースに2.5Y7/3浅黄色シルト塊10％含む、7.5YR6/8橙色シルト塊10％含む、炭５％含む、ガラス片含む　7．10YR4/6褐色シルト～極細粒砂をベースに10YR7/6明黄褐色シルト塊３％含む、石を多く含む　8．7.5YR4/4褐色シルト～極細粒砂をベースに7.5YR7/8黄橙色シルト塊10％含む、10YR4/1褐灰色シルト塊３％含む、炭５％含む　9．10YR4/6褐色細粒砂をベースに7.5YR6/8橙色シルト塊３％含む、2.5YR3/3シルト塊１％を含む　10．10YR3/4暗褐色細粒砂をベースに5Y4/1灰色シルト塊１％を含む　11．10YR5/4にぶい黄褐色シルト～極細粒砂をベースに2.5Y5/4黄褐色シルト塊７％含む　12．7.5YR4/4褐色シルト～極細粒砂をベースに10GY5/1緑灰色シルト塊15％含む、7.5YR5/8明褐色シルト塊５％含む　13．7.5YR4/6褐色シルト～極細粒砂をベースに10YR6/8明黄褐色シルト塊５％含む、10Y4/1灰色シルト塊10％含む、ビニール片含む、灰５％含む　14．5Y4/1灰色シルト～極細粒砂をベースに10YR5/8黄褐色シルト塊３％含む、ビニール片含む、7×8ｃｍ石を含む　15．10YR４/3にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂をベースに5YR５/6明赤褐シルト塊３％含む　16．10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂をベースに7.5YR5/6明褐色シルト塊３％含む　17．10YR4/4褐色極細粒砂～細粒砂をベースに10Y5/2オリーブ灰シルト塊５％含む、7.5YR6/8橙色シルト塊５％含む　18．10YR3/2黒褐色シルトに5Y7/3浅黄色粗粒砂３％含む　19．10YR4/3にぶい黄褐色シルト～極細粒砂をベースに2.5Y6/6明黄褐色シルト塊20％含む、7.5YR4/4褐色シルト塊20％含む　20．5YR４/6赤褐色シルト～極細粒砂に5YR6/8橙色極細粒砂を５％含む　21．10YR３/3暗褐色極細粒砂に2.5YR7/2明赤褐色シルト塊10％、５Y８/3灰白色シルト塊５％含む　22．10YR５/6黄褐色シルト～極細粒砂をベースに10YR８/1灰白色シルト塊３％含む、7.5YR橙色シルト灰５％含む　23．10YR4/3にぶい褐色シルト～極細粒砂をベースに2.5Y8/2灰白色のシルト塊１％含む、炭10％含む　24．10YR4/3にぶい褐色シルト～極細粒砂をベースに2.5YR5/8明赤褐色のシルト塊２％含む　25．10YR4/4褐色シルト～極細粒砂をベースに5YR7/8橙色シルト塊１％、10BG暗青灰シルト塊１％含む　26．10YR4/4褐色シルト～極細粒砂をベースに5YR6/8橙色シルト塊７％含む、N3/暗灰シルト塊１％含む　27．10YR5/4にぶい黄褐色～極細粒砂をベースに5YR6/8橙色シルト塊２％含む　28．10YR5/4にぶい黄褐色～極細粒砂　29．10YR5/4にぶい黄褐色シルト　30．10YR4/4褐白シルト～極細粒砂をベースに7.5YR6/8橙色5YR赤褐色シルト塊25％含む　31．10YR3/4暗褐色極細粒砂2.5YR4/8赤褐色細礫５％含む　32．10YR4/4褐色シルト　33．10YR4/3シルト～極細粒砂5YR5/6明赤褐色のシルト塊１％含む　34．10YR4/4褐色極細粒砂７.5YR5/8明褐色シルト塊2％含む　35．盛土

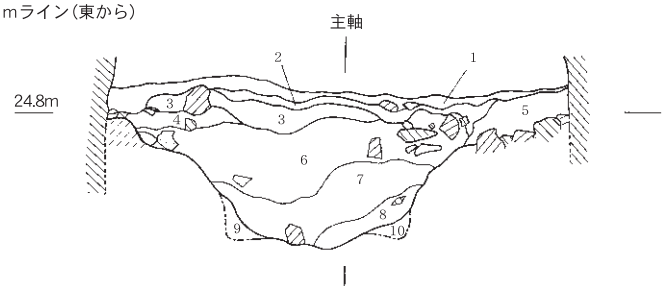


C1西4mライン～C1東1mライン

2．7.5Y5/1灰色シルト～極細粒砂をベースに10YR7/1灰白色シルト塊１％含む　3．7.5YR4/3褐色シルト～極細粒砂をベースに2.5Y7/3浅黄色シルト塊５％含む　4．10YR４/6 褐色極細粒砂をベースに7.5YR6/8橙色シルト塊３％含む、2.5YR3/3シルト塊１％含む　5．5YR4/6赤褐色極細粒砂に5YR4/8赤褐色の中粒砂を５％、直径５㎜の炭化物粒を１％含む　6．５YR４/８赤褐色極細粒砂にシルト塊３％、礫５％含む　7．7.5YR３/２黒褐色極細粒砂に5Y8/4淡黄色シルト塊、5YR6/8橙色中粒砂を５％含む　8．7.5YR３/４暗褐色極細粒砂に5YR6/8細粒砂を５％含む　9．５YR５/６明褐色極細粒砂に直径２㎜の炭化物粒１％、5YR６/８細粒砂１％含む　10．5YR2/1黒褐色シルトにシルト塊５％、5YR4/8赤褐色極細粒砂５％含む　11．7.5YR5/6明褐色極細粒砂に10YR6/6明褐色粗粒砂を１％含む　12．7.5YR4/3褐色シルトに5YR5/8明褐色中粒砂を５％含む　13．10YR7/3にぶい黄橙色細粒砂、細礫を含む　14．7.5YR4/4褐色極細粒砂に10YR 8/6黄橙色シルト塊５％を含む　15．7.5YR極暗褐色シルトに2.5YR明赤褐色シルト塊３％含む、2.5Y8/3淡黄色シルト塊３％含む　16．10YR3/4暗褐色細粒砂に10YR8/4浅黄橙色シルト塊3％細礫含む　17．7.5YR5/4にぶい褐色極細粒砂に2.5YR4/8赤褐色5％含む　18．10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂に2.5Y8/4淡黄色シルト塊７％含む　19．7.5YR4/4褐色細粒砂に2.5Y8/4淡黄色シルト塊10％含む　20．10YR4/6褐色極細粒砂に10YR 8/2灰白色シルト塊５％含む　21．7YR 4/6褐色極細粒砂に7.5YR4/6橙シルト塊３％、礫を含む　22．10YR3/4暗褐色極細粒砂に2.5YR4/8赤褐色細礫５％含む　12・15・19：盛土

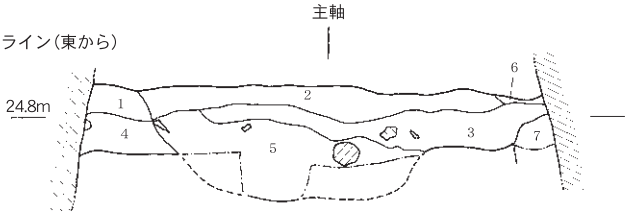
図22　石室調査区縦断土層図

① ８mライン(東から)



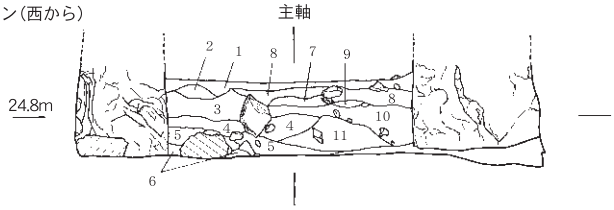
1．10YR4/4褐色シルト～極細粒砂　2.5YR7/2明赤灰色シルト10%含　7.5YR5/8明褐色シルト塊5%含　2．5Y7/2灰オリーブ色シルト～極細粒砂2.5Y5/6黄褐色シルト20%含　3．10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂　2.5YR5/6明赤褐色シルト10%含　4．10YR6/6明黄色シルト～極細粒砂　5YR5/6明赤褐色シルト5%含　5．7.5YR5/8褐色シルト～極細粒砂　5YR6/8橙色シルト塊10%含　6．2.5Y4/4オリーブ色シルト～極細粒砂　7．7.5YR3/3暗褐色シルト～極細粒砂　2.5YR5/8明赤褐色シルト塊25%含　8．10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂　5YR5/8明赤褐色シルト塊20%含　9．2.5Y4/3オリーブ褐色シルト～極細粒砂　10．2.5YR4/1黄灰シルト～極細粒砂　9・10：盛土

② ６mライン(東から)



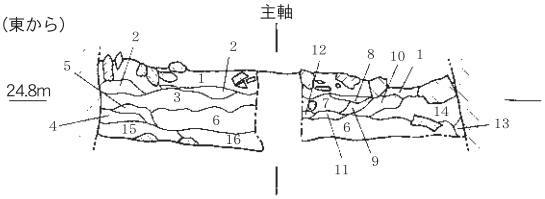
1．7.5YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂、炭を含む　2．10YR４/４褐色シルト～極細粒砂に2.5YR7/2明赤灰色シルト塊10%含、10YR8/2灰白色シルト塊5%含む　3．10YR3/3暗褐色極細粒砂に2.5YR7/2明赤灰色シルト塊10%含む、10YR8/2灰白色シルト塊5%含む　4．10YR4/6褐色シルト～極細粒砂に2.5YR7/6明黄褐色シルト塊5%含む　5．7.5YR３/３暗褐色極細粒砂に５YR5/8明赤褐色シルト塊10%含、５Y8/3淡黄色シルト塊10%含む　6．10YR3/4暗褐色極細粒砂　7．5YR4/6赤褐色シルト～極細粒砂に6/8橙色極細粒砂塊5%含む

③ ４mライン(西から)

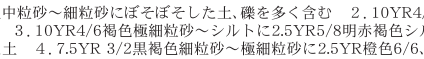


1．10YR4/3にぶい黄褐極細粒砂をベースに細礫を含む　2．５YR4/4にぶい赤褐色極細粒砂をベースに30％白、薄紅の極粗粒砂を含む　3．5YR４/8赤褐色極細粒砂をベースに３％の白い細礫を含む　4．10YR３/２黒褐極細粒砂細粒砂をベースに7％炭を含む　5．10YR4/6赤褐シルトをベースに中礫を含む　6．10YR3/4暗褐シルトをベースに中礫を含む　7．10YR4/3にぶい黄褐極細粒砂をベースに細礫を含む　8．10YR４/６褐色極細粒砂に中礫・細礫を７％含む　9．10YR３/２黒褐色極細粒砂をベースに炭化物粒を7％含む　10．5YR4/8赤褐色シルトをベースに細礫40％含む　11．10YR3/4黒褐色シルトをベースに細礫3％含む

④ ２mライン(東から)



1．10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂～細粒砂にぼそぼそした土、礫を多く含む　2．10YR4/4褐色細粒砂～極細粒砂にぼそぼそした土、礫を含む　3．10YR4/6褐色極細粒砂～シルトに2.5YR5/8明赤褐色シルト5%、10YR8/6黄褐色シルト3%含む、固くしまった土　4．7.5YR 3/2黒褐色細粒砂～極細粒砂に2.5YR橙色6/6、シルト3%含む　5．10YR 3/4暗褐色極細粒砂～シルトに2.5YR淡黄色8/3シルト3%含む　6．5YR2/1黒褐色極細粒砂～シルトに10R4/8赤色シルト塊3%、10YR浅黄橙色シルト塊5%含む　7．7.5YR4/4黒褐色細粒砂～極細粒砂に10R4/8赤色シルト3%含む　8．10R5/8赤色細粒砂～極細粒砂　9．7.5YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに2.5YR6/8橙色シルト10%、10YR浅黄橙色8/4シルト10%含む　10．7.5YR3/2黒褐色細粒砂～極細粒砂に10YR8/6黄橙色シルト10%含む、しまった土　11．10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～極細粒砂に7.5YR浅黄橙色、シルト5%含む　12．10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂～極細粒砂、10R赤色5/8シルト10%含む　13．10YR3/3黒褐色細粒砂～極細粒砂、ぼそぼそした土　14．10YR4/4褐色極細粒砂にシルト2%、7.5YR6/8橙色砂粒砂を2%含む　15．5YR3/6暗赤褐極細粒砂に2.5YR5/8明赤褐シルト塊2%、10YR8/4浅黄色シルト塊を5%含む　16．10YR2/2黒褐極細粒砂に2.5YR5/8明赤褐シルト塊2%、2,5Y7/4浅黄色シルト塊3%含む　15・16：盛土



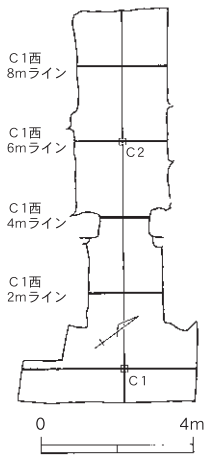
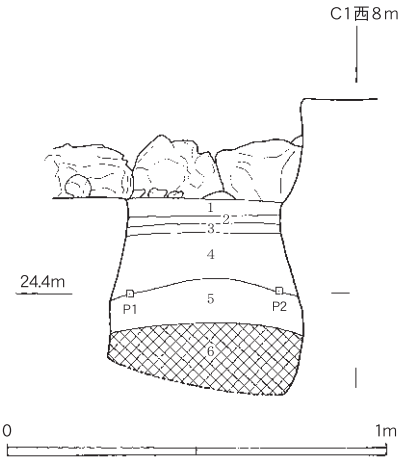


図23　石室調査区横断土層図

2.0mの小判形の平面形である（図20・21）。その一部にサブトレンチを入れたところ、盗掘坑の深さが50cm以上となることが判明した（図22・23）。盗掘坑埋土の全てを除去すると土量があまりに多くなる上、石室に悪影響を及ぼすことが懸念された。先行して設定したサブトレンチ内から出土する遺物量は極めて少なく、全掘しても多くの遺物は出土しないものと考えられた。そこで盗掘坑は全掘せず、サブトレンチを十字形に入れて規模を確認することにした。具体的には、石室中軸上とＣ１西８mライン沿いにサブトレンチを設定し、その部分は盗掘坑の底を確認することにした。盗掘坑の底は最も深い７Ｂ区で標高24.08mであり、明黄褐色の盛土面から60cm程度掘り込んでいることが明らかになった。また、５Ａ区・６Ａ区では、標高24.58mまで掘削した段階で石室床面に用いられる明黄褐色の盛土を部分的に検出した。この部分は盗掘によって盛土上面を削られ、その一部が残存したものと思われる。この盛土面はＢ区にも広がり、他の床面盛土につながる。

縦断・横断土層を観察すると、玄室内の堆積土表層直下から掘削が行われ床面を掘り抜いていることがわかる（図22、図23－①・②）。最も大きな盗掘坑に加え、縦断土層には別の掘削も認められ繰り返し盗掘が試みられたことがわかる（図22－上段２・３・５・７層、下段16層）。盗掘坑埋土には古墳時代から現代に至るまでの遺物が混入していたことから、現代以前にも盗掘は行われ、あるいは古墳築造後に埋葬や盗掘とは異なる使用が行われてきたかもしれないが、現代の大盗掘坑によってそれらの痕跡は土器等以外に失われてしまっている。（岡本・清家）

床面下の土層状況の観察　８Ａ区の西側畦の際にサブトレンチを設定し、床面より約50cmのところで盗掘坑の底面を確認している。この盗掘坑の掘り方を観察すると、地山の上に約10cmの盛土層を２層重ね（図24－４・５層）、さらに２～３cmほどの薄い層を２層重ね（図24－２・３層）、最上層には明黄褐色の精良な土を使用している（図24－１層）。その上に敷石を置いて床面が構成されていることが明らかになった。（渡邊）



1．10YR6/6明黄褐色シルト～極細粒砂（2.5Y7/4 浅黄色シルト塊3%、炭3%含む）　2．10TR3/3 暗褐色極細粒砂（7.5Y4/1灰色シルト塊2%、炭3%含む）　3．N4/0灰色シルト（2.5GY6/1オリーブ灰色シルト塊1%含む）　4．2.5Y5/4黄褐色極細粒砂～細粒砂（2.5Y8/4淡黄色シルト塊2%、炭３%含む）　5．10YR7/8 黄橙色シルト～極細粒砂（2.5Y8/3浅黄色シルト塊1%含む）　6．2.5Y4/2暗灰黄色シルト～極細粒砂（10YR7/8黄橙色シルト塊2%含む）　1～５層：盛土（貼り床含む）。６層：地山。

図24　８Ａ区断ち割り南側土層図
（P1・P2は図20に対応）

遺物の出土状況　床面上および堆積土層からは、古墳時代から現代までの遺物が混在して出土している。堆積土中に人頭大の石が含まれていたことからも、土層の状態は自然に堆積したものではなく、盗掘の際の埋め戻しといった人為的な行為によるものであると見られる。よって原位置をとどめていた遺物はほとんどない。唯一９Ａ・10Ａ区から出土した

短頸壷（図19・図29-17）は、敷石の上に破片がまとまって出土した（出土地点は図20参照）。しかし、これとても盗掘後の埋め戻しの土層中からの出土であり、原位置に近いとは言えても原位置そのものではないのである。

古墳時代の遺物には短頸壷のほか、須恵器の杯蓋・高杯・甕、鉄片などがある。短頸壷を除いて小破片での出土であり、完形のものはない。古代以降の遺物は、中世の瓦器碗・土師質土器、近世の陶磁器や寛永通宝などが出土している。（渡邊）

②羨道・前庭

盛土面と敷石の検出　石室縦断畦断面図（図22）を見てもわかるように、羨道も玄室と同様に何度も人の手が入っており、現代から古墳時代までの遺物や礫が混在した土壌が堆積していた。

４Ａ区では、堆積土を現地表面から45㎝程度除去したところで、玄室から続く盗掘坑の掘り方と、暗褐色の盛土面（図22－下段12層）を検出した。盛土面の標高は24.57ｍである。４Ｂ区の玄門部では現地表面から45㎝程度掘削した段階で、南北に並ぶ２列の石列が検出された。玄室に近い側の石列の下には、玄室に続く明黄褐色の盛土が敷かれている。石列のレベルは石によって違いがあるが標高24.65m前後、盛土面は24.63mである。羨道側の石列とその東側では、４Ａ区と同じ暗褐色盛土が検出された。玄門にはステップや敷居石はなく、玄室と同様に、盛土の上に人頭大の石が敷かれていたことがわかる。

この暗褐色盛土は、３区・２区にも続いている。３区・２区の中央や、３Ｂ区西隅には大きな盗掘坑があるが、それ以外の部分では、現地表面から45㎝前後掘削した標高24.63mでこの盛土面を検出した。また、右側壁際などでは盛土上面で人頭大の石を検出した。これらの石の一部は盛土面直上に据えられているため、原位置を保っているものと思われる。敷石の標高は石によって違いはあるものの24.70m前後である。以上のことから、撹乱によってそのほとんどが失われているものの、羨道には人頭大の敷石が一面に敷かれていたものと推定される。

１Ａ・１Ｂ区では、表土を除去するとすぐに標高24.69mで、墳丘で検出した盛土（図16－４層）とよく似た堅くしまった褐色土層を検出したため、これを盛土と判断した。この盛土は羨道で検出した暗褐色の盛土とは異なるものであり、Ｃ１より西に１ｍのラインを境に盛土が変化していることがわかる。

１区で検出した盛土面を、Ｅ１Ａ・Ｅ１Ｂ区に広げていくと、Ｅ１Ａ区南端で拳大の礫の集中部を検出した。これが古墳と関連する遺構である可能性も考えられたため、Ｅ１Ａ区を南に１ｍ拡張した。その結果この礫の集中部の下に、非常にもろい明黄褐色土（図26－②５層・①３層）が入っていることが明らかになった。さらにＥ１Ａ南拡張区西壁・南壁断面においても、この明黄褐色土層が上層から切り込んでいることが確認できたため、この層を撹乱と判断し礫を除去した。Ｅ１Ａ南拡張区西壁際では、この黄色土の下から精良な黒褐色細粒砂を検出した

1．表土　2．5Yオリーブ黒色極細粒砂～細粒砂をベースに5Y8/2灰白色シルト～極細粒砂15％含む細礫を少量含む
3．2.5Y5/6黄褐色極細粒砂に中礫を20％含む大礫も少量含む　3：撹乱埋土

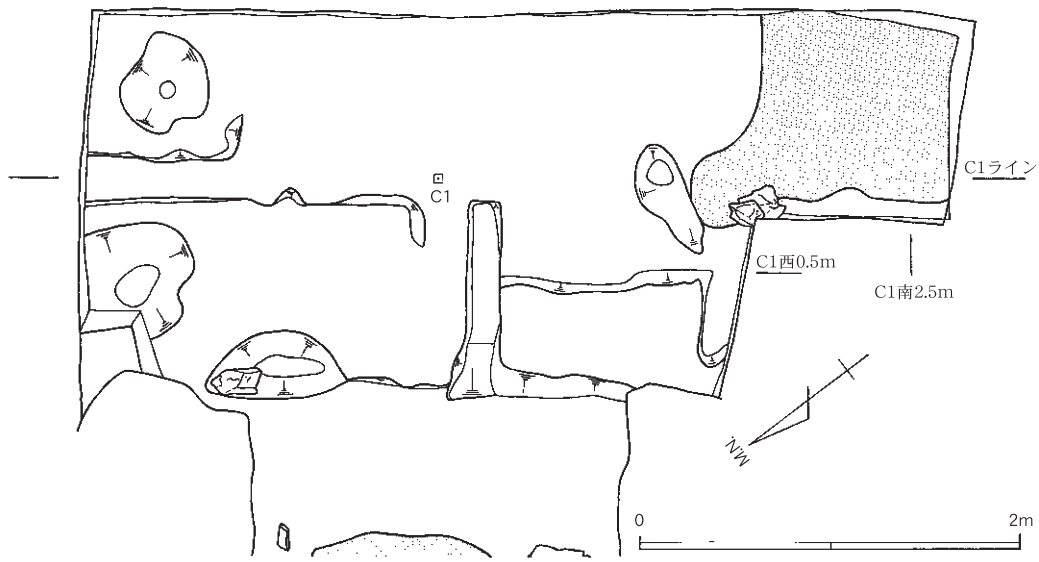
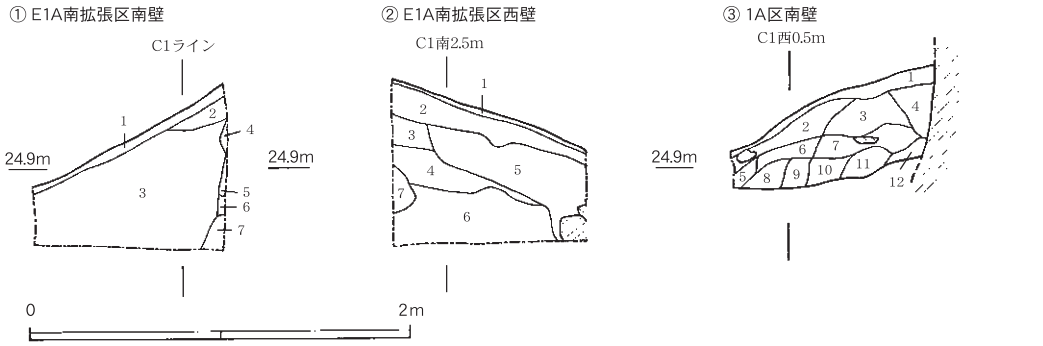
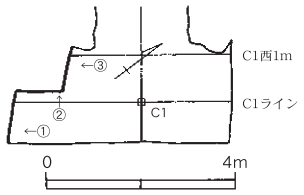


図25　前庭部平面図・土層図





①
1．表土　2．10YR4/4褐色極細粒砂に5YR5/6明褐色の中礫を1％含む　3．2.5YR7/6明黄褐色極細粒砂に中礫を3％、細礫を3％、大礫を1％含む　4．7.5YR5/6明褐色極細粒砂に2.5YR7/4浅黄シルト塊を1％　7.5YR6/8橙色の細礫を1％含む　5．7.5YR4/4褐色極細粒砂に2.5YR7/4浅黄シルト塊を2％含む　6．10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂に中礫を1％含む　7．盛土

②
1．表土　2．10YR4/4褐色極細粒砂に5YR5/6明褐色の中礫を1％含む　3．7.5YR5/6明褐色極細粒砂に2.5YR7/4浅黄シルト塊を1％、7.5YR6/8橙の細礫を1％含む　4．7.5YR4/4褐色極細粒砂に2.5YR7/4浅黄シルト塊を2％含む　5．2.5YR7/6　明黄褐色極細粒砂に中礫を3％、細礫を3％、大礫を1％含む　6．盛土　7．10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂に中礫を1％含む

③
1．表土　2．10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂に2.5YR6/3にぶい黄色の中礫を3％含む　3．7.5YR4/3褐色極細粒砂に2.5YR5/6明褐色の細礫を3％含む　4．10YR3/3暗褐色極細粒砂に2.5YR7/2灰黄の中礫１％含む　5．10YR4/4褐色極細粒砂に5YR5/6明褐色の中礫を1％含む　6．7.5YR4/4褐色極細粒砂に10YR6/4にぶい黄橙色の細礫を１％、2.5YR5/6明褐色の中礫を１％含む　7．7.5YR4/6褐色極細粒砂に5Y7/3浅黄色シルト塊を5％、5YR4/6赤褐色の中礫を１％含む　8．7．5YR3/4暗褐色極細粒砂に2.5YR5/6明褐色の中礫を1％含む　9．7.5YR3/3暗褐色極細粒砂に2.5YR6/2灰黄色の細礫を1％含む　10．7.5YR3/4暗赤褐色極細粒砂に2.5Y7/2灰黄色5mm程度のシルト塊を1％、5YR5/6明赤褐色の細礫を5％含む　11．7.5YR2/3極細粒砂に10YR8/4浅黄橙色の中礫を１％含む　12．盛土

図26　１A区・E１A南拡張区土層図

（図26－①７層・②６層）。この黒褐色土は古墳の盛土と考えられる。

また従来、現在の羨道側壁の東側にも現存する側壁と同程度の大きさの石があり、羨道は現状よりも長かったといわれていた（安岡1953：p．15）。しかし、本調査においては１区・Ｅ１区では、側壁の抜き取り穴などは検出されなかった。したがって、古墳築造当時の羨道長は現在の羨道と同じであったと考えられる。言い変えれば４区～２区までが羨道部であることが明らかになった。

以上のように、盛土面や敷石を検出した。玄門高は敷石上から計測すると1.33m、盛土上面からだと1.44mを測る。羨道高は、敷石上から計測すると1.6m、盛土上面からだと1.7mを測る。羨道幅は2.0m、羨道長が玄門部を含めて3.2mであることが明らかになった。　（岡本）

遺物の出土状況　羨道堆積土の上層では現代から古墳時代までの遺物、下層では中世から古墳時代までの遺物が混在した状態で出土した。よって原位置を保っている遺物はない。（岡本）

盛土と敷石の観察　羨道・前庭部で検出した盛土は、４Ｂ区玄門部の明黄褐色土、４Ａ・４Ｂ区東側・３区・２区の暗褐色土、１区・Ｅ１区の褐色土、Ｅ１Ａ南拡張区の黒褐色土の４種類である。先に述べたように、10区～５区が玄室・４区～２区が羨道・１区とＥ１区が前庭部にあたる。このことから、玄室・羨道・前庭部の盛土と敷石については以下のように整理することができる。

玄室では明黄褐色土の盛土を床面として敷石を敷くのに対して、羨道では暗褐色土の床面に敷石を敷いている。敷石については、玄室・羨道ともに人頭大の石を使用しており、両者に違いはなかったものと考えられる。

前庭部にあたる１区・Ｅ１区においては、羨道部の暗褐色盛土とは異なる褐色盛土を使用している。この盛土は墳丘で検出した盛土と同じものであり、前庭と墳丘は同じ種類の盛土で築造されたといえる。羨道の盛土と前庭部の盛土との層位的関係は撹乱によって確認できなかったものの、以上のことから、玄室・羨道・前庭とで盛土が異なっていたことがわかる。Ｅ１Ａ南拡張区の黒褐色盛土については、撹乱によってＥ１区の褐色盛土との層位的関係が確認できないため、この盛土の違いが層位によるものなのか、位置によるものなのかは不明である。

また、前庭部は位置によって多少の違いはあるものの標高24.70m前後、玄門敷石は標高24.60m前後、と若干の高低差が見られる。　（岡本）

（３）石室の構造

発掘調査の結果、床面が検出され石室の規模・段数が明確になった（図21）。石室は、N-123°51′-E方向に開口する横穴式石室である。規模は現状で、全長8.33m・玄室長5.23m・玄室幅2.54m（奥壁付近）・2.40m（玄門付近）である。玄室高は奥壁付近で検出された２重の敷石のうち、上面から計測すると2.40m、下段の礫から計測すると2.50mである。玄門付近の盛土面から測った玄室高は2.50mである。羨道は、長さ3.10m・羨道幅1.85m・羨道高1.60

m・玄門高1.33m、玄門幅1.30mである。

平面的な特徴としては、玄室は長幅比約２：１の長方形を呈する。玄門立柱が内側にせり出す。羨道は玄室に比してやや短い感じを受ける。かつての古墳所有者から安岡源一が行った聞き取りによれば、「右側」の石の前に同一大の石がさらに１個存在したという（安岡1953）。ただ、前述のように発掘の結果、石の抜き取り痕は認められなかったので、これ以上羨道は伸びないと考える。

使用石材もまた巨大である。玄室奥壁は上辺170cm・底辺235cm・高さ247cmの巨大な石材を１枚配置し、その上に天井石との隙間を埋めるよう厚さ約10cmの石材を数個置く。奥壁は直立するのではなく若干内側へ傾いている。玄室側壁は、両側ともに大きな腰石を２つ配置して辺を形成することを基本とする。ただ、奥壁から羨道にむかって左の側壁は、腰石の長さが足りないので、縦長の石材を一つ配置し長さを補っている。側壁は基本的に２段で構成されるが、両側の側壁ともに羨道よりの部分は３段となっている。側壁も直立するのではなく１段目の石材から内側にやや傾いた状態で配置されている。

玄門は両側ともに立柱石を一つ立て、その上に楣石を架構する。羨道の右側壁は１段で230×163cmの石材を１つ横長に配置する。左側は２段で223×163cmの横長の石材を１つ設置した上に厚さ25～40cmの石材を２個並べる。また、羨道左側壁では、玄門立柱石と側石の間に幅20cm程度の隙間が存在している。この隙間を約15cm角の礫で充填している。この礫については2009年度の発掘調査中に遺憾にも崩落してしまった（図27）。ただ、この礫の裏側から土師質土器（図30－12）が出土した（図28）。このことにより、羨道左側壁における玄門立柱石と側石の間の礫は後世の積み直しであることが判明した。

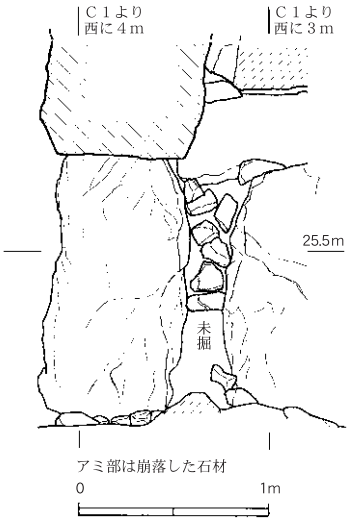


図27　崩落した石材

羨道左側壁の外側に石材の裏込めが露出していたので観察してみよう（図21：d-d'）。羨道左側石１段目の石材は上辺の長さがきわめて短いことがわかる。そのため２段目の石材との接触面積が小さく、１段目と２段目の石材の間に裏込石をかますことにより安定させている。裏込石が露出した部分のみの観察であったので掘り方や裏込めの土層の観察はできなかった。

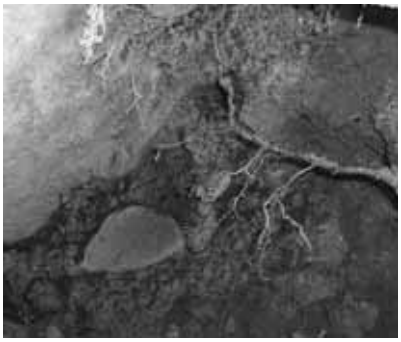


図28　礫裏からの遺物出土状況

この羨道左側一段目の石材はかなり内側に傾いているが、これは古墳築造当時からこの状態で石材を配置した

可能性がある。現状で天井はほぼ水平を保っているので、羨道左側壁が現状より直立した状態だったとすると、築造当時の天井が傾いた状態に復元される上に、羨道左測壁の石材と天井石との接触面積がより狭くなり、天井石を支えるには不十分な接触面積しか確保できなくなる。このことも現状の石材の傾きが築造当時のまま、あるいはそれに近いものであったことを示している。

玄室と羨道をあわせた左右の側壁を比較すると、右側の側壁にくらべ左側の側壁の造りがやや雑である感が否めない。先述の通り、玄室の右側壁は２枚の腰石で基本的なプランを形成しているのに対し、左側では２枚の腰石では長さが足りず縦長の石で長さを補っている。羨道においても、左側のみ２段積みであり、築造当時から石材を大きく内側に傾けて設置していた可能性が高い。玄門立柱と羨道側壁の間に隙間があり、角礫で充填しているのも左側壁である。右側壁を基準に石室を構築した故の現象であろうか。

天井石は現状で４石存在する。石室の外から観察すると、凹凸のある石材が使用されているが、玄室・羨道の天井は平滑である。平坦な面を内側にして天井石を配置したのであろう。羨道側から奥壁に向かって石材を重ねるように配置しているので、天井石は、羨道側より奥壁にむかって順に架構されたものと考えられる。なお、石室石材については吉村康隆氏の鑑定があり、高知大学2005に掲載されているので参考にされたい。　（清家）

注

（１）出土した須恵質の甕は小破片であるため報告書に掲載していないが、断面が灰赤色を呈し、器壁は0.9㎝を測る。表面には斜格子状のたたき目、裏面には連弧状の当て具痕をもつ。古墳時代の遺物と考えられる。

参考文献

高知大学考古学研究室編　2005『朝倉古墳測量調査報告書』高知大学人文学部考古学研究室、高知

高知大学考古学研究室編　2009『朝倉古墳発掘調査概要報告書』高知大学考古学研究報告第６冊　高知大学人文学部考古学研究室、高知

安岡源一　1953「史跡朝倉古墳」『文化財調査報告書』第５集　高知県教育委員会、高知：pp. 13－16

第Ⅲ章　出 土 遺 物

1　出土遺物の種類

玄室・羨道から、須恵器・土師器・土師質土器・陶磁器・鉄器・貨幣などが出土している。前述の通り、石室床面はほぼ全面にわたって盗掘を受けており、副葬当時の位置を保つ遺物は皆無であった。したがって遺物は盗掘によって撹乱された層あるいは盗掘後に移動した土の中から出土したものである。表２には古墳時代土器の出土地区と層位を記している。玄門から出土した破片と奥壁付近から出土したそれが接合する個体（図29－14・18）もあるので、遺物がもともとどこに配置されていたかを問うことは難しい。ただ、６と15はすべての破片が奥壁付近から出土したことから奥壁付近におかれていた可能性が考えられ、17の短頸壺は奥壁付近の敷石上にあったのでこれも奥壁付近にあった可能性が考えられる。金属器はすべて玄室からの出土であり、玄室に配置されていたとの想像はつくものの、それ以上の副葬品配置を考える術はない。

墳丘からの遺物は少ない。墳丘第１トレンチでは近世の陶磁器と須恵器の甕片が出土した。墳丘第２トレンチからは遺物の出土をみなかった。墳丘第１トレンチの出土遺物も小片で図示し得るものは存在しなかった。

（清家）

表１　古墳時代土器の出土地区と層位

番号	出土地区・土層
1	9A･10A区第２層
2	9区･10区間畦第２層
3	6B区第２層
4	8A区第３層
5	5A区第２層／5B区第２層／9B･10B区第２層
6	9B･10B区第１層／9B･10B区第２層／9A･10A区第２層
7	9B･10B区第２層
8	3A区第１層
9	6B･7B区間畦第３層
10	6区主軸畦第３層
11	7A･8A区間サブトレンチ(盗掘坑内)
12	3A区第３層
13	4B区第３層
14	5B･6B区間畦／5B区第２層／9A･10A区清掃中
15	9A･10A区第２層／9A･10A区清掃中／9A･10A区敷石の間
16	4A区第3層
17	9A･10A区第２層
18	5B･6B区間畦／8A区第３層／5A区第２層
19	8A区第３層／8B区第２層／6B区第２層／6A区第３層

凡例
1．左列の「番号」は図29中の番号を指す。
2．出土層位は図22ほかの土層中の番号を示さない。調査中の取り上げ層位である。第１層は表層あるいは表土層。第３層は石室床面（敷石・古墳盛土）直上層であり、第２層は１層と３層の中間層である。９Ａ・10Ａ区に第３層はなく、第２層直下が敷石であった。

2　土器

（１）古墳時代の土器

蓋杯（図29、図版15・16）　１～８は杯蓋である。１は復元口径11.1㎝、残存高2.9㎝である。天井部は大部分が欠損しているが、口縁部に向かってなだらかにカーブする。天井部から口縁部の境界付近でカーブがやや強くなっている。口縁部はやや外反

し、端部は丸くおさめる。口縁端部付近の内面にはかえりがついているが、かえりの先端は口縁端部よりも下方へ突出する。胎土は緻密である。欠損部分が多く調整や器高は不明である。

2は、復元口径が9.4cm、残存高1.8cmであり、天井部から口縁部にかけて残存している。天井部は水平に近く、天井部から口縁部にむかって、なだらかに下降する。口縁部は外側に張り出し、端部は丸くおさめる。外面は摩滅しているため、調整は不明である。内面にはかえりを持つ。かえりは口縁部より下方に突出し、端部を丸くおさめる。内面はナデ調整である。焼成はやや軟質で褐灰色を呈す。胎土は緻密である。

3は復元口径9.6cm、残存高0.9cmである。天井部は大部分が欠損し口縁部のみ出土している。口縁部に向かってなだらかにカーブする。口縁端部は丸くおさめる。口縁端部付近の内面にはかえりがついているが、かえりの先端は口縁端部よりも下方へ突出する。胎土は緻密である。小破片のため調整や器高は不明である。

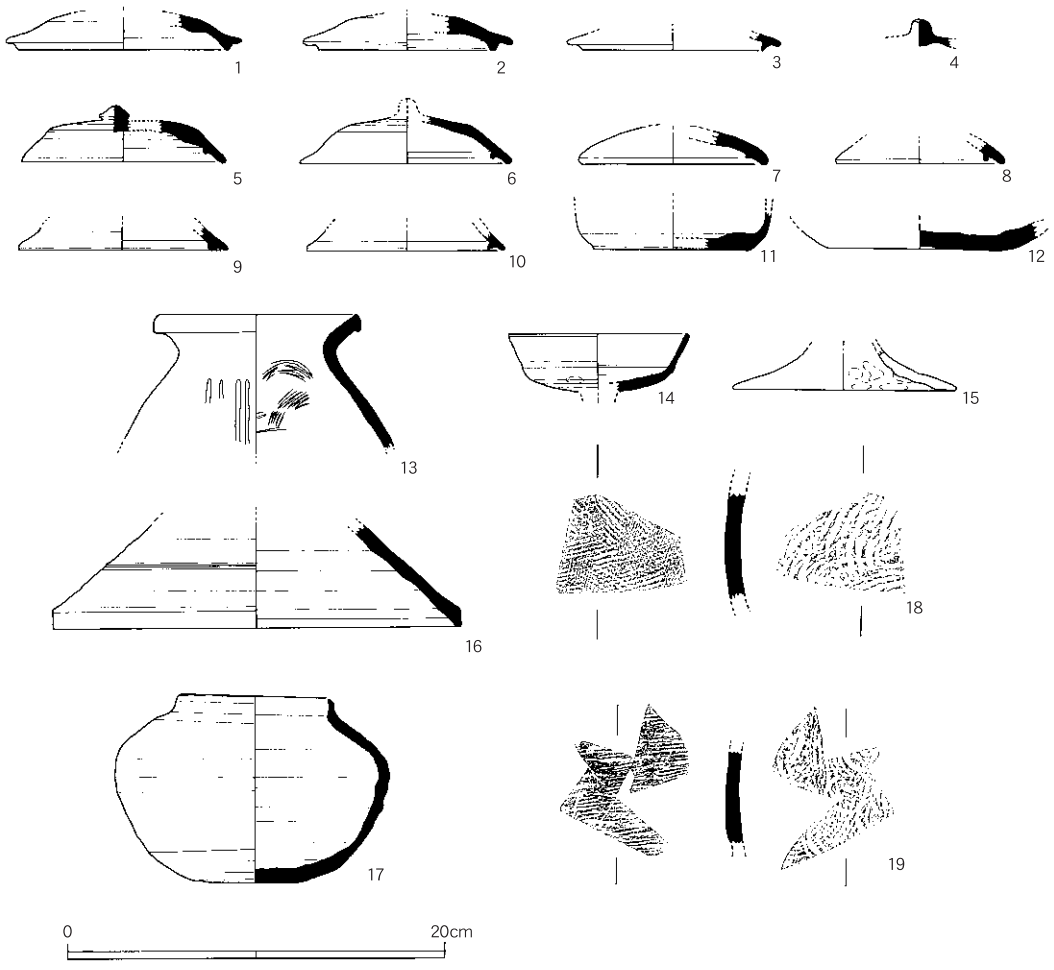


図29　古墳時代の土器

４は乳頭様のツマミである。直径1.1㎝、高さ0.8㎝である。胎土は緻密である。胎土および焼成が６とよく似ており、同一個体の可能性がある。

５は復元口径10.8㎝、残存高3.0㎝である。天井頂部まで遺存し、頂部に直径1.6㎝、高さ0.8㎝の宝珠ツマミを持つ。天井部は平坦であり、天井部から口縁部へはなだらかにカーブする。口縁端部は丸くおさめる。口縁部の内面にはかえりがついているが、かえりの先端は口縁端部よりも下方には突出しない。胎土は緻密である。天井部側から３分の１の範囲にはケズリが、ケズリより下側の範囲にはナデによる調整がみられる。ロクロの回転は右回りである。

６は復元口径11.4㎝、残存高3.4㎝である。天井部はやや平坦であり、天井部から口縁部へはなだらかにカーブするが、体部中央でカーブがやや強くなっている。口縁端部は丸くおさめる。口縁端部付近の内面にはかえりがついているが、かえりの先端が口縁端部よりも下方には突出しない。胎土は緻密である。天井部にはケズリが、ケズリより下側の範囲にはナデによる調整がみられる。またロクロの回転方向は右回りである。

７は復元口径10.0㎝、残存高1.9㎝である。天井部から口縁部へはなだらかにカーブする。口縁端部は丸くおさめる。口縁部の内面にはかえりがついているが、かえりの端部が口縁端部よりも下方には突出しない。胎土は荒い砂粒が混じるが比較的緻密である。調整にはナデとケズリが使われている。欠損部分が多く器高は不明である。

８は、復元口径9.0㎝、残存高1.0㎝であり、残存部は口縁部のみである。口縁部は外反せず、丸みをおびており、端部を丸くおさめる。内面には矮小なかえりをもつ。かえりは口縁端部より上方で端部を丸くおさめる。外面はケズリ調整・内面はナデ調整である。焼成は良好でオリーブ灰色を呈す。胎土は緻密である。

９は、復元口径11.0㎝、残存高1.3㎝であり、残存部は口縁部のみである。口縁部はわずかに外側に張り出し、端部は丸くおさめる。内面にはかえりを持つ。かえりは口縁端部下端と同じ高さで端部を丸くおさめる。内外面ともにナデ調整である。焼成は良好で灰白色を呈す。胎土は緻密である。

10は、復元口径10.6㎝、残存高1.0㎝であり、残存部は口縁部のみである。口縁部は外反して端部を丸くおさめる。内面にはかえりをもつ。かえりは口縁部と同じ高さで、端部はやや尖る。内・外面ともにナデ調整である。焼成は良好で灰色を呈す。胎土は緻密である。

11･12は杯身である。11は、復元底径8.4㎝、残存高1.8㎝であり、底部と体部の一部が残存する。底部は水平で静止ヘラ切りであると思われる。体部は、底部から高さ１㎝程度までは外傾して立ち上がり、そこから屈曲して垂直に立ち上がる。見込み部は中央部がやや窪み、その外側は水平である。内・外面ともにナデ調整を施す。焼成は良好で灰色を呈す。胎土は緻密である。

12は、復元底径9.0㎝、残存高1.7㎝であり、底部と体部の一部が残存する。底部は平坦で、

静止ヘラ切り調整と思われる。体部は大きく外傾して立ち上がる。見込み部は水平である。内外面ともにナデ調整を施す。焼成は良好で灰色を呈す。胎土は礫を微量含む。　（嶋・岡本）

壷（図29－13、図版16）　13は、壷である。復元口径は10.6㎝、残存高は7.0㎝であり、底部は欠損している。体部は丸みをおび、頸部は屈曲し外反して立ち上がる。口縁部は面を成し、口縁端部は丸くおさめる。外面は平行タタキを施しており、自然釉が付着している。内面は、口縁部・頸部は回転ナデ調整を施し、体部には当て具痕が残る。焼成は良好で、暗オリーブ灰色を呈す。胎土は緻密である。　（岡本）

高杯（図29－14、図版15）　杯部のみで脚部は欠損する。杯部の復元口径は9.6㎝、残存高3.0㎝である。杯部の中央付近には稜線がめぐる。口縁端部は丸くおさめる。胎土は緻密である。調整にはナデとケズリが使われており、またロクロの使用も認められ、素地土に含まれる砂粒の動きから右回りに回転していることが確認できる。　（嶋）

脚部（図29－16、図版16）　16は、残存部が脚部のみであるため器種は不明だが、台付壷の脚部の可能性がある。復元径は21.6㎝、残存高は5.3㎝である。脚部の先端部分は面を成し、端部はまるくおさめる。脚部は内傾して直線的に立ち上がり、外面にはナデ調整を施している。内面は粘土紐の単位を残し、ナデ調整を施す。焼成は良好で灰色を呈す。胎土は緻密である。　（岡本）

短頸壷（図29－17、図版17－（１））　口径7.8㎝、器高9.9㎝である。残りが非常によく、口縁と体部の一部を欠くのみである。わずかに内湾する口縁をもつ。口縁端部は丸くおさめる。体部は肩の張りがややきつくなっているが、体部中央付近で垂直に立ち、そこから底部にかけてなだらかにカーブしていく。底部は直径6.4㎝とかなり広い。胎土は荒い砂粒が混じっており、やや粗雑である。底部から５分の１の範囲にケズリ、残りの５分の４の範囲にはナデによる調整がみられる。またロクロの回転方向は右回りである。　（嶋）

甕（図29－18・19、図版15）　18は厚さ0.8㎝である。甕の内外面にはタタキ目がみられ、内面には同心円状のタタキ目が、外面には斜格子目状のタタキ目が施されている。欠損部分が多く調整や器高は不明である。

19は厚さ0.7㎝である。甕の内面にはタタキ目がみられる。内面には同心円状のタタキ目が施されている。欠損部分が多く調整や器高は不明である。　（嶋）

土師器（図29－15、図版17－（１））　おそらく高杯の脚部と思われる。脚部のみで杯部は欠損する。復元底径11.9㎝、残存高2.2㎝である。脚部の裾部はラッパ状に広がり、端部は丸くおさめる。調整にはナデが使われており、底部には指頭圧痕が確認できる。また底部内面には布目痕を確認できる（図版17－（１））。布目は１㎝あたり経糸10本、緯糸10本走っている。胎土は緻密であるが全体的にもろい。欠損部が多く器高は不明である。　（嶋）

古墳の時期　須恵器をみればおおよそ２時期に分けることが可能である。１～４の蓋をみれば

飛鳥Ⅰに所属しよう。５～10は飛鳥Ⅱと考えられる。このようにみると朝倉古墳は飛鳥Ⅰの段階で築造され、その後、飛鳥Ⅱの段階まで追葬が行われたと考えることができよう。石室の敷石から床面の敷き直しが想定されたが、２時期の土器はこれに対応する可能性がある。

飛鳥Ⅰの土器においては、杯Ｇばかりで杯Ｈを含まない点が特徴的である。杯Ｈを伴わないことが飛鳥Ⅰの中における時期差と考えてよいのであれば、朝倉古墳は飛鳥Ⅰ段階の中でも後半の土器と評価することができよう。（清家）

（２）古代・中近世の土器

瓦器（図30－３～８、図版19）　３は和泉型の瓦器碗である。直径14.3㎝、器高3.3㎝を測る。外面下部に指頭圧痕を多数残し口縁部はヨコナデを施す。内面は暗文を粗に施す。高台の直径は２㎝で高さは２㎜程度と低い上、器の中心からややずれたところに高台は取り付けられている。Ⅲ－２期かと考えられる(1)（尾上ほか1995）。

４は瓦器の碗である。外面はナデで調整されている。器壁が厚く、内面に水平な暗文が認められる。楠葉型もしくは和泉型だと考えられる。高台はしっかりしており、Ⅱ－２期と考えられる（尾上ほか1995）。

５は瓦器碗の体部と考えられる。内面は隙間がない程にヘラミガキが施されるが、外面はきわめて粗である。他の瓦器片と比較すると４や７と似ており、Ⅱ－３期と考えられる（尾上ほか1995）。

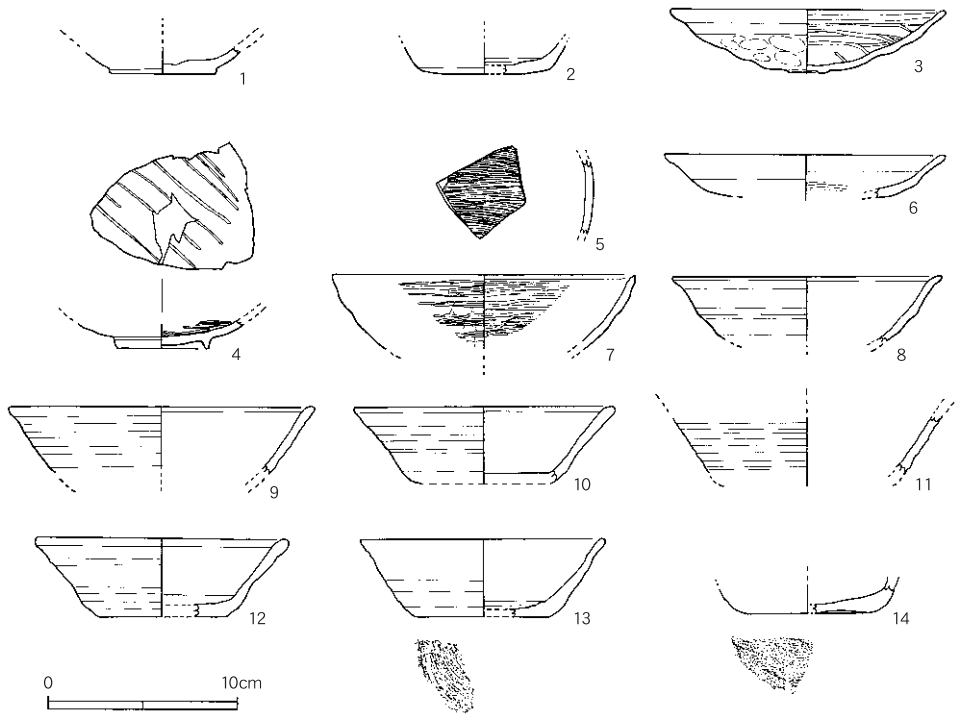


図30　古代・中世の土器

６は瓦器の皿である。復元口径は14.2㎝である。立ち上がりは緩やかであり、口縁端部は丸くおさめる。内面上部にはナデで調整されており、内部には暗文が認められない。外面上部はナデで調整されており、外面下部には指頭圧痕が見られる。和泉型と考えられる。また器高が低いことからⅢ－３期であると考えられる（尾上ほか1995）。

７は瓦器の碗である。復元口径は15.8㎝である。立ち上がりはなだらかなカーブを描いている。口縁端部は丸くおさめられており、沈線が施されていることから、楠葉型と考えられる。外面は指頭圧痕で調整されており、凹凸がある。ヘラミガキも施されており、ヘラミガキの隙間は大きい。また、内面は平行線上に暗文が密に施されていることからⅡ－２期であると考えられる（尾上ほか1995）。（藤井・清家）

土師器・土師質土器（図30－１・２・８～14、図版18）　１は土師器碗である。円盤状高台を有しているが、その高台は形骸化している。底部は静止糸切りである。10世紀末ごろかと考えられる。

２は土師器杯の底部である。底部径6.6㎝、残存高1.5㎝である。底部はヘラ切り未調整である。見込みには指頭圧痕とナデが認められる。10世紀前半ごろか。

８は土師器碗である。器形は瓦器碗に似ており、和泉型瓦器碗を模倣したものであろうか。口径14㎝を測り、内外面はナデで調整されている。外面は煤が付いている上、口縁端部にはタールが付着している。灯明として利用された可能性が高い。13世紀代か。

９は土師質土器である。口径16.2㎝、残存高3.5㎝を測る。胎土は精良で外面にはロクロ目を残す。12世紀末から13世紀初め頃と考えられる。

10は回転台土師器碗である。口縁径13.6㎝、器高4.0㎝を測る。外面にロクロ目を残す。口縁端部にはタールが付着している。内面にもタールが付着している。灯明として利用された可能性が高い。13世紀代か。

11は回転台土師器碗である。破片の最下部に底部が残存している。底部径は10.6㎝。外面にロクロ目を残す。

12は回転台土師器碗である。口縁部径13.4㎝、器高4.1㎝。底部からやや外反するように口縁部に至り、口縁部は丸く端面を納める。外面にはロクロ目を残す。底部には回転糸切りの痕跡が認められる。

13は回転台土師器の杯であり、色調はにぶい黄橙色を呈し、底径3.8㎝、高さ4.1㎝である。体部は直立して立ち上がり、口縁部はやや外反して端部を丸くおさめる。内外面ともにナデ調整を施している。底部には糸切り痕が認められる。

14は回転台土師器の皿で、色調はにぶい橙色を呈し、底径6.9㎝である。内外面ともにナデ調整である。底部内面には凹みがあり、糸切り痕が認められる。10から14は14世紀に下るものもあるがおおむね13世紀であろうと考えられる。（馬場・清家）

陶磁器（図31、図版20－（１））　次に、近世の遺物について述べる。

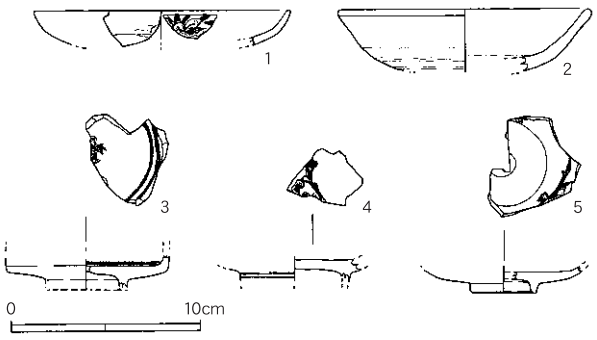


図31 近世陶磁器

１・３～５は染付磁器である。１は皿であり、口径13.4cmである。皿内面には草花文が、外面には連続唐草文があり、色調は白色を呈している。３は筒型の碗であろう。直径４cmの高台が付く。見込みには手描きによる五弁花文と二重圏線が認められる。18世紀後半と考えられる。４は碗ではないかと思われる。高台部分しか残存しておらず、法量は不明である。高台の外側には２本の線がある。５は染め付小皿であろう。直径3.4cm、高さ５mmの高台を持つ。見込みには蛇の目釉剥ぎが認められ、その周囲に草花が描かれていたようであるが、絵柄は不明である。顔料の発色が良いので、19世紀に属すと考えられる。

２は陶器の皿であり、色調は明赤褐色の地に黒褐色の釉を施しており、口径は13.0cmである。体部は直立して立ち上がり、端部は丸くおさめる。19世紀初頭を中心とする時期に位置づけることができる。（馬場・清家）

古代・中世・近世土器の意義　こうしてみると後世の土器は４時期に分かれることがわかる。10世紀・12世紀中頃・12世紀末から13世紀そして近世である。このうち12世紀末から13世紀の土器が最も量的に多い。また図30－８・10は口縁部にタールが付着し、灯明として利用した可能性がある。これらの土器は盗掘時のものとも考えられるが、灯明を使って石室を祭祀の場として利用したことも考えられる。このことに関して、図30－12の土器は重要である。この土器は、羨道部左側壁と玄門立柱石の間にあった礫の背後から出土したものである。礫の背後から出土したことから、礫自体が中世に積み直された可能性を示す。一部とはいえ石室の石材を後世に積み直したとするならば、石室を再利用していた可能性が浮上する。この再利用の内容は不明であるが､祭祀の場合は式内社である朝倉神社との関係も視野に入れておくべきであろう。そういった意味で、後世の土器は盗掘を含め古墳が後にどのように利用されたかを知る重要な資料だといえる。しかし、後世の営みすら破壊する乱掘が近現代にあったので、この解明は本古墳の資料だけではかなわないものである。（清家）

3　金属器

（1）古墳時代の金属器

鉄釘（図32－1・図版17－（2））　1は鉄釘である。先端部分は失われており、残存長は4.6cmである。腐食が進んでおり、膨らんでいる所もあるが、元の断面は9㎜×9㎜の正方形に近い形だったと考えられる。表面を観察すると、所々表面が剥がれている部分を見ることができる。頭部の形を見てみると、胴部とほぼ同じ幅で頭部を造り出していないことから、田中彩太の言うB1類、金田善敬の言うY類であると考えられる（田中1978・金田1996）。

刀子（図32－2・3、図版17－（2））　2は刀子である。残存長は4.6cmである。刀身はほとんど残っておらず関に近い部分が残っているのみであるが、茎部は完存している。刃は、関から2～3㎜ほど切っ先側で最大幅になっており、幅1.4cmを測る。関は両関であり、関の幅は両側とも約2㎜の長さである。茎の長さは3.0cmであり、木質などは見られない。茎は関から2cm程度までは幅をほとんど変えないが、茎尻から1cm程度の所で両側からやや幅を狭めて4㎜となる。茎尻は直線をなしており、臼杵勲の言う一文字尻である（臼杵1984）。

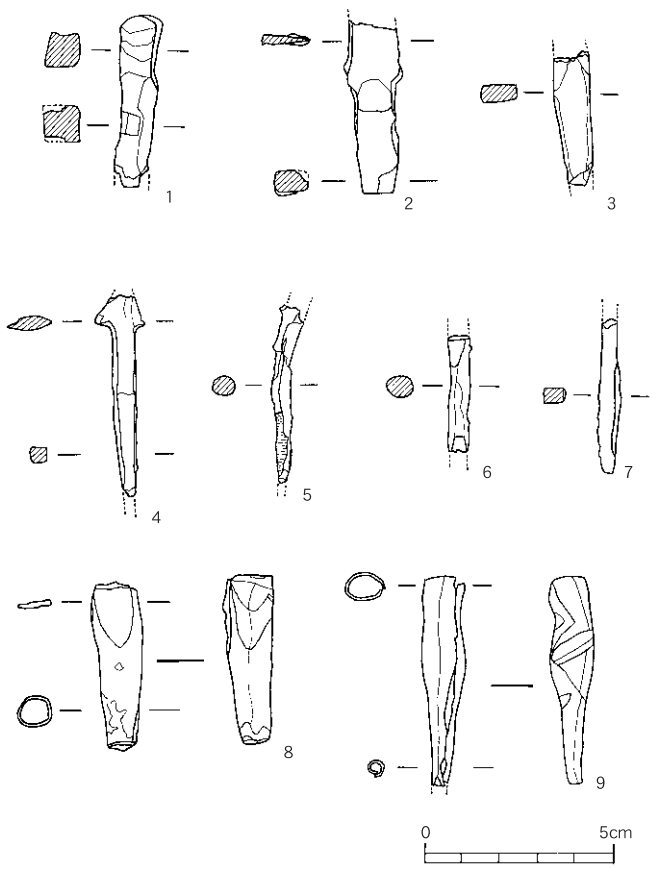


図32　金属器

3も刀子であると考えられる。残存長は3.4cmで、茎のみが残存している。茎尻も欠く。この茎は両側からやや幅を狭めている。現状で最大幅9㎜、最小幅4㎜である。

長頸鏃（図32－4～7・図版17－（2））　4は長頸鏃であると考えられ、残存長は5.5cmである。鏃身部は先端部分を欠き、茎部はまったく残っていない。鏃身関は両関を呈しているが、均等に切れ込まれておらず、片側が4㎜、もう片側は

2.5㎜である。

５も長頸鏃であると考えられる。残存長は4.7㎝である。茎部のみの残存であり、茎尻も欠けている。茎部は中央より鏃身側の所で曲がっている。また中央より茎尻側では、樹皮のようなもので巻かれていたと思われる痕跡が見られる。

６は長頸鏃の茎の一部であると考えられる。残存長は3.1㎝のみである。茎尻は失われている。有機質の痕跡は見られない。

７も長頸鏃の茎の一部であると考えられる。残存長は4.1㎝である。茎尻は遺存し、有機質の痕跡は見られない。（藤井）

（２）近世～現代の金属器

煙管（図32－８・９、図版20－（２））　８は青銅製の煙管の肩であると考えられる。長さは4.4㎝である。雁首の肩なのか吸口の肩なのかは不明である。青銅板を重ねず端面同士を合せるように丸めて造っている。片側は扁平になってしまっているが、反対側から中央付近までは原型に近い形を保っていると考えられる。扁平でない部分から考えると、口径は0.8㎝であったと考えられる。扁平でない部分には内部に何か詰まっているようであるが、内容物は不明である。扁平になっている端の断面を観察すると折れてしまっているようである。雁首や吸口に肩を持つものは初期段階のものであり、古泉弘のいうⅠ～Ⅲ期の間に属するものであると考えられる（古泉1983）。

９も青銅製の煙管の吸口である。現存している長さは5.7㎝である。８と同じように青銅板を重ねず端面同士を合せるようにして丸めて造っている。吸口側では腐食が進んでいる。口径は雁首側が0.8㎝、吸口側が0.5㎝であるが、側面が土圧により扁平化しているため、この大きさには若干の誤差があると考えられる。8と同じく口径が0.8㎝であることから、同一の煙管であったと考えられる。同一の煙管であるとするならば、肩を持ち、吸い口の後部が折り曲がっていないという特徴から、古泉のいうⅡ・Ⅲ期にあたり（古泉1983）、17世紀後半から18世紀前半の間に属すると考えられる。

貨幣（図版20－（２））　貨幣は保存処理を施したが、脆弱であるため拓本あるいは図化はできなかった。そのため図版でのみの報告とした。１は寛永通宝である。古寛永銭であると思われる。径は24㎜である。２も寛永通宝である。新寛永銭であると思われる。径は22㎜である。３も寛永通宝であり、新寛永銭であると思われる。径は22㎜である。

４は桐１銭青銅銭である。直径は23㎜であり、「昭和10年」の銘が入っている。（藤井）

注

（１）古代以降の土器については、池澤俊幸氏・浜田恵子氏・松田直則氏・吉成承三氏よりご教示をいただいた。

参考文献

臼杵　勲　1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会：pp. 49-70

尾上　実ほか　1995「瓦器碗」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社、京都：pp. 315-337

金田善敬　1996「古墳時代後期における鍛冶集団の動向　－大和地方を中心に－」『考古学研究』　第43巻第２号　考古学研究会、岡山：pp. 109-118

古泉　弘　1983『江戸を掘る』柏書房、東京：とくにpp. 117-128

高知大学考古学研究室編　2009『朝倉古墳発掘調査概要報告書』高知大学考古学研究報告第６冊　高知大学人文学部考古学研究室、高知

谷田有史　2002「日本のきせるとクレイパイプ」小林克編『掘り出された都市　日蘭出土資料の比較から』日外アソシエーツ、東京：pp. 211-231

田中彩太　1978「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」『考古学研究』第25巻第2号　考古学研究会：pp. 47-62

田辺昭三　1966『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園創立90周年記念研究論集第10号　平安学園教育研究会、京都

日本貨幣商協同組合　2009『日本貨幣カタログ』日本貨幣商協同組合、東京

第Ⅳ章　総　括

1　調査成果のまとめ

2004年の測量・石室実測調査、2008年度・2009年度の発掘調査と３回にわたる調査を行った。現時点で判明している内容をまとめておくことにしたい。

墳丘　墳丘は宅地開発のため石室の３方は擁壁で囲まれており、東側も崖面である。したがって調査区を設定する箇所もほとんど残されていなかった。トレンチを設ける数少ない空閑地である石室北東側と北側にトレンチを設けたのであった。石室北側にある墳丘第２トレンチでは表土直下から墳丘盛土が検出された。石室の掘り方は検出されなかったので、少なくとも石室上部は盛土を置きながら石材を積んでいった可能性が高い。このトレンチの北側は、住宅の擁壁工事で大きく削平を被っていたので、墳端を確認することはできなかった。石室の中心から北側７ｍまで盛土が認められたので、墳丘は少なくとも直径（一辺）14m以上であるということは推測できる。墳丘第１トレンチで確認された地山は石室床面よりも高いので墳丘は第１トレンチよりさらに北側へ広がる可能性も想定された。その場合は直径（一辺）25m以上の墳丘となるが、確証が得られたわけではない。墳形に関しても情報を得ることはできなかった。角塚型石室を持ちTK217型式期段階の高知平野における盟主的首長墳である朝倉古墳が25m以上の墳丘規模を持っていたとしてもけっして不自然ではない。ただ、上記以上の情報はないので、これ以上の推測は慎んでおくべきであろう。

石室　今年度の調査で石室の全容はおおよそ明らかになった。規模は現状で、全長8.33m・玄室長5.23m・玄室幅2.54m（奥壁付近）・2.40m（玄門付近）である。玄室高は奥壁付近で検出された２重の敷石のうち、上面から計測すると2.40m、下段の礫から計測すると2.50mである。玄門付近の盛土面から測った玄室高は2.50mである。羨道は、長さ3.10m・羨道幅1.85m・羨道高1.70m・玄門高1.33m、玄門幅1.30mである。石室羨道は、現状よりも長く伸びる可能性が指摘されていたが、石の抜き取り痕などは検出されなかったので、現状の規模が築造当時の石室規模であった可能性が高い。羨道部床面あるいは前庭部も盗掘と削平で床面が荒らされていたが、羨道部は玄室と同じく敷石で覆われていた可能性が高い。玄門部床面も人頭大の敷石が置かれていた。土佐では１枚あるいは数石で構成される敷居石が設置される例が多く、とくに大型石室は１枚の敷居石が設けられるのが一般的なので、この点は朝倉古墳の特徴といえるであろう。床面は２面、あるいは敷石を貼り替えるなどの行為があったと考えられる。

石室は角塚型石室（山崎1985）の範疇に含められるものである。角塚型は近年四国の終末期を語る上で重要な石室であるとして注目されている。しかし、調査によって石室の全貌が明ら

かにされた例は少なく、本調査は角塚型石室の重要な資料を提供したといえる。その意義についてはこれまでにも記したところである（清家2007・2010・2011）が、後で再論することにしたい。

出土遺物　古墳時代に属すると考えられる遺物は須恵器（蓋杯・高杯・甕・壷・短頸壷ほか）・土師器のほかに、鉄器では鉄鏃・刀子が出土し、釘片と考えられるものも出土している。釘の存在は、木棺が使用された可能性を示すので重要である。これらの遺物はすべて盗掘他で攪乱された土層から出土しており、原位置をとどめていなかった。しかしながら、これらの資料は古墳の時期を決定する上で重要である。この点は後述する。

さらに古代から近世にいたるまでの土器が出土し、朝倉古墳が築造後どのような経緯をたどったかを考える上で興味深い情報を提供している。

2　朝倉古墳の意義

（1）朝倉古墳の編年的位置

石室の相対的位置　朝倉古墳は角塚型石室に含まれる。角塚型石室の編年については山崎信二と筆者が手がけており、本書第Ⅱ部の論考で佐伯麗がさらなる分析を加えている。

山崎信二は、石材の大きさならびに側壁の段数と羨道幅指数を基準として角塚型の時期的変化の方向性を示し、おおよそ３時期に区別している（山崎1985）。筆者はこれに加えて玄室幅に対する玄室高の比を基準として同じく３段階に分類した（清家2007）。佐伯は、山崎と筆者の分析を下敷きとし、様々な石室計測値を指数化して時期差を抽出しようとした。佐伯も３段階に区分する点では、山崎と清家の研究と同じであるが、側石第１段目の配置から横横系と横縦系の２系統に分類した点が目新しい。山崎は朝倉古墳の位置づけを示していないが、清家と佐伯は朝倉古墳石室を３段階区分の第２段階に置くことで共通する。

なお、今回の調査の結果、朝倉古墳の玄室高指数は100前後となった。そのため、角塚型石室の筆者の編年（清家2007）は微妙に変更が必要である。筆者は角塚型を３段階に分け、朝倉古墳を第２段階においた（清家2007）。朝倉古墳自体の位置づけには変更はない。むしろ、第２段階に属するとした他の古墳の位置を変更する必要が出てきた。前稿（清家2007）では、朝倉古墳と同じ第２段階として愛媛県宇摩向山古墳１号石室と香川県角塚古墳を挙げていた。その際、向山古墳と朝倉古墳に比べ、角塚古墳の玄室高が低いことから第３段階に下げるべきかもしれないという見解を付しておいた。今回の調査により、朝倉古墳における玄室高の玄室幅に対する比率が、向山古墳１号石室のそれと近似するところとなり、角塚古墳の玄室高だけが顕著に低くなった。角塚古墳の石室を第３段階に下げる根拠がより強くなったのである。この考え方も佐伯と清家で共通するところである。

須恵器の年代　角塚型石室群の中での相対的位置づけは以上の通りであるが、土器編年あるいは絶対年代での位置づけが次に問題となる。これまでにも角塚型石室に伴う土器資料は知られているものの、正式な調査を経ない資料が多かった。

そういった意味で正式な石室発掘調査を経て土器が出土した朝倉古墳は、重要な資料なのである。激しい盗掘を受けているが、現在のところ本古墳出土資料が角塚型石室の年代を決める基準資料となるであろう。先述の通り、朝倉古墳から出土した須恵器は飛鳥Ⅰの須恵器と飛鳥Ⅱの須恵器である。前者は杯Gばかりで杯Hを含まないことからTK209型式期を含まないことが考えられる。飛鳥Ⅰの土器の中でも後半の土器といえよう。前者はおおよそ7世紀前半でも半ば以降である、後者は7世紀中葉に位置づけられるであろう。

朝倉古墳以外でまとまった須恵器が出土している角塚型石室は宇摩向山古墳だけである。この資料に関しては、山崎信二は飛鳥Ⅱから飛鳥Ⅲの須恵器であると評価する。角塚古墳周溝から出土した須恵器もこれに矛盾しないという（森下1995）。

近年、史跡整備に関わって宇摩向山古墳の調査が進み、墳丘から新たな資料が得られた（中ほか編2009）。周溝内埋土・近現代の整地土から、あるいは表面採集から飛鳥Ⅰ段階の須恵器とともにTK209型式期に属する須恵器が比較的多く出土している。報告者は向山古墳1号石室と伝えられる須恵器は飛鳥ⅠとⅡに属しているとし、墳丘調査によって出土した須恵器とやや時期差が認められるとしている。調査者は墳丘築造がTK209型式期であって、1号石室初葬の時期はTK209型式期前後にあると述べる（中ほか編2009）。墳丘は部分的に削平されており、周溝埋土にも墳丘盛土が堆積しているので、盛土中に含まれた古墳築造前の須恵器が混じっている可能性は捨てきれないものの、報告者の見解は肯んじられるところであろう。

宇摩向山古墳1号石室は佐伯と筆者の分析では朝倉古墳石室と同時期に位置づけられる。向山古墳1号石室から出土したと伝えられる須恵器は朝倉古墳出土須恵器とほぼ同時期である。佐伯と清家の角塚型石室第2段階は飛鳥Ⅰに属することは間違いないが、向山古墳の墳丘出土土器が向山古墳1号石室の築造年代と関わるなら、第2段階の上限にはTK209型式段階を含めねばならないかもしれない。向山古墳の石室の調査はこれからであり、向山古墳1号石室の時期は今後の調査に期待することにしたい。

（2）石室の系譜

本古墳の石室は角塚型であることは繰り返し述べているところである。土佐にはこの石室の源流を求めることができないことは明らかだ。TK209型式段階の土佐では畿内型横穴式石室に似た舟岩型石室が主流だからである。山崎信二によれば角塚型は平塚型が変容した石室であるので、角塚型は瀬戸内で誕生した石室型式と言える。実際に角塚型石室の分布の中心は四国の瀬戸内側にあり、角塚型石室でも大型のそれは瀬戸内中央部にある。朝倉古墳の石室が瀬戸内から影響を受けて築造されたことは間違いないところである。

本書第Ⅱ部の論考で佐伯麗は、角塚型石室を横横系と横縦系の２系統に分け、横縦系が瀬戸内中央部に分布し、横横系はその周辺部に分布するというきわめて興味深い分析を行っている。朝倉古墳石室は横横系第２段階にあたる。この分析結果はきわめて興味深いが、その系譜関係にはやや疑問がある。

まず、佐伯の言う横横系第１段階は角塚型ではなく平塚型に含めるべきであるということだ。平塚型と横横系第１段階の石室が重複することは佐伯自身が認めているところである。佐伯が横横系第１段階に含める梅木平古墳・松ノ本古墳・七間塚古墳は、奥壁が数段の石積みでつくられていること、側壁第１段の石が２枚でなく３枚以上の石で構成されている点も平塚型の特徴である。角塚型が平塚型から出現したことはまちがいないので、横横系角塚型も平塚型の影響が強いとすることも正しいと考える。しかし、横縦系角塚型も平塚型から出現したのであれば、当初から２系統に分かれたと考える必要はない。横横系角塚型が平塚型から直接変遷を遂げたのではなく、横縦系角塚型から分派した可能性も考えられるということだ。

横横系角塚型第１段階の石室はすべて平塚型であるとすれば、横横系角塚型は第２段階から出現することとなる。その時には横縦系角塚型がすでに出現しているので、横横系角塚型石室は横縦系から分派したと考えるのがより妥当であろう。横横系角塚型と平塚型の類似は、角塚型以前に地方へ分散していた平塚型の影響が残されたのではなかろうか。

このように整理すれば、佐伯の示した両系統の特徴はより整合的に説明ができる（図33）。佐伯は①横縦系第１段階の石室は角塚型石室として完成度が高いこと、②第２段階には、横横系と横縦系に接触があったことを指摘する。さらに③第２段階以降、計測的属性、すなわち石室の様々な数値による指数の変化が両系統で類似を見せていることを述べる。①横縦系第１段階の完成度が高いことは、横縦系が角塚型分布の中心である瀬戸内中央部にあり平塚型から直接変化して成立したものであることに起因しよう。横横系に先んじて横縦系角塚型が成立したことを示している。

②の両系統の接触とは、むしろ横縦系から横横系が派生したことを表しているのであり、③とともに四国中央部からの影響を各地が受け続けていることを示しているのである。

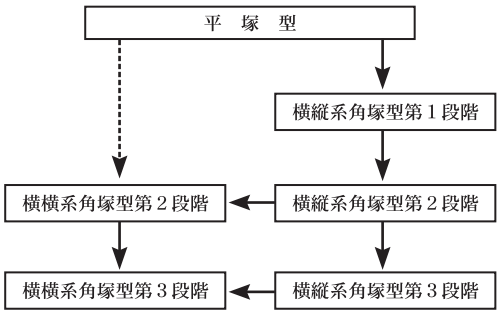


図33　角塚型石室の系統

ただ、横横系が横縦系より平塚型の影響を残す、平塚型の影響を受けている可能性は高い。側石第一段目に横長の石材を２枚並べて辺を作る特徴は、平塚型石室の第１段目石材が基本的に横長に置かれていることに関係するであろうし、朝倉古墳のように楯石を持つ点は平塚型の特徴である。角塚型第２段階に角塚型が伝播する際に、先に各地へ分散した

平塚型が影響を与えた可能性を考える。土佐には平塚型が存在しないので、別のところで平塚型の影響を受けたものがさらに土佐へ伝播したのではなかろうか。

（3）土佐の終末期古墳と朝倉古墳

これまでにもいくつかの論考で繰り返し指摘したところであるが（清家2006・2007）、古墳時代後期以降、高知平野の盟主的首長墳は同一地域に安定して築造されず、時期毎にその築造地域が変化している。

まず高知平野の東部に伏原大塚古墳が築かれる。他の領域では、小型の古墳が築造されているものの明確な大型古墳の存在は知られていない。伏原大塚古墳は高知平野に大型古墳が築造される端緒となる古墳であり、TK43型式期段階では高知平野最大の古墳であって高知平野の盟主的首長墳といえる。

次のTK209型式期段階には、最大規模の古墳は高知平野の中部北側にある岡豊に築造され、高知平野の勢力の中心は岡豊にあることは明白である。岡豊にある小蓮古墳は現存する石室の中で最大である。小蓮古墳の東側500mには舟岩古墳群が築かれている。この段階における最大規模墳の小蓮古墳が盟主的首長墳であることは間違いない。

TK217型式期段階になると、大型古墳は多くの地域で築造を停止する。しかし、この段階において平野西部で大型石室墳の朝倉古墳が築造される。高知平野西部においては朝倉古墳以外の古墳については詳しいことが知られていないので、詳述はできないがこの段階にいたって初めて大型古墳を築造した可能性もある。

さらに付け加えれば、朝倉古墳以降、７世紀後半には古墳築造は行われず盟主的首長の動向を考える資料を欠いてしまう。さらにその後、国府は南国市岡豊に営まれる。盟主的首長墳の築造場所が政治的中心を反映するとすれば、政治的中心は、７世紀後半の空白を経て、朝倉古墳のある高知平野西端から国府のある高知平野中央部に移動すると言えるのだ。

このように後期から終末期においては盟主的首長権の継承が不安定であり、あるいは政治的中心が移動することは明らかである（図34）。

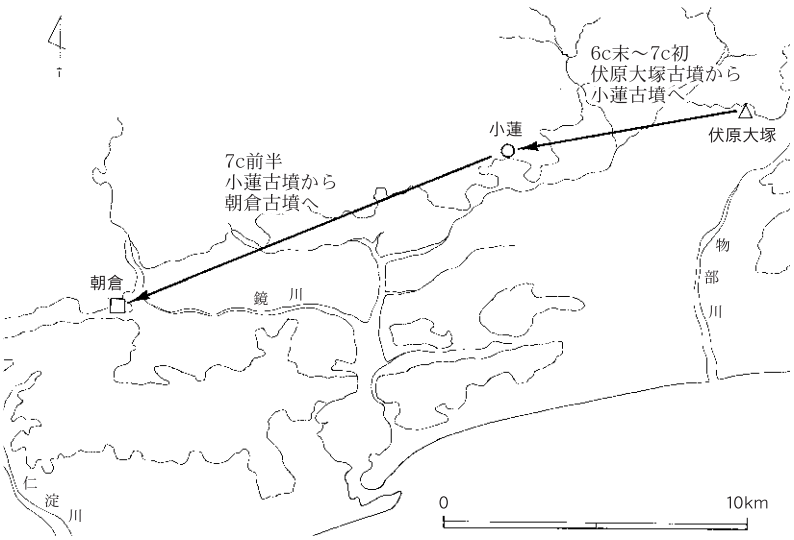


図34　盟主的首長墳の移動

盟主的首長墳が移

動する背景を特定することは困難であり、多様な要因が考えられる。考えられる要因の一つには、中期以前に古墳築造がなかったことに示されるように、地域的政治秩序が整えられていない中で、急速に階層秩序が構築されていったことにあると考えている（清家2011）。畿内を中心として本格的な国家形成が進行し、政治組織や地方支配の体制が急速に整えられていく。高知平野においてもその対応が求められる。そうした状況下で、秩序構築の主導権をめぐる争いが首長間にあった可能性を考えるのである。

（4）瀬戸内と朝倉古墳

先述の通り、角塚型の朝倉古墳石室は瀬戸内の影響を受けて成立した可能性が高い。朝倉古墳は高知平野の西端に位置する。朝倉古墳のさらに西側にある仁淀川を遡上して瀬戸内へ抜けることも可能である。その位置からも瀬戸内との関係を示していると言えよう。

大久保徹也は四国各地に角塚型石室が拡散する動向から、四国全体につながりができる際の新たな活動をみる（大久保2009）。四国全体につながりができる際に、土佐の勢力にとっても対応が迫られることになる。

筆者は前稿において、小蓮古墳は南四国太平洋沿岸にある四国中央市古津賀古墳や海陽町大里2号墳と石室が類似していることから、小蓮古墳被葬者は太平洋沿岸のルートを掌握していたとの見解を示している（清家2010）。TK217型式期段階になって、四国全体のつながりや瀬戸内沿岸交流がより重視される中で、太平洋沿岸を重視する小蓮後継勢力から、瀬戸内との繋がりの強い朝倉の勢力が盟主的首長の地位を奪取したと考えている。

角塚型石室の分布にみる広域的政治変動　朝倉古墳が瀬戸内の勢力と結びついていることから、広域の政治的変動と連動して盟主的首長墳の移動が行われたことが推測できる。角塚型石室の分布をさらに詳しく見ることによって、この点をさらに掘り下げたい。

角塚型石室は九州からの系譜をひきつつ、複室構造石室が瀬戸内で独自に変化した石室であることが知られる（中里2009）。分布を見ると瀬戸内に点的に分布している様子が理解できる。これらの石室は地域を隔てていても、平面規格や構築方法に共通点があるので石室築造に関し情報が共有されていたことが明らかとなっている（中里2009）。

そこで注目したいのは角塚型石室墳のそれぞれの地域における築造場所である。角塚型石室の標識となった角塚古墳は香川県観音寺市に所在する。讃岐では古墳時代前期以来、東讃が古墳築造の中心地であった。古墳時代後期、とくに後期後半以降、寒川・高松東部・高松西部・阿野・仲多度・三豊に大型古墳が併存するが、その中でも三豊地域では母神山・椀貸塚・平塚・角塚という大型石室墳が継起的に築造され、他地域と比較しても突出した勢力を誇る（大久保2004）。三豊地域は後期前半までは顕著な首長墳が造られない地域であって、後期後半の大型古墳は新興の勢力と呼べるものである。TK217型式期段階には、他地域で大型古墳の築造が停止し、角塚古墳が讃岐で突出した規模の古墳となる。

伊予においても基本的に同様な現象が認められる。角塚型石室を内包する宇摩向山古墳は１辺70m×55mの巨大方墳である。宇摩地域は古墳時代後期に東宮山古墳や経ヶ岡古墳という首長墳が築かれ始める新興勢力であり、TK209型式期に至って向山古墳という東予全域あるいは伊予の盟主的首長墳を輩出する。

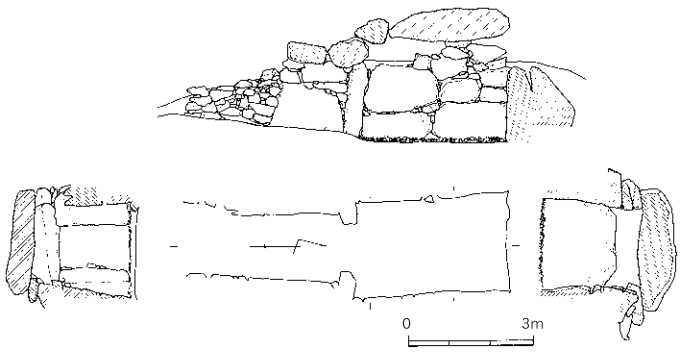


図35　天満１号墳石室

すなわち、讃岐・伊予・土佐では６世紀以降に台頭し盟主的位置を奪取した首長墳に角塚型石室が導入されているという共通点がある。

さらに注目すべきは角塚型石室あるいは角塚型と関係を持つ石室が近畿地方にも存在することである。紀伊にある有田川町・天満１号墳（図35）は、やはりTK209型式～TK217型式の須恵器を出土する。奥壁は大きな正方形の鏡石を置き、天井石までの間に補助的な石材を積んでいたと推測される。玄門は、立柱石が羨道側にせり出し、楣石を持つ。これまで天満１号墳は岩橋型石室の変容として理解されてきた(1)が、むしろ角塚型との類似点に着目したい。少なくとも角塚型の影響を認めるべきである。また、石室の上半部を失って不明な点は多いものの、奥壁や玄室平面形などの類似から御坊市・岩内１号墳も天満１号墳がさらに変化した石室の可能性が高い。これらの古墳は紀ノ川流域ではなく、前者は有田川、後者は日高川流域にある。すなわち紀中に位置している。紀中は古墳時代を通して顕著な首長墳が築かれない地域である。古墳時代後期の紀伊では岩橋千塚古墳群に代表されるように、首長墳はおもに紀ノ川流域に築造される。その岩橋千塚古墳群は６世紀末には衰退する。それに代わるように紀中に天満１号墳や岩谷１号墳が築かれるのである。両者は墳丘規模がそれぞれ直径約20m・１辺19mと大きくないので紀伊の盟主的首長墳という評価を行うには躊躇を覚えるが、６世紀代に隆盛を誇った岩橋千塚古墳群が衰退する中で出現した新興勢力との評価をおこなうことは妥当であろう。

大久保の言う角塚型石室の拡散（大久保2009）は四国にとどまらず、紀伊にも及び、新たな繋がりは近畿の勢力にも及んでいることが明らかである。他地域での首長墳の築造が停止される中、後期後半以降に台頭してきた新興勢力が盟主的地位を獲得しつつ、そうした新興勢力に角塚型石室が採用されているのである。まさに首長系譜の変動がここに認められ、そうした変動が瀬戸内から紀伊にかけて連動して存在し、南四国においてやや遅れる形で追随するという様子が観察されるのである。

1.岩畠1号墳　2.大坊古墳　3.梅木平古墳　4.七間塚古墳　5.原峯1号墳
6.宝洞山1号墳　7.宇摩向山古墳　8.角塚古墳　9.松ノ本古墳　10.樫木駄
馬古墳　11.朝倉古墳　12.穴不動古墳　13.天満1号墳　14.岩内1号墳

図36　角塚型石室と関連する石室の分布

7世紀において紀伊の岩橋千塚古墳群が衰退したと述べたが、岩橋千塚古墳群は紀氏の奥津城であったと考えられる。紀氏は畿内政権下にあって瀬戸内航路を掌握した氏族である（岸1963・栄原1999)。それに代わるように新興勢力が紀伊から瀬戸内の盟主的位置を占めたことから、当時の交通の大動脈である瀬戸内の交通路の掌握についても、新興勢力が大きく関わることになったことは想像に難くない。瀬戸内の交通路は畿内政権にとっても外交や流通にきわめて重要なルートである（図36)。そこに新興勢力が台頭してくることは畿内政権と無関係に起こることではないであろう。すなわち角塚型石室墳で認められる首長系譜の変動は畿内政権の動向と連動する可能性が考えられる。

朝倉古墳はそうした瀬戸内をめぐる勢力交替にかかわって、土佐で盟主権を握った新興首長の墓だと評価できるであろう。　（本章はすべて清家）

注

（1）黒石哲夫によって、天満古墳群・岩内古墳群は疑似岩橋系石室に分類されている（黒石2005)。

参考文献

大久保徹也　2004「讃岐の古墳時代政治秩序への試論」『古墳時代の政治構造』青木書店、東京：pp. 80-104

大久保徹也　2009「大野原古墳群の基礎的検討」『一山典還暦記念論集　考古学と地域文化』一山典還暦記念論集刊行会、徳島：pp. 501-510

黒石哲夫　2005「紀伊における後期古墳時代の集団関係」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 697-730

清家　章　2007「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究』真陽社、京都：pp. 447-464

清家　章　2010「横穴式石室にみる南四国太平洋沿岸地域の関係」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係』高知大学人文社会科学系、高知：pp. 131-143

清家　章　2011「首長系譜変動の諸画期と南四国の古墳」『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』　大阪大学大学院文学研究科、大阪：pp. 29-42

中里伸明　2009「四国北東部における横穴式石室構築に関する情報共有－地域差にもとづく型式組列への試み－」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店、福岡：pp. 73-99

中勇樹ほか編　2009『宇摩向山古墳発掘調査報告書Ⅰ－平成15年度から平成20年度調査報告書－』四国中央市教育委員会、愛媛

山崎信二　1985『横穴式石室構造の地域別比較研究』科学研究費報告書（2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社、東京に再録。）

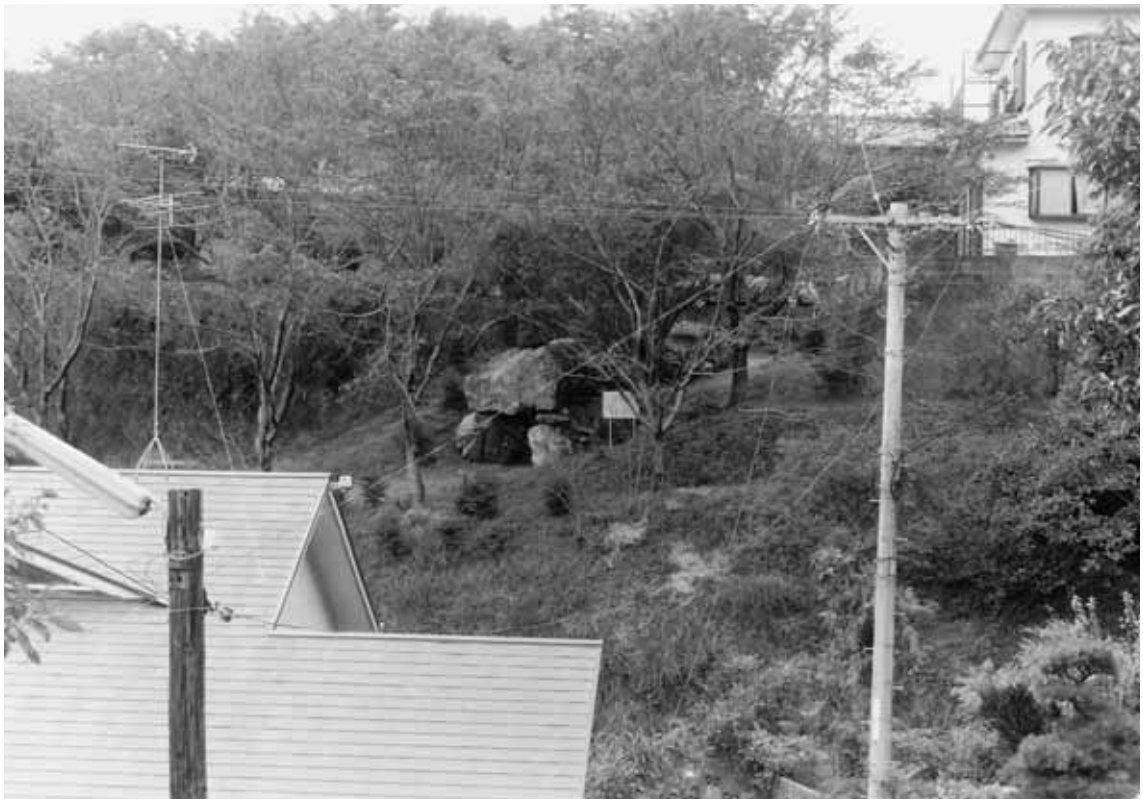
森下英治　1995『角塚-大野原町中央公園造成工事に伴う確認調査概要報告-』大野原町教育委員会、香川

挿図出典

図35：吉備町教育委員会　1994『天満１号墳（泣沢女の古墳）』、和歌山

図　版

⑴　古墳の立地

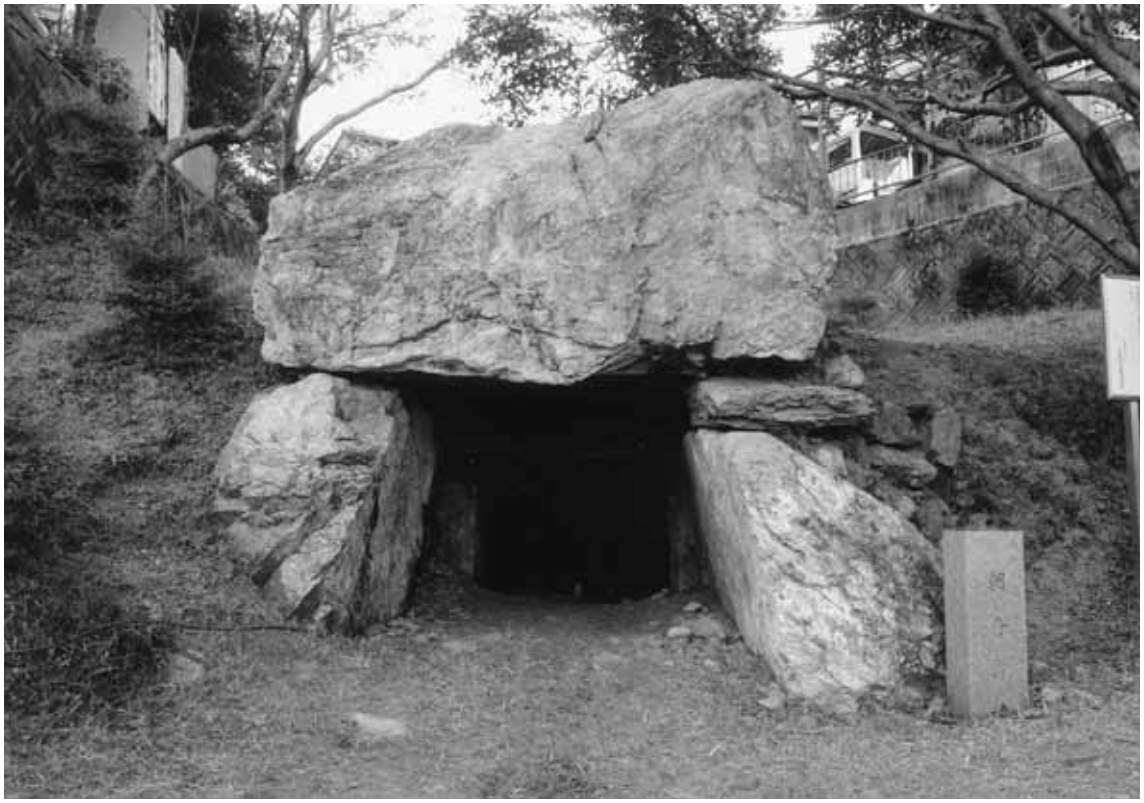


⑵　古墳遠景

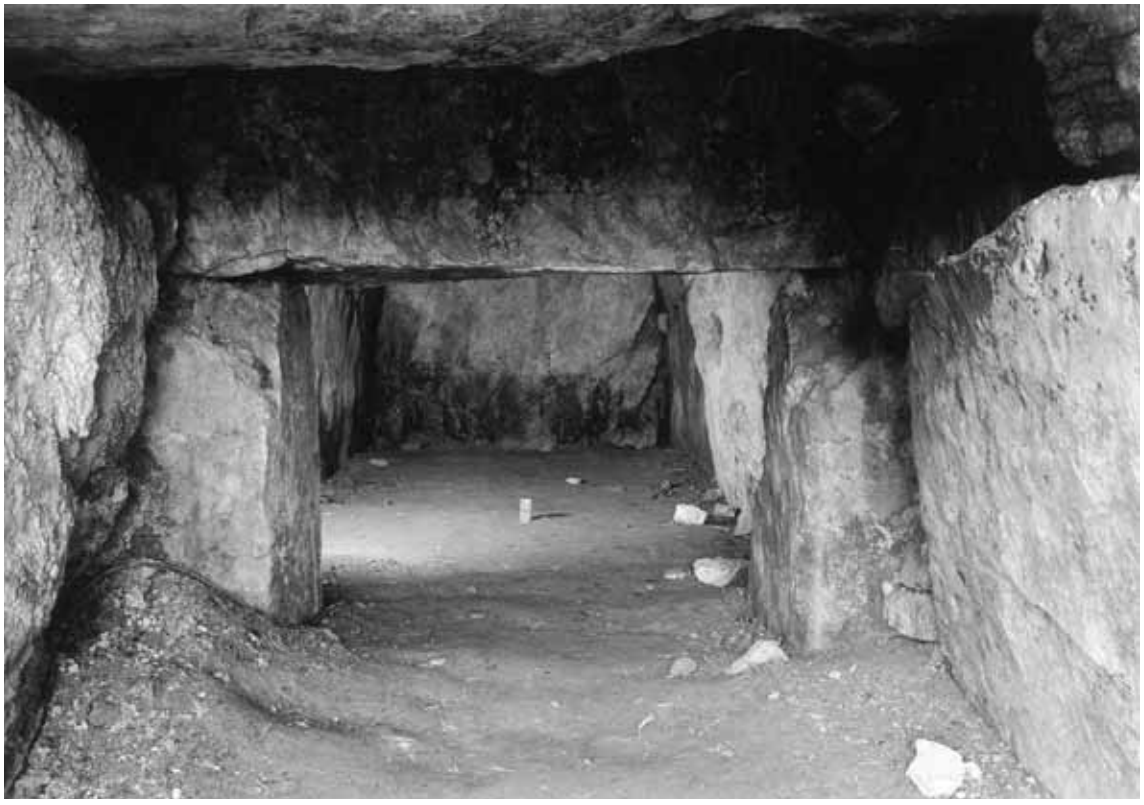
図版２

⑴　1971年当時の朝倉古墳（高知県教育委員会文化財課提供）

⑵　開発前の朝倉古墳（高知県教育委員会文化財課提供）



⑴　横穴式石室掘削前写真



⑵　横穴式石室掘削前写真２

図版４

⑴　天井石露出状況１（北から）

⑵　天井石露出状況２（西から）

⑴　墳丘第１トレンチ（西から）

⑵　墳丘第１トレンチ（南から）

図版６

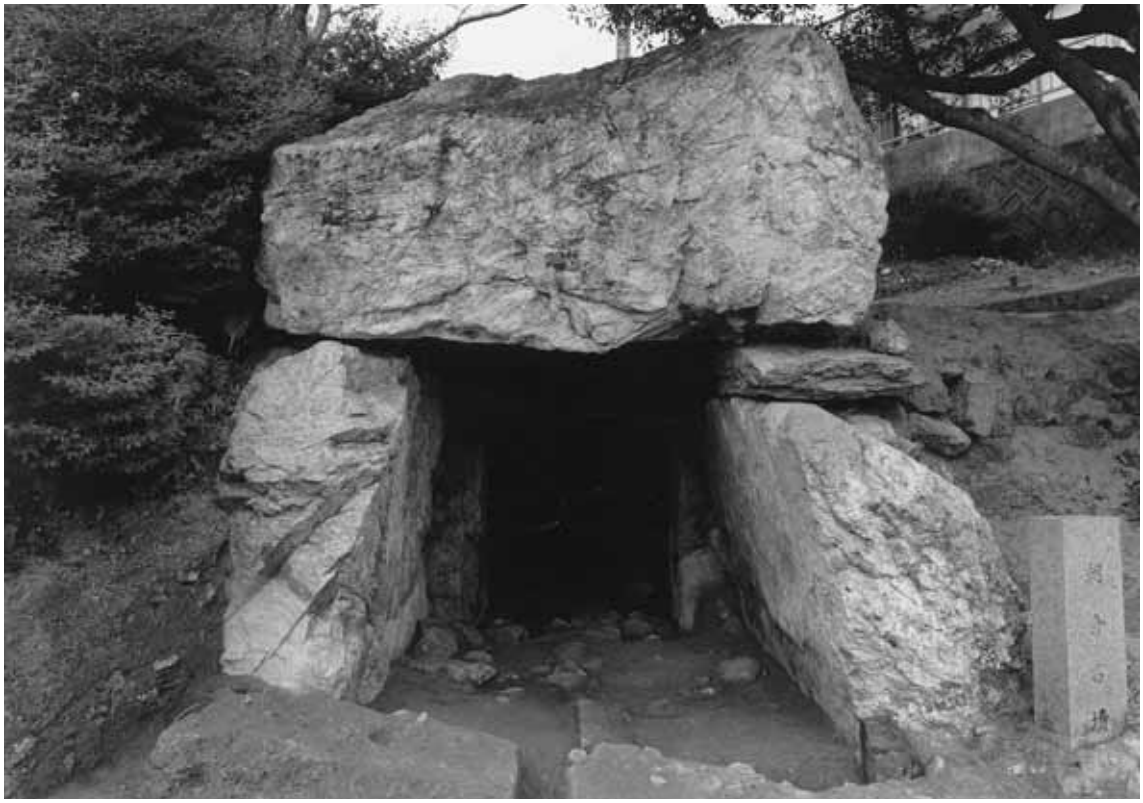
(1)　墳丘第２トレンチ（北から）

(2)　墳丘第２トレンチ（南から）

⑴　羨道入り口

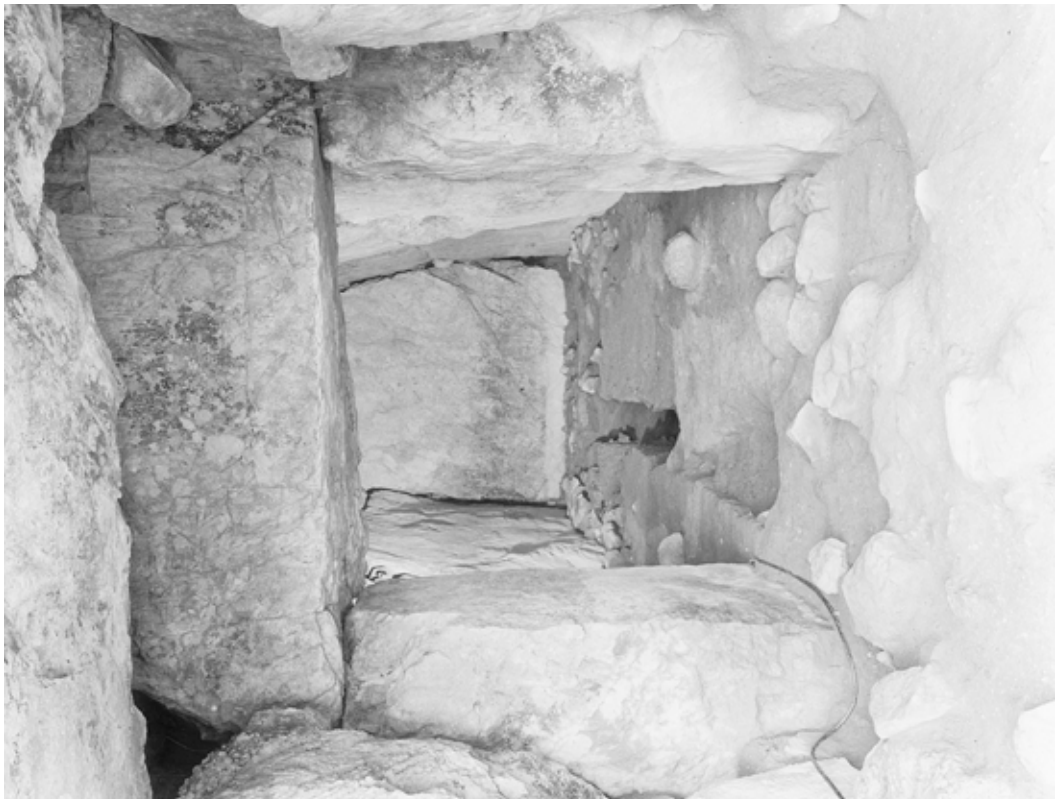
⑵　前庭

図版８

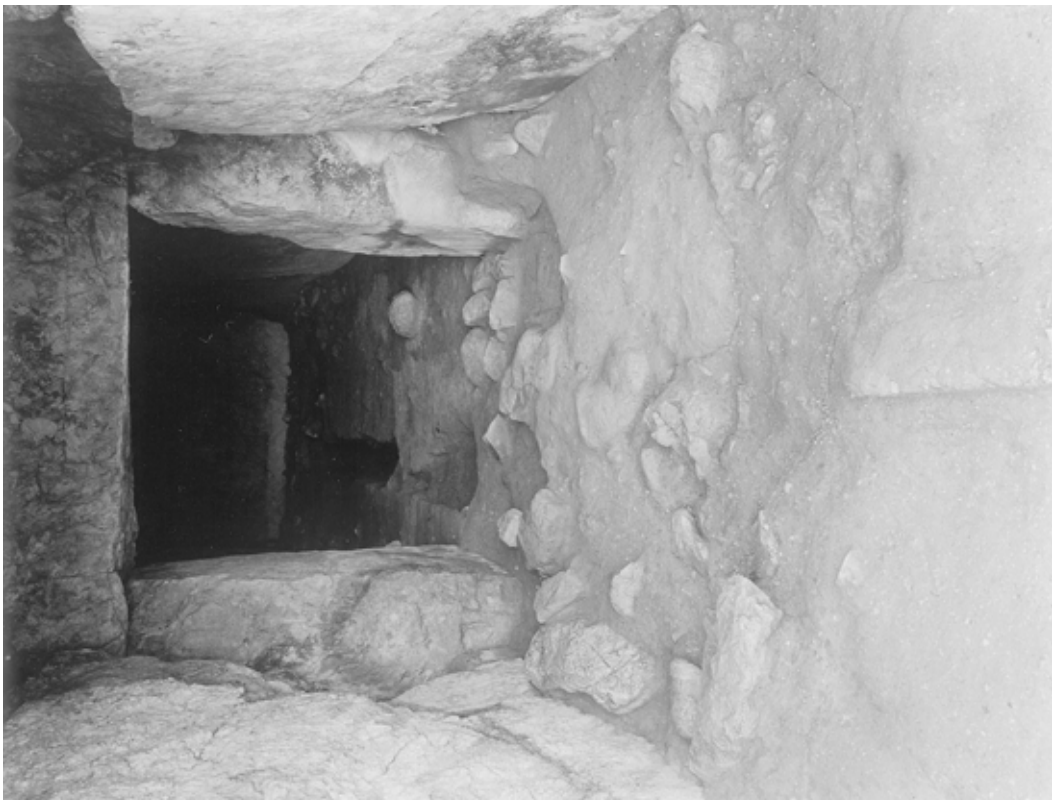


(1)　石室正面

(2)　玄門

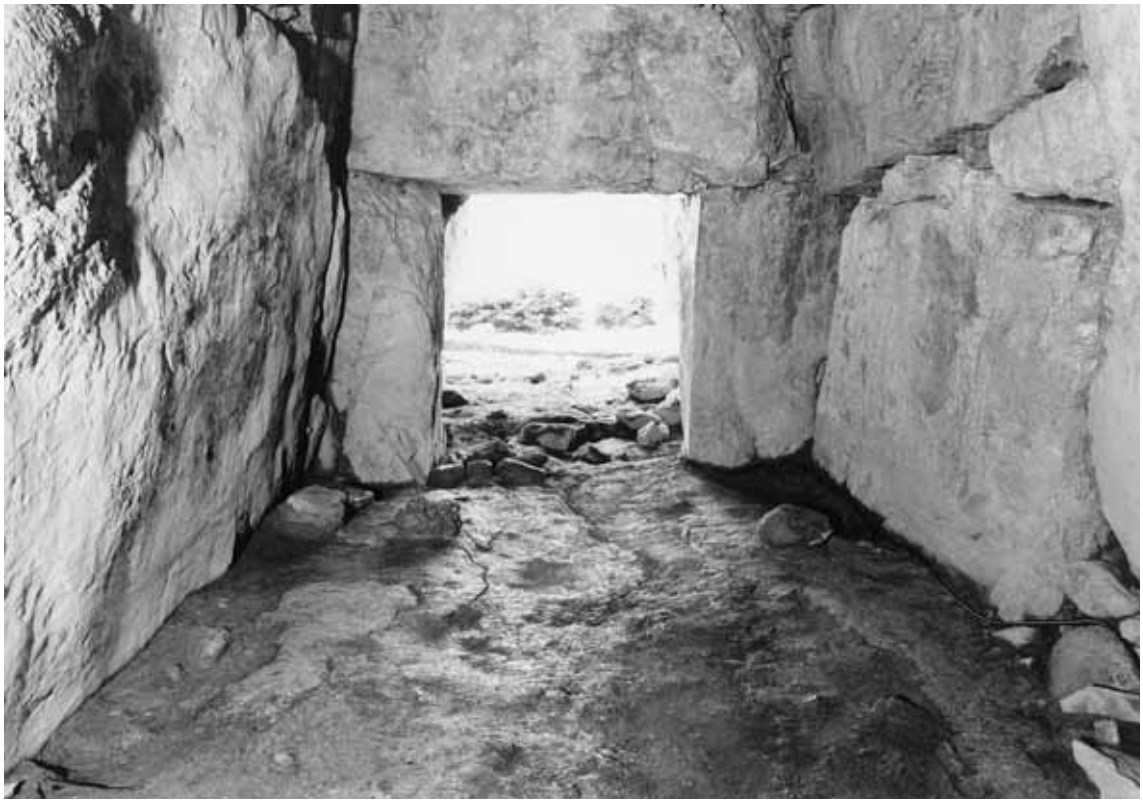


(1)　羨道・玄室



(2)　玄門・羨道床面

図版10



(1)　玄門と床面（奥壁から）

(2)　断ち割り後の玄門と床面（奥壁から）

(1)　玄室全景

(2)　玄室全景（断ち割り後）

図版12

(1)　玄室奥壁

(2)　玄室床面

(1)　９Ａ区・10Ａ区敷石（北から）

(2)　８Ａ区床面と盗掘坑断ち割り

(3)　敷石検出状況（玄室８Ｂ区）

(4)　敷石検出状況（玄門部）

図版14

(1)　玄室右側壁（羨道から）

(2)　玄室左側壁（羨道から）

(3)　玄室右側壁（奥壁から）

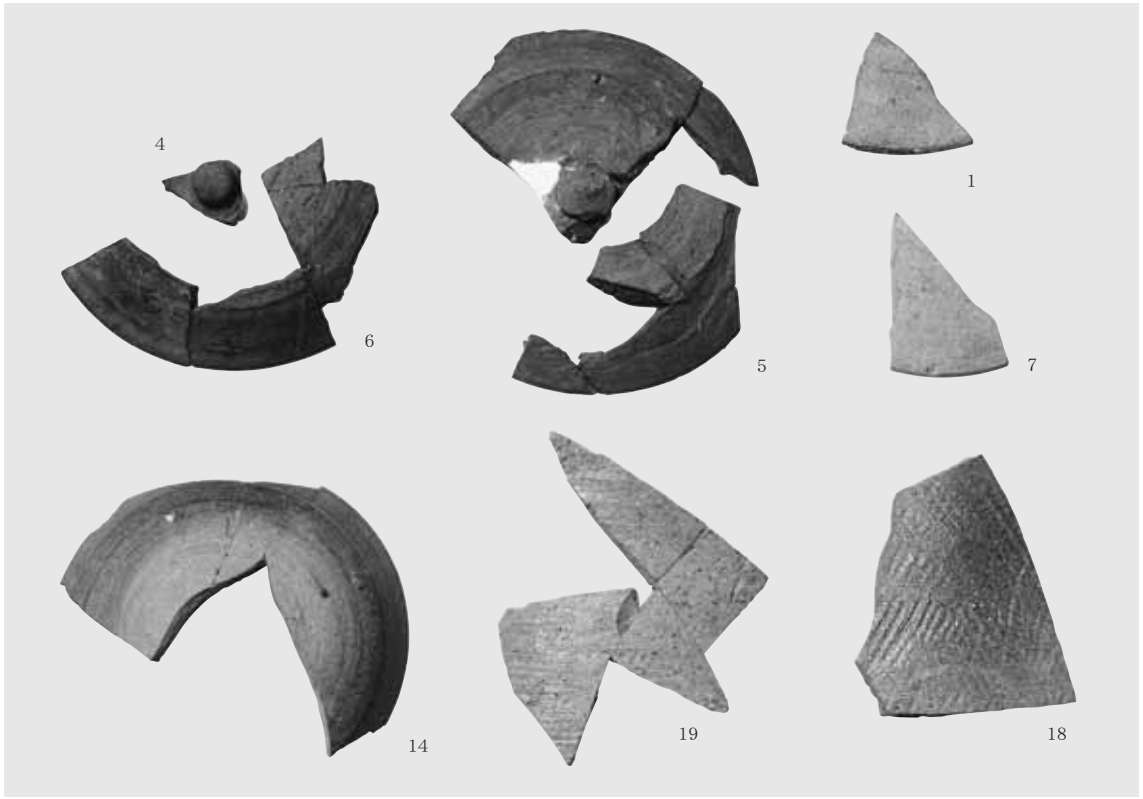
(4)　玄室左側壁（奥壁から）

(5)　羨道右側壁

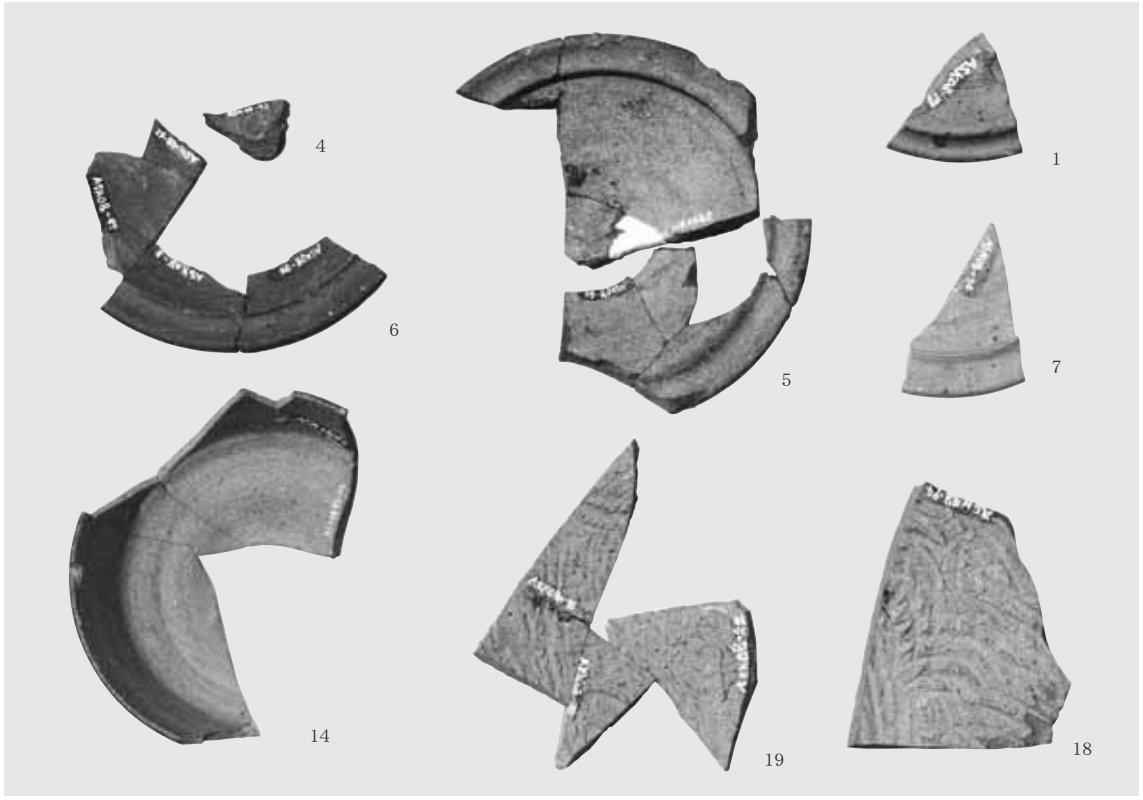
(6)　羨道左側壁

(7)　Ｅ１Ａ区南拡張区南壁

(8)　羨道右側壁先端部

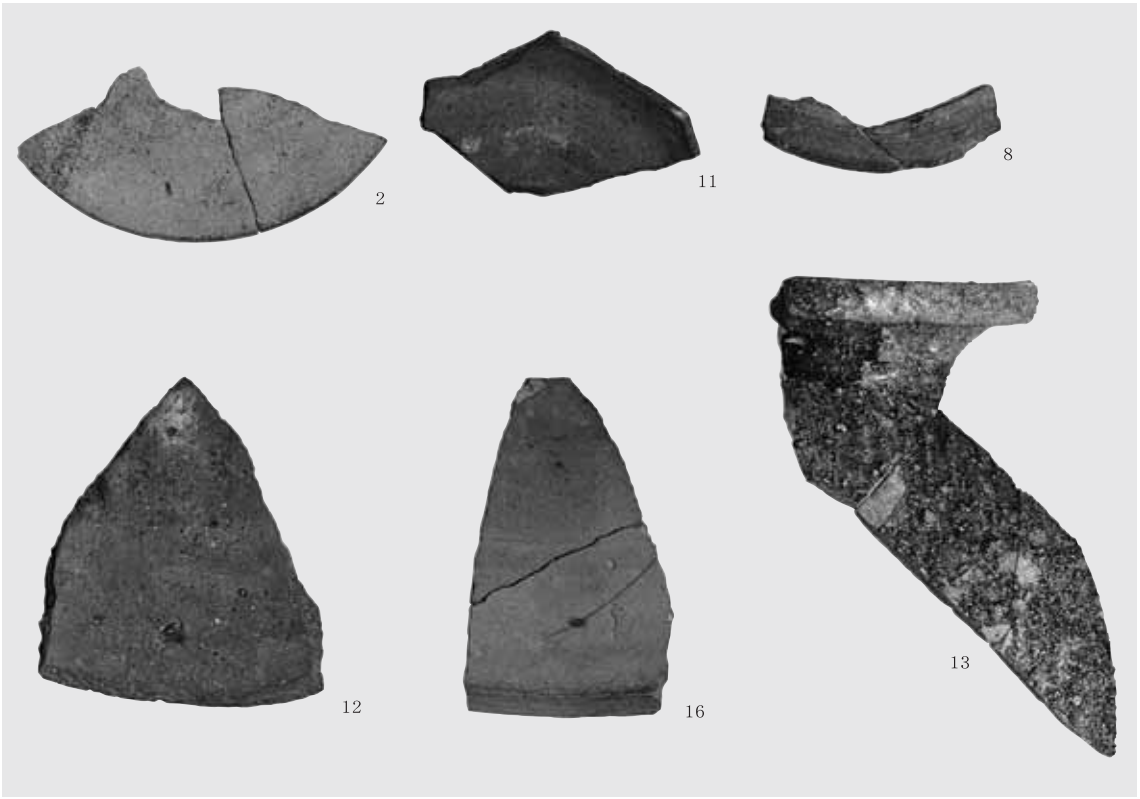


(1)　古墳時代の土器１（番号は図29に対応）

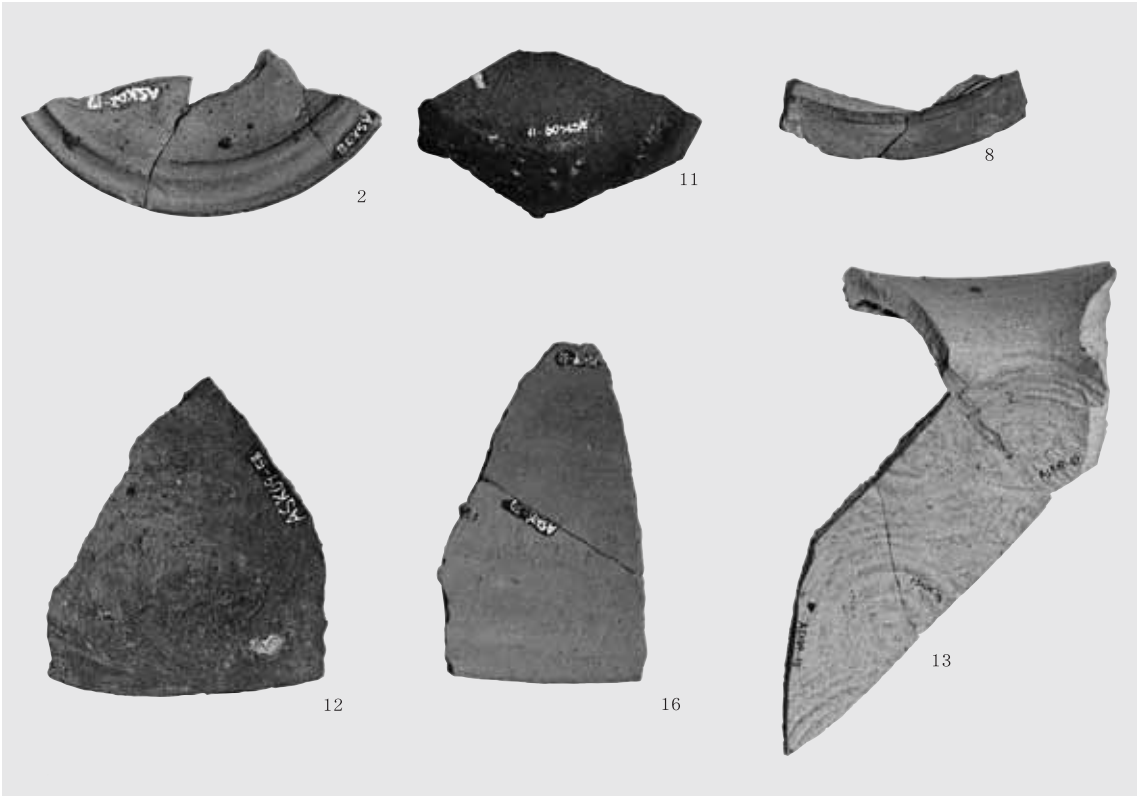


(2)　古墳時代の土器１裏面（番号は図29に対応）

図版16



(1)　古墳時代の土器２（番号は図29に対応）

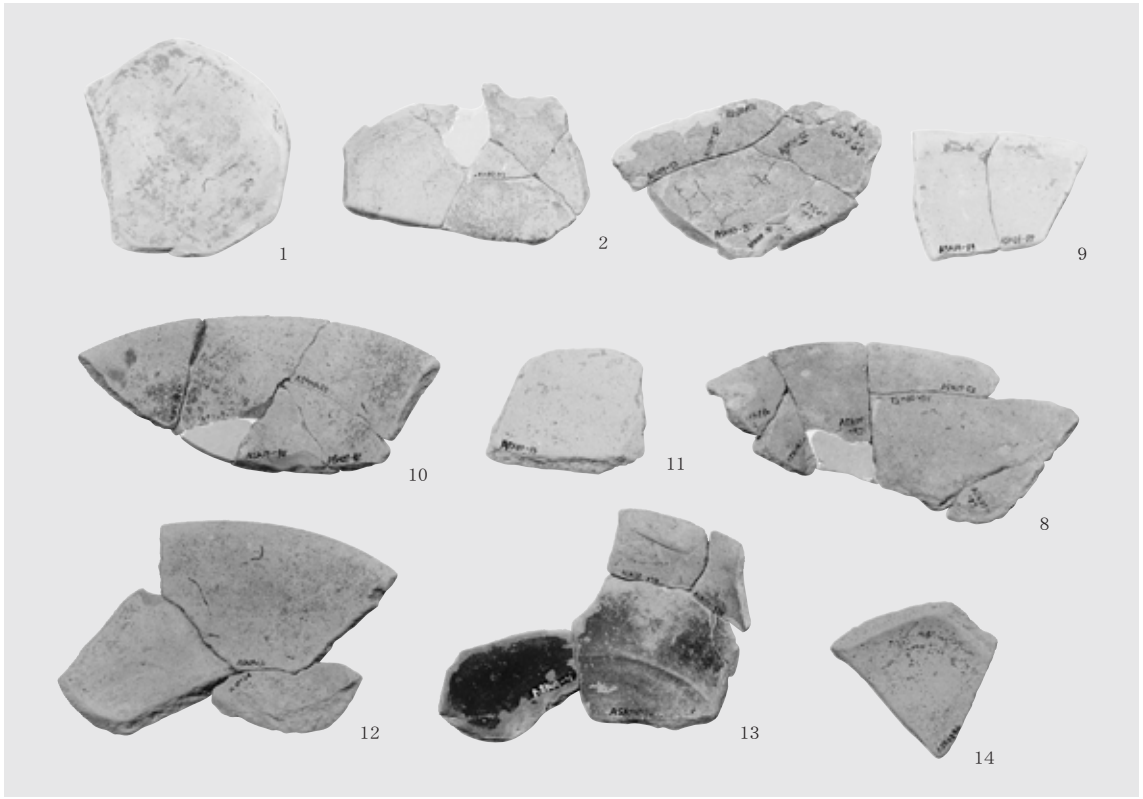


(2)　古墳時代の土器２裏面（番号は図29に対応）

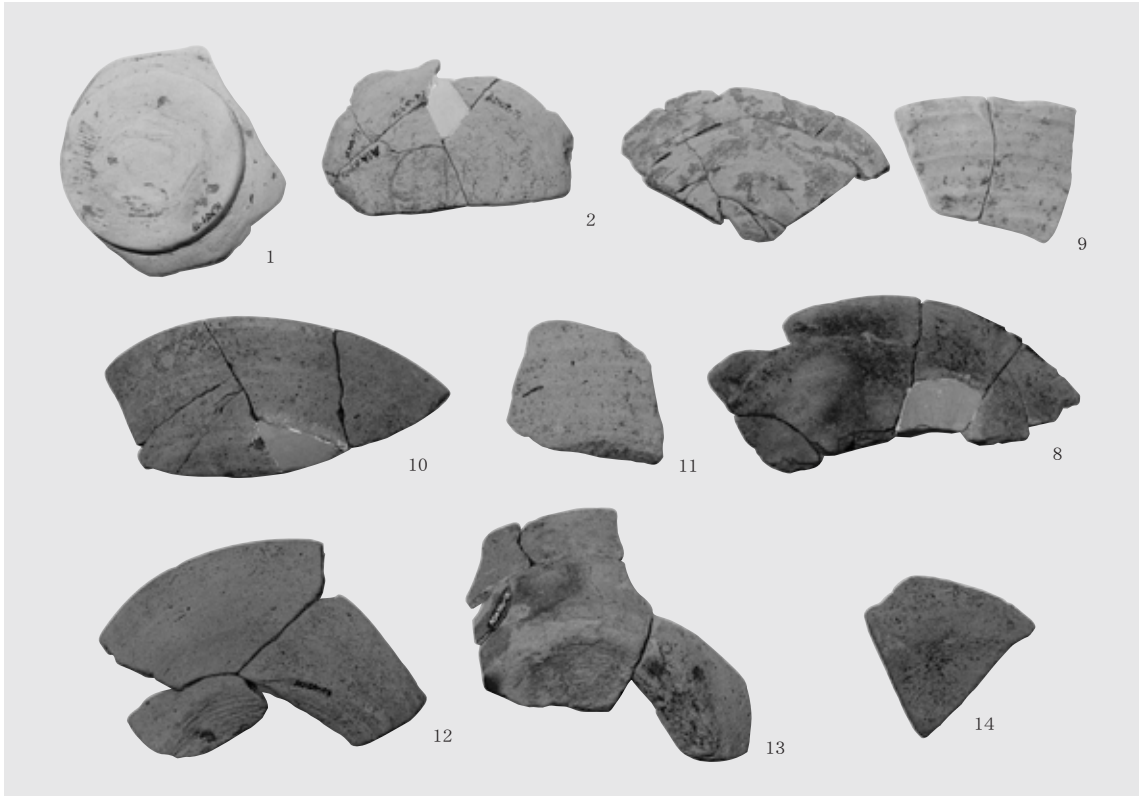
(1)　古墳時代の土器３（番号は図29に対応）

(2)　古墳時代の鉄器（番号は図32に対応）

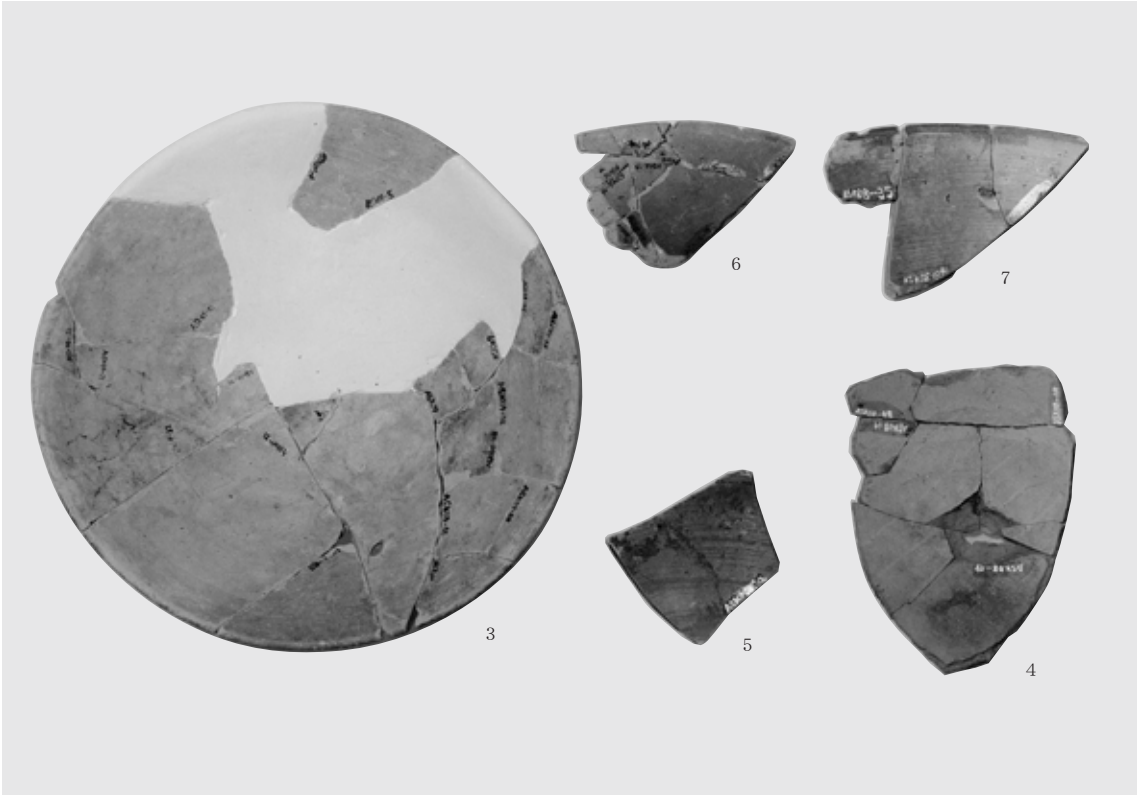
図版18



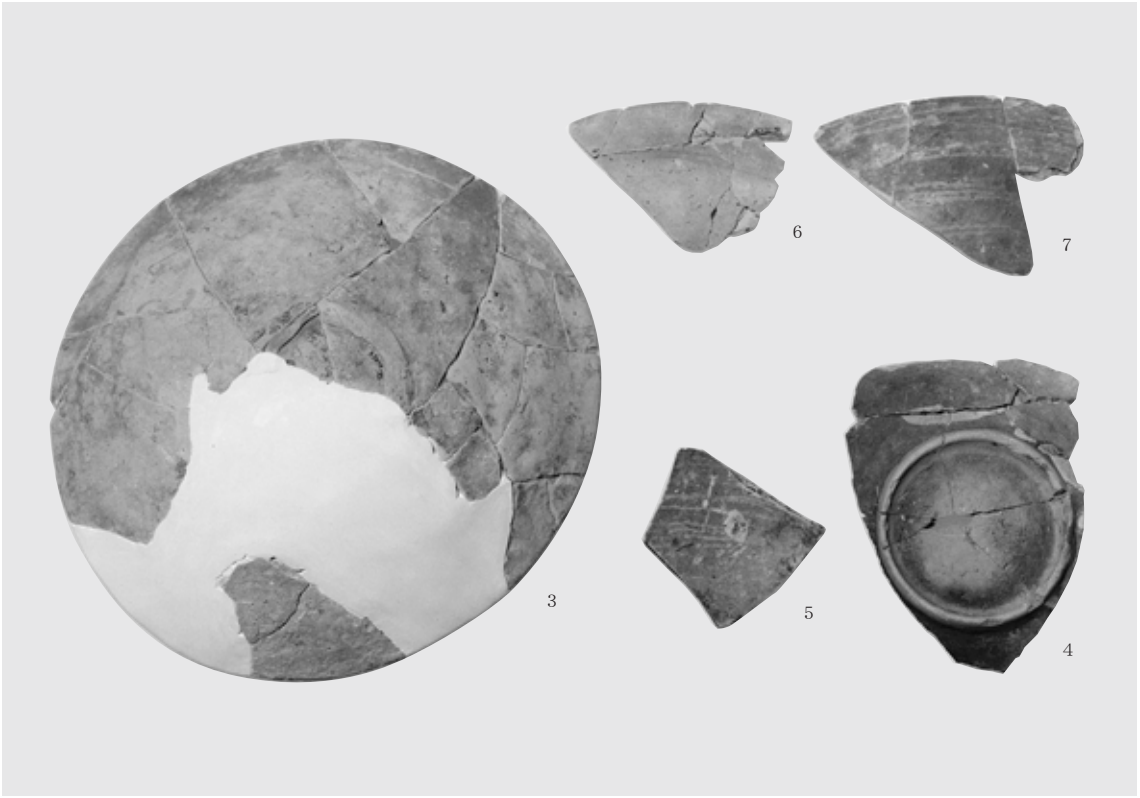
(1)　古代・中世の土器（番号は図30に対応）



(2)　古代・中世の土器裏面（番号は図30に対応）

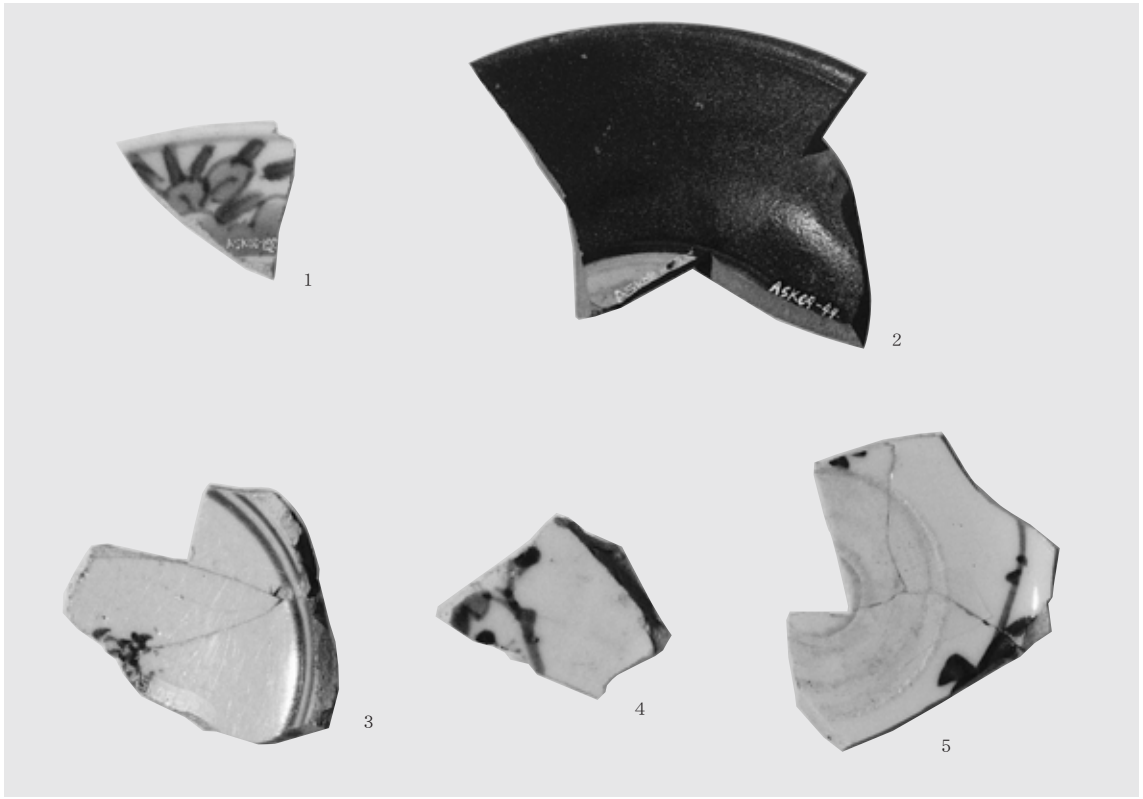


(1)　瓦器（番号は図30に対応）



(2)　瓦器裏面（番号は図30に対応）

図版20



(1)　近世陶磁器（番号は図31に対応）

(2)　青銅器（上段番号は図32に対応）

【報告書抄録】

ふりがな	こふんじだいしゅうまつきのおおがたよこあなしきせきしつにみるせとうちとそのしゅうへんのせいじてきかんけい
書名	古墳時代終末期の大型横穴式石室にみる瀬戸内とその周辺の政治的関係
副書名	
シリーズ名	高知大学考古学調査研究報告
シリーズ番号	第10冊
編著者名	清家　章（編者）
発行機関	高知大学人文学部考古学研究室
所在地	高知市曙町２－５－１

所収遺跡名	所在地	コード	
		市町村	遺跡番号
朝倉古墳	高知市朝倉字宮の奥	２０１	０１０００７

北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
33° 33′ 03″	133° 28′ 40″	040805～040815 080802～080901 090817～090925	51㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
朝倉古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室	須恵器・瓦器・陶磁器	

古墳時代終末期の大型横穴式石室にみる
瀬戸内とその周辺の政治的関係

－高知大学考古学調査研究報告第10冊－

2012年３月発行

編集　清家　章
発行　高知大学人文学部考古学研究室
〒780-8520　高知市曙町２－５－１

印刷　有限会社　西村謄写堂